
時 報

No.12

1963. 9

大阪大学山岳会

chemical medical Technical
Book Store

内外自然科学
書籍、雑誌
文具

近郊は御配達申し上げます

大阪
厚生社

栗田書店

振替口座 大阪 17000
電話福島 (458) 1730番

工学部店

都島区東野田町九丁目
阪大工学部内 TEL (36) 4327番

営業所

福島区南一丁目八 平野ビル内
(但、阪大附属病院裏) TEL (456) 7755番

奈良店

橿原市四条町
奈良医大内 TEL 大和橿原 3051番

時 報 才 1 2 号 目 次

巻 頭 言	篠 田 軍 治	1
リ ー タ ー 所 感 「 3 7 年 度 を 回 顧 し て 」	梶 本 孝 治	3

富 士 山 遺 難 報 告 (1 9 6 1 年 1 1 月)

報 告	酒 井 次 郎	5
日 誌		8
会 計 報 告		11
追 悼 登 山		11

1 9 6 0 年 度 報 告

夏 山 合 宿 報 告	広 瀬 貞 雄	13
「千丈沢をベースとして」		
冬 山 合 宿 報 告	田 村 俊 秀	15
① 両 俣 隊 ② 千 枚 岳 ・ 赤 石 岳 隊		
③ 西 俣 隊 ④ 北 沢 隊 ⑤ 鋸 隊		
春 山 合 宿 報 告	酒 井 次 郎	22
「剣岳八ツ峰を末端から」		
一 般 山 行 報 告		27

1 9 6 1 年 度 報 告

夏 山 合 宿 報 告		29
「剣岳一峰東面を中心として」		
冬 山 合 宿 報 告	広 瀬 貞 雄	34
「ゼミナールと近畿の山歩き」		
春 山 合 宿 報 告	梶 本 孝 治	37
「北又小屋-イブナ山-朝日岳-白馬岳」		
一 報 山 行 報 告		57
会 計 報 告		60

1962年度報告

夏山合宿報告	梶本孝治	62
「山小屋建設ボツカ及び穂高岳澗沢定着合宿」		
冬山合宿報告	梶本孝治	66
「樽池-白馬三山往復」		
春山合宿報告	横尾秀次郎	85
「日本海より五竜岳へ」		
一般山行報告		111
部会・トレーニング報告		116
会計報告		119

黒部川立石周辺より (1960年8月)	佐藤毅・保母武彦	119
北アルプス中央横断 (1961年5月)	玉井康雄	124
赤牛岳より黒部川 (1962年5月)	牧野大輔	128
黒部川上の廊下 (1962年8月)	高田邦雄	133

山小屋「梅ノ木寮」に関して

I 梅ノ木寮建設候補地決定の過程	浜田彰三	137
II 設計面に関して	木原秀卓	139
III 山小屋での生活	栗原完二	140
ピーク29峰遠征日誌		141
ピーク29峰遠征会計報告		147
文献邦訳	徳永篤司・松久博・坪井圭之助共訳	148
「高度の人体に及ぼす影響」(L.G.C.ピユウ, M.P.ワード著)		
会員名簿		158
編集後記		169

山の家その他

篠田軍治

ヒマラヤから帰ると、さつそく山の家建設事業が待つていた。山の家は体育会で作るのだが山岳部は重要な役割りを果たさなければならぬ。候補地も正式にきまり、村との下交渉も順調に進行したので、三十六年十一月二十日過ぎ、長野県庁へ行き梅池一帯の開発計画を聞き、国立公園地帯なので建築許可などに種々の手続きがある。それらの打合せを済まし、細野で浜田君と落ち合つて香掛に向つた。

山の家の手配地、神の田圃は小谷村の五部落の入会地なので借地のためには五部落代表の諒解が必要である。手続きも無事済ませ、香掛の猪股直衛宅で一席設けた。これから寝もたけなわになろうというとき、有線電話は富士山遭難を伝えて来た。詳細はもちろんなわからない。しかし一名死亡ということはどうやら確からしい。中央線の方はもう夜半まで汽車がない。糸魚川廻りで帰阪することにして、富山で毎日支局の佐藤OBと会つて情報を聞く手配をした。

富山で準急に乗換える時間を利用して佐藤君に会つたが詳しいことはわからない。大阪へ着いてみると間もなく遺骨が到着したので駅のプラットフォームで迎えた。富士山遭難のことは酒井君の詳しい報告があるから、ここではあまり触れないことにする。富士山では今までに何回も大学山岳部が遭難を起こしているだけに相当警戒したつもりであつた。リーダーから出発前に計画その他を聞いていて、これなら大体間違ひはなからうと思つてしたが、遭難を起こした後で隊の構成、その他今までと違つた点が多がつたことを知つて、それならば今までと

違つた行き方をしなければならなかつた、もう少し突つ込んで詳細を聞いて検討して、適切な指示をすべきだつたと残念でならなかつた。

八方尾根も黒菱の上までリフトで行けるようになる。唐松も簡単になり、今まで八方池附近で冬山のトレッキングができていたのが今度はどうしても、もつと上の方に持つて行かなくてはならなくなつた。富士山の冬山訓練の場も確かに今までよりも上の方に選ばなくてはならないようになって来た。しかし一旦荒れ出したら山は山で、交通が便利になつても、むつかしきは少しも減つていない。

今度、阪大の山の家も神の田圃にできて、交通もこれから便利になる一方である。榎池を中心とした優れた山が阪大生になじみの深いものになることは大いによいことであり、学生々活に大きなプラスになることは明らかだが、一面、交通が便利になつて大勢の人に利用されるようになる、遭難を起ささないような対策が益々重要ものになつて来る。今まで山岳部は部の活動が全く中心で、一般学生を対象とした事業はあまり行なつていない。榎の木寮は体育会に所屬し、建設にはスキー部、ワンダーフォーゲル部が山岳部と共に参加したわけであるが、今後、山の家の利用者に遭難者を出さない対策とか、環境整備の問題などになると山岳部の果たすべき役割りは大きい。山岳部としては部の活動に山の家を大いに利用して成果を挙げると共に、このような対学生社会への責任を果たすことが重要であり、また大いに意義のあるものと思われる。

。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。

私事に亘つて恐縮だがヒマラヤ遠征中ベースキャンプで発病して大勢の方達に御心配をお掛けしたことを深く御詫びする次第であります。

リーダー所感

一三十七年度を回顧して一

梶 本 孝 治

援助で事後処理もかたずき、山岳部の活動も再び始まった。私がチーフリーダーを受け継いだのはこの当時である。この時、我々は再出発を期して、絶対事故のない山行、部活動をと、胸に深く秘めて三月に春山合宿に向つたのであつた。事

富士山で堀井君を失つて、早や一年数ヶ月になる。当時、この事故はまさに部にとつて青天へ、きれきの出来事であつた。これ以前にもチンネの事故などかなり危ない事もあつたが、好運にも我々にとつて、死という事は全く他人事に思われていた。それだけに堀井君の死に直面した時、遺体を前にただ果然と立ちすくむまゝであつた。あの時の光景は今も消え難く、胸をえぐられる思いだ。私は今は亡き堀井君の追悼のふさわしい言葉を知らない。たゞたゞ、山岳部の活動に再びこのような不幸な事故を断じて起してはならない。

我々は、山岳部創立以来の始めて大きな壁につき当たつたような気がする。幸い事故後、数ヶ月、先輩の温かい

故の無い山行、これは当然の事ながら、過去、部が出来て以来ずっと死亡事故が無かつた事は何ものにも勝る記録であつた。記録的な山行といわれるものも、無事故の活動のもとに価値のある事で、一度事故の苦杯をなめた我々には、記録的とか、高度な、とかいう事が取るにたらないようにさえも思われたのである。

ともかく、富士遭難を始め、事故が相次いで起つた今までの活動の失敗の原因を明らかにし今後の活動の確固たる基盤をなす事がリーダーとしての責任であると考えた。事故後幾度かなされた反省会、先輩の批判と指導を受け、さらに私自身、「時報」を一号より徹底的に読んで、先輩達が山行を通して何を学び、何を考えて来たかを知り、この問題を少しでも明らかにし、解決しようとする

した。又、私なりに再び山への自信を持てるようにと努めた。以後一年間の部活動の一貫した考えは、これらの問題を一つ一つ確実に解決する事であつた。

この間、大学山岳部というものを白紙の立場から考え直し、納得の行くまで論議し合つたのも、今後、有形無形に意義のある事と思う。

我々、大学山岳部は常にチームプレーとして山を登つてゐる。部活動も自然と合宿が中心である。だが、このチームという、かくれみのをかぶつて、各自が力をかいかぶつたり、その中の個人個人がコンプリート・マウンティニアリーとしての性格が失われていないだろうか。そして一部のリーダーグループのもとにある者はポーターに甘んじてはいないだろうか。合宿形態や山行計画について議論するよりも、山岳部の活動の中にあつて、各個人は「コンプリート・マウンティニアリーを目ざして基礎を修得する」という自覚に徹したらどうだろうか。これを前提として、初めて大学山岳部というチームの意義と、その特性が生かされると思う。

阪大山岳部は過去十数年、後立東面、稜線、そして黒部周辺へと脈々と流れる伝統のもと発展して来た。だが現在、我々がこの記録に接する時、先輩達の殿しい自己

批判と、ひたむきな努力を知らずして、いたずらに伝統を追うならば、再び奈落の底につき落されるだろう。

大学山岳部はその構成メンバーが毎年代る、しかも、新入部員は登山はほとんどずぶの素人である。従つて、山岳部の活動主目標は先に述べた「基礎の習得」であるべきだ。上級部員が、或いはリーダーがそれを軽視し、記録的と言う名目のもと新人の訓練をおろそかにするようなことがあれば、これは山岳部の前途を憂うべきことだ。

一方、山の方も、北アルプス等について言うならば、主なルートはトレースされ尽くした感がある。先輩達があらがれた「黒部」もすつかり未知のヴェールをはがれてしまつた。しかし、我々大学山岳部は目標もなく、ひたすら先人の足跡をたどることに甘んずべきでないと思う。あくまで「将来の高い目標を目ざしての基礎の習得」に励むべきだと強調しよう。

私は、日本の山でいたずらに手をこまぬいていたり、一人よがりな悪あがきの山行に走るより、一步、大きく前進して、この将来の高い目標として、ヒマラヤを主張したい。今後幾度も阪大山岳会のヒマラヤ遠征隊がこの可能性を十分裏つけて来れるだろう。このように夢をヒマラヤの高峰にはせ、常に新しい登山を、立派な登山を目ざして、ひたむきな努力をすることこそ、スポーツアルピニズムの本筋だと思ふ。

富士山遭難報告

(1 9 6 1 年 1 1 月)

一九六一年十一月

富士山遭難報告

酒井次郎

はじめに

一九六一年十一月廿五日、我々は遂に富士山で岳友堀井昭彦君を失った。創立以来、無遭難という輝かしい伝統を遂に守り切る事ができなかつた我々山岳部員一同は、亡き岳友の冥福を祈り、再び事故を起す事のない様尽さねばならない。

夏山シーズンに、岡久、大川、打出と三つのスリッパ事故を起した後、我々は度重なる反省会を持ち、その原因を追求し、部長、先輩諸氏の注意を求め、決して犠牲者を出さまいと、今後の部のあり方を根本的に考え直した。その結果侥幸に恵まれなくとも、自力で成しとげられる対象を選び、先人の歩んだ道をたどつて、登山たるものを考え直し、且つ基礎から復習しなおそうとして、遠見屋根のポーターを冬山合宿に決定した。十一月初旬に冬山偵察、及び、春山合宿の為の荷上げを行なつた。

そして十一月下旬の連休を利用した、昨年に行けなかつた富士山への雪上訓練の為の山行がリーダー会で立案された。参加者が確定して十一月十六日の部会に、上級部員によつて集められた参考資料・スライドによつて、富士山の概念をつかみ、気象、地形、及び諸注意を検討した。チーフリーダーを含めた十四名のメンバー構成も整い、廿一日に最終打合せを行つて廿二日の夜行で大阪を出発した。

〔予定期間〕

十一月廿三日～十一月廿六日

〔参加者〕

酒井(リーダー・工四年)

前沢(工四)・梶本(工三)・山本(法三)

横尾(工二)・高田(経二)・笠原(法三)

桑原(工二)・吉川(理一)・牧野(理一)

豊坂(医二)・秋濃(基礎工一)

田井(O.B)

堀井昭彦(工教・一)

〔経過報告〕

十一月廿二日夜、大阪発。

十一月廿三日(曇)富士吉田より小型バスで富士山五合目迄入る。五・五合目から雪があつた。七合目にテ

トを三張設置。午後大沢でアイゼンを着用して登降訓練、ピツケルによる滑路停止の訓練に力を入れた。

十一月廿四日（晴）一名テントキーパーを残し、堀井君を含む十三名で、夏道より富士頂上を往復。雪は固くしまつておりアイゼンがよく利いた。午後から強風となる。

十一月廿五日（快晴）。三名（上梶本）は大沢より山頂往復。他十名（上酒井、堀井君を含む）は八合目まで雪上訓練の予定で七時卅分テント発。大沢を通つて状態がよかつたので九合目に到達した。昼食後十一時廿分下降にかゝつた。夏道は風当りが強い為、ツバクロ沢側を下り、八・五合目附近で再びツバクロ沢を右岸から左岸に戻ろうとした。このルートは昨日通つたルートであった。十一時三十分突風待避の姿勢から歩行に移る際、二年部員の間にいた堀井君は右足を滑らしてバランスを崩して滑落、二十米程滑つてピツケルによるストツプ動作を行つたが、ピツケルから手が離れた為、そのままツバクロ沢下部へ滑落して行つた。田井OB・前沢は直ぐその後を追つて下降した。酒井等は他のメンバーをテント地に誘導後、現地に急行。

十二時十分、前沢・田井は六合目ツバクロ沢下部で堀井君を発見。頭蓋骨々折、既に脈なし、直ちに人工呼吸

を始めた。（人工呼吸は一時半まで行つたが、残念ながら効果はなかつた。）

十二時三十分。大町山の会の医師が通りかゝり、カンフル注射を行なう。堀井君を安定した場所に移し、各人ヤツケ、セーターをぬいで保温に努めた。

十三時三十分。医師により、死亡確認。小屋から戸板を運びシユラフに納めて、十四時より収容に移つた。

十六時、五合目佐藤小屋に収容。

十七時三十分、下からの自動車到着。田井、酒井がづきそつて富士吉田市の吉祥寺に納めた。夜になりテントは撤収困難の為、明朝撤収する事にした。

吉祥寺にて、直ちに検死を受け安置。通夜。

十一月二十六日

九時、御家族四名、及び大工原、西川OB到着。対面、納棺、読経をしていたゞく。だび、葬儀については富士吉田市観光課の方に一切お世話になる。広瀬OB、高橋、大阪より着。全員そろつて市火葬場で十三時十五分だびを行つた。

十七時。富士吉田発。

十一月二十七日

急行第二摂津で遺骨と共に帰阪。尚、残務整理の為二名富士吉田に残り残務整理を終えた夜帰阪した。

十一月廿八日

午後四時—五時自宅で葬儀を行い、午後六時から学生部会議室で事故処理、打合せ会を行った。

(反 省)

十一月二十九日のリーダー会に於て、今度の事故についてあらゆる面から我々リーダーグループの非を反省した。

先ず富士山に於ける事故反省の主問題点を日を追つて取り上げて行く。

二十三日。

○小型バスに便乗した事は、雪上訓練を主課題とした山行であつたので、時間をその目的に使う為であつた。しかし結果的にみると、堀井君の場合は、純然たる素人といきなり冬の稜線へ連れて上つた事になる。

○アイゼン技術の練習を、ピツケルによる滑落停止の練習の前に行つた事。当日は、アイゼンをつけてテント設置地まで来ていた為、アイゼンをはずして滑落停止の練習をする前にアイゼンをはいた登降を練習した。その場の雰囲気によつて判断を左右された感じが強く、リーダーは小さな事柄にまで細心の注意を払つて、正當な判断をしなければならぬという事を全員強く反省しあつた又、テント地の選定についても、団体行動の際は、最

も弱い人の調子に合わせる」という原則を嚴格に守つていれば、初めての人にアイゼンをつけさせてまで高所に上らなくても、適切なテント地を選べたであろう。

二十四日。

○ザイルを使用して、コンテイニアスで歩行する事は、我々上級部員でも、まだ習熟していないので、安全度をます物と断言する事が出来ないため、一応コンテイニアスによる歩行を行つていない。しかし、今回の山行は雪上訓練を目的とした山行であつたから、リーダーズメンパーが、状況判断をして、十分検討しあつた上でない限り、一年生を登頂させるべきではなかつた。

二十五日。

○昨日の経験で、富士山の強風を十分警戒し、他のパーティーの事故を知つていたのであるから、より慎重に、パーティーの能力を見極めた上で、雪上訓練を行うべきであつた。

○ピツケルによる滑落停止は、前日までの練習を見てみると一寸のスリップぐらいとめる事が出来るだろうと判断していたが、実際にはいざとなつたら夏山合宿なり、これまで経験した人に比べて、格段の差が現れるという事を、頭においておくべきであつた。

以上の主問題だけに限らず、最も強く反省しなければならぬ事は

「部員の状況の把握・状況判断に対するリーダーズメンターの認識がルーズである」

という事であった。現在まで、痛ましい犠牲者が出なかつたのは、全くの幸運であつたにすぎない。再びこの惨

な不幸を繰り返さないよう、先ずリーダー会のあり方を根本から再確認し、一年生の年間トレーニングの計画を再検討して行く事を、全員心から誓ひあつた。それが、もはや山行を共にする事の出来ない岳友への我々の使命である。

概 要 日 誌

日	場所	概 要	日 誌
22 日	富士吉田	夜大阪発	
23 日	ワ合田天幕設置・技術訓練		
24 日	本峰往復		
25 日	11:30 事故発生 13:30 死亡確認 18:00 吉祥寺に安睡 18:30 大阪田村宅に打電	18:00 警察より電話連絡 20:30 現地より入電 21:45 遺族4名・部員1名現地へ急行 22:40 OBI名現地へ田村宅を連絡本部とする	18:00 警察より電話連絡 21:00 部員1名うかがうも現地へ出発された后だった。
26 日		1:00 部長宅へB宅に打電	

	<p>9:30 遺族部員1名 遺体対面</p> <p>10:00 OBI名着納棺式</p> <p>10:45 OBI名帰阪</p> <p>12:00 遺体火葬場へ</p> <p>13:00火 葬</p> <p>13:45 大阪へ連絡</p> <p>17:00 遺族・部員富士吉田 葬・2名は残務整理 の為残留</p> <p>22:00 大阪へT班</p>	<p>2:50 OBI名現役1名現地へ 現役部員留守宅 体 育 会 } 打電 在 阪 部 員 }</p> <p>8:30 学生課へ連絡員配属</p> <p>12:30 細野へT班</p> <p>13:10 沼津の西川OBIより入電</p> <p>13:45 現地より連絡T班</p> <p>16:20 篠田部長より入電</p> <p>18:00 学生課の連絡員引上げる</p> <p>22:00 現地よりT班</p>	<p>6:30 部員1名おくやみに 訪問</p> <p>9:00 森川(学生部長)訪問 OB・現役1名</p> <p>10:30 大島OBおくやみに</p>	<p>15:20 南小谷より打電</p>
27月	<p>病院 市役所 佐藤氏 吉祥寺</p>	<p>6:40 遺骨帰阪</p> <p>7:00 ステーションで現況 報告</p>	<p>5:40 在阪遺族大阪駅へ</p> <p>7:30 遺族帰宅</p>	<p>5:35 帰 阪</p>

28 日	堀井家にて告別式	12:00 残留部員大阪へ 13:30 学生課へ挨拶 18:00 JACルームで葬儀打合せ 22:00 富士吉田より2名帰阪	15:00 酒井・西垣・前沢・ 太島・木村・堀井宅 通夜 葬儀打合せ
29 日	18:00 OBをまじえて区省会、於学生会議室 リーダー会、報告会案内通知発送、転末書同時に発送		
30 日	初七日。部会(現役反省会) 工業教員養成所事務室へ死亡届提出。		
12/1 日	リーダー会(報告会準備・其他残務整理)		
3 日	公式報告会		
4 日	リーダー会		
5 日	リーダー会		
6 日	リーダー会 十四日(前沢・横尾・遺宅) 部会・リーダー会		
7 日	現地への礼状投函		
8 日	OBと懇親会		
10 日	OBと懇親会		
12 日	リーダー会		
14 日	廿一日(田井・打出・遺宅へ)		

OB

会計報告

富士追悼登山

責任者 高田邦雄

三十六年度は、夏山合宿、富士山行に於きまして、不名譽な遭難を起し、その收拾の爲の出費を捻出すべく、極力、現役部員から徴収致しましたが、やはり負担致しかね、先輩諸兄に御援助をお願い致しました。

多大な御迷惑をおかけしたにも拘らず、快よく御協力下さいました事を深く感謝致します。お蔭で收拾に導く事ができましたので、御報告させて頂きます。

〔総支出額〕

夏山・富士山行出費合計 一三八、二八〇円

〔収入〕

現役負担 八九、七九一円

先輩寄附 六〇、〇〇〇円

堀井家より寄附 五、〇〇〇円

(計) 一五四、七九一円

〔残高〕 一六、五一二円

尚、残高一六、五一二円は遭難対策基金として積立てさせて頂きました。

参加者 堀井君の御両親、吉川吉文君（堀井君の友人）

梶本、山本、豊坂、OB広瀬、田井、前沢、

以上九名

期間 一九六二年八月二十六日と二十八日

記録

八月二十六日、夜大阪発。台風の影響で列車が取り消しになり、一時間遅れて大阪駅を発つ。

八月二十七日、富士、富士宮を経てバスで富士吉田に入る。東海道線の延着のため予定よりも四時間遅れて、前夜より来ていた前沢と落ち合う。タクシーで馬返しまで行き、そこから登り出す。台風の直後なので、登山者がほとんどなく、五合目の佐藤小屋までは比較的眺望もき、追悼登山ではあるが、爽快な登りであった。日頃山に登っている私達よりも、堀井君のお父さんやお母さんの方が植物をよく知っておられるのに驚く、佐藤小屋で休憩の後、お中道よりツバクロ沢に向う。夏のツバクロ沢は荒涼としたガレ場で、一つ石を落とすと囲りの石が全部落ちてしまいそうな所だった。

お中道から少し登ったところでケルンを積み、花と線

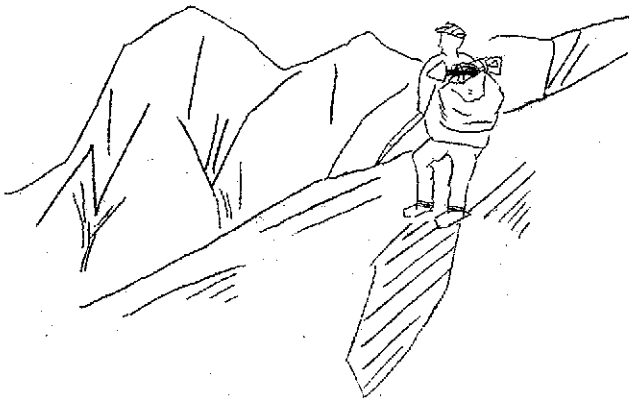
香と、生前堀井君の好きだったビールを供えて冥福を祈る。夕暮れの迫る頃、後髪をひかれる思いで往路をひきかえす。

五合目佐藤小屋泊り。

八月二十八日、朝佐藤小屋を出て七合目附近まで登る。以前お父さんはよくハイキングに行かれた旨、三〇〇〇米まで来たのは初めてだそうである。自分が山に登つてみると皆さんが山にひかれるのがわかるような気がするというお話を聞くと一層堀井君を失つたことに対する責任を感じる。

午後は富士吉田に下り、昨年色々お世話戴いた富士吉田市観光課の渡辺課長さんの所にお礼に伺う。富士吉田で解散。お母さんと田井、前沢は急行「富士」で東京へ出て帰路につく、お父さんと吉川君と広瀬の三人は御殿場を経て沼津へぬける。山中湖で途中下車すると暫くして雨が降り出す。昨年十一月この附近から見た富士は新雪に夕日を浴びて、これが遭難のあつた山かと思う程美しかったが、今日は雨雲にかくれて、何処にあるかすらわからなかつた。

(広瀬記)



= 1 9 6 0 年 度 報 告 =

1 千丈沢をベースとして1

広瀬貞雄

昨年ひきつづき千丈沢で合宿を行った。

参加人員は三十八名で期間は七月二十日から十日間の予定であった。このような多人数の合宿には当然二バーテイ以上の分散合宿も考えられたが、結局一ヶ所に集中する事になり、そのかわり行動半径を拡大し、単なる基礎的トレーニング以上の研究を課する事にした。

(1) 合宿地選定について。

昨年の合宿の結果、千丈沢周辺はあらゆる意味で、未開拓のところが多しと思われた。そしてこれを更に開拓しようという意欲があつた。また剣沢、酒沢の混雑な雰囲気もさけたかつたのである。

(2) 目的。

A・新人部員の基礎技術・中堅以上の強化

B・更に千丈沢周辺・北鎌尾根を一つの山系として開

拓研究するため総合的な登攀を行う。従つて岩登りなどはこの一部にすぎない。

C・中堅部員の課題として将来の展望もかね次の方面に別動隊を出す事にした。

1・南岳附近にキャンプして、北穂・槍閣の飛弾側の斜面の偵察及びその登はん。
2・中東沢の溯行。

但し、これらは必ずしも差し当つての偵察の必要から出たのではなく、以上多様な目的の達成に期待が持たれた訳である。

(3) 参加者。

CL田村、SL広瀬、SL佐藤茂、大工原、笠松、保母、五百蔵、西垣、佐藤毅、金子、打出、酒井、前沢、白井、米沢、宇野、高橋、大角、森、三沢、梶本、浜田、清水、三田、山本、岡久、辻、笠原、藤森、桑原、横尾、高田、浅井、池畑、岡田OB、野田OB。

(4) 行動概要。

七月十五日 先発隊、出発。

七月十七日 本隊、大阪発。

七月十八日 湯股に暮営。

七月十九日 千丈沢にキャンプを張る。

七月二十日 雪上技術の練習。

七月廿一日 八バーテイに分れて出て行つたが、田村

が落石事故に遭い負傷し、上高地へ下つた。

七月廿二日 広瀬がCL、佐藤茂がSLとなつて合宿を続行する事になつた。

廿二日〜廿三日 A、C、D稜、小槍を岩登りの対象とし、又奥丸山、双六、天井沢等広く歩く。

七月廿四日 佐藤茂以下五名の南岳パーティーと西垣、白井、金子の中東沢パーティー出発。

他の者がこれをサポートして行つた。

廿六日 中東沢パーティーが下る事に成功してテントに帰つて来た。

廿八日 南岳パーティーが帰つて来る。

廿九日 千丈沢合宿を解散し、各々の縦走パーティーに別れた。

(5) あとがき。

夏山合宿を終つてふりかえつてみると、検討すべき点が多々ある。

1. C.L.の田村が合宿二日目に負傷して合宿から脱けたが、S.L.の広瀬が代つて合宿を続け、一応最初の予定と目標をほぼ達成することが出来た。しかしC.L.が合宿早々に脱けなければならなかつたことは大いに問題である。

2. 三〇数名の大合宿であり、落石の危険から、かなりの範囲の登はんを計画から除外したので、単に岩場ト

レーニングの見地からいささか手狭な感がした。夏山合宿に於て基本的なレーニングに加えて新しい岩場、その他の開拓をはかるのは負担が大きく危険を伴う、例えば新しい岩場は必ず落邊の危険を伴う。その為に最初独標を中心に千丈沢側を試登することを目論んだが、断念せざるを得なかつた。

3. 山系の研究という点では別働隊の行動で示されるように効果があつた。黒部川を溯つて来た飯大山岳部の次のテーマとして、槍ヶ岳を中心として、硫黄尾根の赤岳、弓折岳、中崎尾根、南岳、西岳、常念山脈、北鎌独標を結ぶアラウンド・槍があるいは槍ヶ岳を中心にした縁合登山といつたアイデアがこの山系の研究の背景にあつた。色々な事情でこのプランは日のめを見なかつたが、いつの日かまた問題にされてしかるべきと思う。この合宿では赤岳↓千丈沢、中崎尾根上部、千丈沢↓独標↓天井沢日大小屋附近、日大小屋↓西岳、横尾尾根取付、及び上部、南岳西尾根上部についてかなりの資料を得た。

4. 毎年問題になつている夏山合宿のあり方というものについても一考を要する。いつたい合宿そのものに重点をおくのか、それとも縦走の成果により大きき期待をかけるのか。また合宿はどのように運営すべきかという点についてである。この千丈沢合宿では、各コースを新

人向、上級部員向、長く歩くコースの三つに分けて、特に新人に対しては、独標沢より北鎌の稜線歩き、天井沢中崎尾根、奥の丸山往復、△稜、小槍、双六杵復をさせた。しかもなるべく個人差を作らないようにする為にじたので、たまたま新人のお守りに当つた上級部員はかなり疲労した様である。雪溪技術の訓練についてもかなり意識的に階梯をくんでみた。ゆるい斜面を歩くことから始めて、踵をきかして下ること、アイゼンをつけての歩行、滑落停止、グリセードと進めて行つた。この練習において強調したいことは、岩場での静的なバランスに対して、動的なバランス、すなわち、いつも安定と不安定が繰返えされて全体として安定でなければならぬということ、絶対にこけてはいけないということ、完全にバランスをくずしてしまうと、たとえ滑落停止の稽古が充分つめていても、実際にはそんなに簡単に止れるものではないということ、グリセードは絶対に安全であるという見通しの上立つて行うこと、実用技術というよりは杜快さを味う種類に属するということ、etc.である。練習時の安全装置というのは従来当部でそれ程考慮が払われていなかつたらうらみがあるが、今回は、メテツプを切り、ザイルをはるなどの方法を試みた。今後更に改善せねばならぬ問題である。

夏山合宿そのものは、夏山までのトレイニングの総仕上げとして欠くことはできない。一つの行き方として、夏山までのトレイニングが充分であれば、夏山は縦走だけでもよさそうであるが、北アルプスのあのスケール、雪溪そして一定期間合宿することが可能な点、やはり欠くことはできない。定着合宿の内容は、グレイディング付を行ない、毎年検討を加えつつ、よい意味のマンネリズムを打ち立てることが望ましい。そして縦走は、定着合宿が基礎的な面を強調するのに対し、応用として、ただ慢然と縦走するのではなく、意欲的なものにして行きたい。その点で、酒井らの立石パーティーは非常に好しかった。

1960年冬山合宿

1 南アルプス

田村 俊 秀

1. 今回の冬山には次のような背景があつた。
 - 2. 遠征準備の為かなりの上級部員が参加出来ないかもしれない事。

3. 同じく準備の為、山行期間が限られる事。又南アルプスを選んだのは、

(1)以前から南アルプスに興味があつた事。

(2)比較的安全な範囲でスケールの大きいコースがとれる事。

(3)北アルプスより行動可能な日数が多い事。

合宿の形式について

(1)一支稜や岩稜よりも一人一人が大きな機動性と体力をもつて雪中を広く行動する事。

(2)日程のかぎられた者や忙しいOB達でも最小限の参加が出来る事。

(3)南アルプスの冬概念をつかむ事。

以上の理由から部員独自の判断と意欲に期待する分散合宿とし、次の五隊が南アルプスを広く挨拶することになった。1. 両俣隊(一〇名) 2. 千枚赤石隊(五名) 3. 西俣隊(七名) 4. 北沢隊(四名後にOB三名) 5. 鋸隊(二名)

当初我々としてはいささかセーブした積りであつたが例年の南アルプスらしからぬ悪天に鍛えられ、まずまずの合宿であつた。又遠路九州からこられた関本OBを始め、岡田、野田、広橋の各OBの参加がえられたのは大きな収穫であつた。しかし短い期間に欲張つ

たプランをもちすぎた感もある。なお、このプランは、八月の佐藤等(三伏以南)、十月田村等(三伏以北)の偵察と、昨年冬の野田等による白根三山縦走の成果をもとによる白根三山縦走の成果をもとにした。

1. 両俣隊。

メンバー L田村、広橋OB、打出Ⅲ(装備)、黒木Ⅱ、浜田Ⅱ(食糧)、藤森Ⅰ、山本Ⅰ、笠原Ⅰ、辻Ⅰ、高田Ⅰ。

目標。前半北岳・間岳。後半北沢峠周辺。

五人用テント二張携行、食糧十日分。スキー無し。

行動。

十二月廿四日 大阪発。

十二月廿五日 雨後雪。戸台→丹溪山荘→北沢峠→

長衛小屋。黒木、川にはまる。

十二月廿六日 曇後晴。長衛小屋→野呂川→両俣小屋

このコースは今冬我々が殆んど始めてらしく、終始障害物競争のような倒木越えとラツセル。野呂川の水結(最も危くしていた)は不完全で、危険はないような

ので月明りを利用して強行し十時小屋到着。所要時間十五時間で、無雪期間の三倍。全員全く腰をぬかし、辻は途中で荷をデポ、高田はピッケルを落した。

十二月廿七日 晴後曇。昨日の強行がた、つて本日は

養、午後から薪取り。田村、打出、広橋OBは野呂川乗越を往復。高田はピッケルをひろつてきた。

十二月廿八日 雪。田村、広橋、打出、高田、山本は右俣をつめ三峰岳下にテントを出した。黒木等はサポート。意地の悪い倒木と、ふかふかの雪のラツセル。七時発。四時テント設営、サポートを帰す。

十二月廿九日 雪。岡岳をアタックせんものと、吹雪の中胸までのラツセルを5時間、三峰岳と岡の岳のころとおぼしきに出たらしいが、風雪にまかれて退散した。黒木等は両俣から北岳をアタックするはずであつたが停滞。十二月三〇日 雪。日程が限られているので、両俣へ撤回。黒木等は停滞。どうも北西季節風の偉力強大で南アまで悪天をもたらしているらしい。噂にきいた北岳の甲府側と異り、ここはまるで、南アの吹きだまりの様に雪が積る。(後で西俣隊もすごいラツセルに苦しんだとき

く) 両俣小屋は、寒く、わびしく、一年部員達はわななきわななきかほそい歌をうたつていた。

十二月卅一日 晴。北沢小屋へひきあげる。来る時とうつてかわり、野呂川は美しく氷結し、アイスパレスの廊下のように。おまけに誰かがラツセルしてくれていて六時間程で帰つてしまつた。北沢峠附近はテントのオンパレード。六〇まで数えて止めた。一番みすばらしいテント

から玉井が顔を出し、「ナンダ、モウカエツタカ。」 関本OB等も顔を出して急ににぎやかになつた。

一月一日 晴。元旦でめでたいのでOB達と談笑しながらゾロゾロと甲斐駒を往復した。摩利支天がすばらしい。風が強いので浜田の鼻が白く氷結し、大騒ぎとなつた。

玉井と米沢は、鋸岳をアタックすべく七合小屋に入つた。一月二日 晴。二隊に分れてアサヨ、仙丈を往復、まるでハイキング。北岳、塩見まで晴れ上り、人並みにくやつた。

一月三日 晴。撤回。

以上失敗したが、期間の上から、本来無理であつた。一年部員は、前半、後半の鮮かな対照から冬山の多様性を知ってくれたろうし、ラツセルもよかつた。(田村記) 一

2. 千枚赤石隊。

メンバー 佐藤(4.Ⅰ) 保母(4) 酒井(3) 前沢(3) 梶本(2)。

期間 十二月廿五日〜一月三日

十二月廿四日 大阪発。

十二月廿五日 雨。田代入口(九時) ↓掘沢小屋(十二時三〇分)。相当の土砂降りて飯場のテントにとめてもらう。

十二月廿六日 快晴。堀沢小屋（八時）→転付峠（十時）

→二軒小屋（十時五十分）→同、昼食後出発（十二時）

→マンボウ頭下方にテントを張る（十五時二〇分）。西俣パーティーは二軒小屋に荷をおいてテント地まで我々のサポートをしてもらった。

十二月廿七日 晴後曇。出発（九時）→千枚岳（十五時〇四分）。午後から曇りとなり弱い風雪の為に又途中まであつたトレースが全く途絶え相当に深いラツセルとなつた為に、千枚岳のピークまで行けず少し下方でテントを張る。

十二月廿八日 吹雪。停滞。

十二月廿九日 吹雪。出発（八時四十五分）→悪沢岳

（十一時〇五分）→テント（十一時十五分）。前日と同じ悪天候で悪沢岳のピークを少し越した所で強風の為に顔面に軽い凍傷を起したのでただちにテントを張り逃げ込む。

十二月三〇日 停滞。非常な強風でテントのポールが曲り、心細し。

十二月卅一日 吹雪。出発（十一時）→荒川岳（十二時）→テント（十三時二〇分）。ガスの為と、雪崩の危険をさけて荒川岳の下りは夏道をさけ稜線を行く。

一月一日 晴後ガス後晴。停滞。朝晴れていたので出発

の準備をしたがすぐに濃霧となつたので停滞する。しかし二時頃晴間が見え出した。

一月二日 曇後快晴。出発（十三時）→大聖寺平（十四時）→赤石岳（十六時三〇分）→テント（十七時十分）午前中相変わらずガスと強風であるが準備を整えて待機。

午後から快晴となり今回の山行で始めての「来てよかつた」の気分になる。赤石岳のピークを下り切つたあたりでテントを張る。

一月三日 晴。出発（八時四十五分）→百箇洞小屋（十時）→大沢岳コル（十二時）→大沢渡（十六時）→木沢ルがあり助かる。大沢渡→木沢間の三十八km、夜の軌道を歩くのはうんざりするどころの騒ぎではなかつた。

天候に比べよく行動したと思う。北アルプスがドカ雪と悪天の戦いならば、南アルプスは強風にふかれながら稜線をドンドン縦走することだ。（前沢記）

3. 西俣隊。

メンバー 山西垣、白井、三沢、三田、清水、横尾、岡久。

期間 十二月廿五日～一月二日

十二月廿五日 雨。荒川三山を縦走するパーティーと共に

びしよぬれとなつて保利沢小屋へ入り込んだ。

十二月廿六日 晴。伝付峠をへて二軒小屋へ。雪は峠でひざぐらい。赤石へ行くパーティーをマンボウの頭の下までサポートする。

十二月廿七日 晴。二軒小屋から小西侯まで立派な道がつづいている。昼すぎ小西侯だったので、二手にわかれて塩見、悪沢のルートを見に行く。

十二月廿八日 吹雪。小石尾根より悪沢へ行かんと、小屋のすぐ前のつり橋を渡つた所から尾根に取付いて森林帯の中を急登する。二千三百皿あたりからさらに雪が深く、おまけに吹雪が強くなつてきたので、新蛇抜沢の頭までのぼつて引きかえす。

十二月廿九日 (吹雪) 六時吹雪がおさまりかけたので悪沢にむけて出発する。だが一ピツチ登つた所で又吹雪き、全員退却。

十二月三十日 吹雪。停滞。小屋は四棟あり、事務所が一番しつかりしている。電蓄もあつたが残念な事に電気がない。

十二月卅一日 曇。悪沢をあきらめて三伏峠へ向う。雪はほとんど深くなり、予想以上に時間をくい。一時すぎ西池の沢出合の小屋につき泊る事にし、空身で三時間程ラツセルにゆく。

一月一日 晴。昨日ラツセルしたところをあつというまに通りすぎる。荷を持つてのラツセルはなかなかほかからない。やむを得ず二組に分れて、一組が荷をおいてラツセルし、他の一組がラツセルしている間に荷をとり返る方法にする。空身でも雪は胸をこえ、その上倒木が多く、その上に雪がつもつて雪の壁がいくつもできていく。目の前の沢が、なかなか曲れない。薄暗くなつても三伏小屋へつかず、月光、光々たる中に十九時すぎやつと小屋にたどりついた。

一月二日 晴。どこかのパーティーが残していつたパンを頂戴して出発の用意をしていると峠の方から二人づれが下りて来て「パンが残っていませんでしたか。」と来た。頭をかいてこちらの残りのクラツカーをおいた。三伏峠は冬テンの展覧会。あとは気持のよいラツセルのついた道をおろす人達は皆顔面凍傷にやられていた。

最初は欲張つて三伏峠につくまでに、悪沢と塩見のぼるはずだつたが天候にめぐまれず、ドカ雪と倒木で三伏峠につくのがようやくやくであつた。(西垣記)

4. 北沢隊。
メンバー 笠松上、金子、宇野、桑原。

期間 十二月廿六日(三)日。

目的 時間的都合がつかず全期間合宿に参加できなくても、一日でも山に入った方がよいという意見に従つて、四人がより集つて一パーティを作つた。

行動概要

廿六日 晴。数人パーティが一緒に戸台で下りた。峠をこえて北沢小屋に向う途中樹々の間に北岳が望まれた。

この山行中北岳をみたのはこの日だけである。北沢小屋には管理人はいない。我々のテントは峠と小屋の中程の平にひらけた樹林帯の中に決めた。水場はテント地から少し北沢小屋の方に下つた所。沢に水が流れていた。

廿七日 晴。五時三〇分起床―七時四〇分出發―十一時十五分千丈岳頂(ガス)―十一時四〇分(下山)―十二時十五分樹林帯―十三時十分テント帰着。樹林帯をぬけたとたんに西風にあおられたので感覺的にはかなりきびしく感じられた。トレースもあり、ある程度しまつていてもぐららず、雪はややしめつているが固りにくい。

廿八日 高曇り。―吹雪。五時(起床)―六時四〇分出發―八時仙水峠―九時十五分駒津岳―十時十五分駒ヶ岳頂―十一時十五分駒津岳―十二時仙水峠着―十二時五分北沢小屋―十三時テント帰着。きつい西風が小雪をはこんでくる仙水峠に立てば、摩利支天が所々に雪をつけ

てみえる。ここにも登るルートがあるという。時々晴間がみえていた。駒の上に出れば猛烈な風、あまりかねてカンパンをくわえたままとんでおりた。予備食糧もなかつたし、天気もよくなかつたのでアサヨ行はやめて下る。同じ仙水峠までくるのなら一度に二つ片付けてしまおうか等と話し合つていたのだが。

廿九日 高曇り。四時五〇分起床―六時三〇分出發―(テント地は無風)―七時四〇分仙水峠―九時二〇分アサヨ登頂―十時峠―十時四十五分テント地。森林帯をぬければ例によつてすごい風。地吹雪。はたしてピークをふんできたのかどうか、テントに帰つてからももめた。夜遅くまでカイドをして遊んだ。解禁煙した。

三十日 曇。十一時十分テント地出發―十二時四十分丹溪山荘着―十三時十分同發―十四時五〇分戸台。一日おかれて今日の十時入れかえのメンバーがついた。岡田〇B、玉井、米沢である。丹溪山荘では関本、野田両〇Bに会つた。廿九日から三十日にかけてどつと登山客がおしかけてきた。我々のテントのまわりにもすごいカマボコ天がはられた。

後記。私自身も南アといわれる山にくるのははじめて。テントを一ヶ所にすえて空身で動いたせいもあるが、一言でいうと手軽すぎた山行であつた。アイゼンはつけた

方が快適なのではいたがザイルはサブザツクにしまつた
まり。晴れた日の風の強いのが特に印象に残る。我々の
隊は合宿といえない程ささやかなものであるがオール・
ナツシングより、僅かでも参加する事に意義があると思
つていたし弊突風に吹かれて満足して帰つた。(笠松記)

5. 鋸岳隊。

メンバー 玉井、米沢。

一月一日 ①強風。甲斐駒頂上でサポートして頂いたO
Bの方や新人に別れると急に重くなつたザツクをしよつ
て六合目石室に下り始めた。風が強く、雪がしつかりし
ていなので難儀する。七合目の針金の所ではナイロン
のミトンの為すべつてしまつた。六合目石室はかなり雪
が吹きこんでおき、風通しも良いので、カートンボツク
スを下に敷き、ラーメンで一息入れてからツェルトを張
つた。三つ頭の方へ偵察に行つて見たがトレスがあるの
でやれやれと引返した。なさけない事だが僕は大阪を出
る時からこのラツセルをひどくおそれていた。気温が
下つてカメラが凍つてしまふ。石室には僕等の他に二バ
ーティ、六合の頭にテントが三張程ある。
一月二日 ②三時米沢に起きられる。とても寒い。ツェ
ルト中箱だらけである。五時二〇分アイゼンを岩にきし

ませて岩登り。長野県側はオーギヒラキからの風であま
り雪がついていない。三つ頭の手前でちよつと休み、キ
ジを打つ。七時三つ頭。ブツシユの中を山梨側をまいて
風がするどく吹きぬけている中の川乗越へ下る。この鞍
部から第二高点へは急なルンゼ状の雪面で気分が悪い。
急いで登り、ブツシユをぬけると第二高点に着く。

大ギヤツブをさける為に中央稜を左に下り、薄い雪の乗
つたガレを丁寧に下ると圧倒的なゴルジュの底に着く。山
風穴側のハンドの下で一回目の昼食。風穴は針金が半分
程切れていたので念の為にザイルを出して二ピツチで稜
線に出た。雪がしまつていなので帰途を考えると心配
である。風穴からはブツシユの中を急に下ると小ギヤツ
ブの底に出る。ここでも慎重に一〇五程スタカツトで登
る。九時四〇分第一高点に着く。二回目の昼食。小ギヤ
ツブは帰りは山梨側を懸垂する。風穴は三ピツチだけザ
イルを使う。あとは何でもなかつたが登り下りに疲れて
て十四時廿八分石室に戻る。九時間往復できたのはラ
ツセルのあつたおかげである。

一月三日 ③余つた食糧を雄嶺の人にあげて第四尾根
を丹溪山荘へと下る。七丈滝は完全に凍結している。戸
台川の一合目出合からはとどころ凍つた川を歩く。
山荘までは意外に遠い。米沢がズボンを完全にさいいてい

たので他のパーティーが近づくと僕等はびつたりと並んで歩いた。(玉井記)

一八つ峰を末端から

酒井次郎

I・前書き。

本年度、春山の計画にあたり色々なプランを立てられたが、結局剣岳八ツ峰末端より本峰への完登をめざす計画に決定した。これは、昨年来の我が部の懸案であると同時に、特に本年はヒマラヤ遠征中の中でもあり、余裕のある行動を必要としたからである。

なお昨年度の経過を略記すると

1. 三十四年秋 ポツカ
2. 三十五年春 悪天候と偵察不充分の為、三稜に登路の見通しをつけたにすぎない。
3. 三十五年五月 四の沢から三稜に取付いたが雪質が悪く中止。
4. 三十五年秋 四の沢から三稜をへて一峰までの無

雪期トレース。

II・計画概要。

真砂沢出合にABCを設け、次いで八ツ峰末端より取りつき、尾根の途中二〇〇〇m附近にACを建設、アタックはここから八ツ峰を縦走して剣本峰のサポートトに入り、後単独で早月尾根を下る。その間、ABCでは一峰東面の四本の尾根のトレースをする。又、剣御前小屋BCには一年が主体として入り、奥大日往復及び本峰サポート・テント建設の役目を果す。計画遂行に当たりの問題点は、

1. 千寿ヶ原から剣御前小屋までの長いアプローチ。
 2. 急峻な一峰東面における雪崩。
 3. アタック隊の大きな負担。
- 等である。
- III・行動記録。

(1) アプローチ期間。(千寿ヶ原→剣御前小屋)

三月十三日 先発の打出、高橋大阪発。

三月十四日 本隊大阪発。

先発。美女平から三ピッチでピバーク。

十五日 晴。千寿ヶ原・美女平間二回に分けてポツカ。

先発。追分小屋。

十六日 晴。六時三〇分美女平→十四時五〇分立山荘→

十六時三〇分美女平。半量を立山荘にボツカ。スキー不慣れの為予想外に時間がかかる。先発は天狗。

十七日 快晴。六時五〇分美女平―十三時四十五分立山荘―十七時天狗。弘法まで歩く。クラストと前日のトレースのため快調。追分より美松荘をへて天狗にいたる。先発は房治小屋。

十八日 快晴。七時天狗―八時立山荘（スキー練習）

十時十分出発―十二時天狗―十三時出―十四時房治―十四時三〇分出―十五時三〇分天狗着。

天狗―追分間はスキーで下つたが、スキーを二本折り二本流す。房治で先発と合流。先発は乗越までトレースして房治に戻る。

十九日。停滞。

二十日 晴。七時三〇分天狗―八時十分房治―九時三十五分出―十一時四十五分御前小屋―十二時四〇分出―十三時二十分房治―十四時五十五分出―十六時二十五分御前小屋。

全員御前小屋に集結し、これより各パーティに分散する。

(2) 分散期間。

イ・真砂パーティ。

上酒井、広瀬、高橋、前沢、佐藤、五百蔵、金子、白

井、梶本。

三月廿一日 曇後晴。四時二〇分出―五時四十五分真砂沢。

約一時間剣沢を下る。平蔵、長次郎からのデブリが出ていたが、剣沢はよくしまつており、あまりもぐらなかつた。一峰東面の雪の状態よく、又、好天が続ぎそうなので、計画を変更して、ACを出さず、ABCより直接アタツク二名を出し、二・三のホルまで二名がサポートし、又、残り五名は東面を知る為AC予定地まで同行する事にする。

◎アタツクの記録

アタツク 広瀬、高橋

サポート 前沢、五百蔵

三月廿二日 晴・夜より風雪。

真砂平キャンプ地三時三〇分↓四の沢入り三時四十五分↓四の沢のど四時十五分↓三稜岩穴四時五十五分↓天幕予定地六時十分↓昨年引返し点七時二〇分↓一峰頂上↓九時十五分↓IⅡのホルで中食（十時三〇分）十一時廿五分）↓二・三のホル十四時二〇分↓V峰で食事（十六時十分）十六時四〇分）↓ビバーク地決定十八時十分。昨年五月ヤバかつた岩稜は例年にない雪の為かえつて

容易に通過でき、その上の引返し点も何なく過ぎてしまった。

そのあとは昨年の推察通りだった。兔に角たんたんとした登りであつた。一峰に出る直前、四稜の一番後の処は、時間的にかなりおそく少し気味が悪かつた。

ここで我々の考えが甘かつたのは、かえつて八つ峰そのものに対してであつた。特にI峰、二・三の窓の間は急な斜面、それも長いやせた尾根の連続であつた。これは昨年五月の偵察で明らかであつたにも拘わらず、左程問題にしていなかったのは考えの甘さを示すものであらう。

サポートの前沢、五百蔵はII皿のコル迄来てくれたが彼等のサポートがなければI峰、II皿の岡も動けなかつたのではないか。全く心から感謝する。

II皿の窓からあとはIV峰の下りが急であつた。普通に考えてこれは懸垂すべき所である。V峰まで来ると、空腹に耐えられなくなつて、二回目の食事にした。II皿の窓でサポートと別れる頃から雲行きがあやしかつたが次第に風が出て来た。

V峰から懸垂すべくのぞいてみたら二・三回の中継が必要なのと、最初のピンがない。途中でテラスにヒヅアックというのは困るので、長次郎側をまいておるる事を

考えた。しかしのぞいて見ると全部シュークリイム状でまず不可能。やがて日も暮れかけて来たので一応II・皿の窓に引き返してV VIのコルに行くか、そこでビバークするか迷つた挙句、ビバークに決定。V峰三の窓側の斜面に位置決定。本峰から懐中電灯の合図あり、こちから応答する。ツェルトを張り終つた頃より雪が降り出した。

三月廿三日 風雪。

停滞。朝方少し、ほんの少し晴れ間がみえたが、あとは一日風雪。足首までしかもぐらなかつたのが八ツ峰の稜線へ出るのに腰までのラツセルに突つた。天気がいつ回復するかわからないので食い延ばしをする事を考えた。昨夜もそうだつたがマツチが直さにつかなくなる。携燃はうまく燃えない。通気性がないので、すぐ息づかいが荒くなる。色んな事をするのがめんどうくさい。従つて水はつくれない。運動を兼ねて雪かきに表へ出る。キジは二匹うつた。夜になつて冷えこんでくる。これは天気がよくなつて来た証拠である。

三月廿四日 晴。V峰八時二〇分I IV・Vのコル八時三〇分↓長次郎の出合九時三〇分↓真砂テント地十一時。

V・VIのコルへおりられない事はわかつたが一度長次郎へ降りてあらためてV IVの窓より上半をやりたいとい

う氣持に悩む。とにかく引返すのがたまらなくつらかつた。上半の様子を見ると登れぬのは自明であるが、尚かつ氣がかりであつた。無事に引返す事が第一と考へて何度かぐらついていたが引き返した。しかし帰る時には殆んど水を飲んでいない為二晩もビバークしている事によつて体がまいつてゐる事はビシビシと感じられた。下る際、本峰の連中はずつと見ていてくれた。何とも言えず有難かつた。

疲れてもいたし、又引返したというひげ目からじつに馬鹿氣た事なのだが、テントに着くまで声をかける氣にはなれなかつた。幸か不幸かテントの連中は黒部別山へ行つてゐた。

一方真砂バーティは、先日五〇〇mの積雪があつたので一峰東面はやめ、七名黒部別山へ行く。ABC発八時五十五分―黒部別山一時―ABC着十五時十五分。

ハシゴ谷乗越へ向つたが、沢をまちがえ、黒部別山よりに登つた為、尾根へ取付く直前、雪庇につつまみ、二名が約二〇〇m流される。

アタツクがV峰まで行きながらV峰を下れずビバーク二日の後ABCに帰つた事を知る。アタツク出発当時は昨年の事も考えると雪の状態は最良であり再度のアタツ

クもそれ以上望めないと考え、アタツクは断念する。又一峰東面のトレースも今後長く天候が悪化しそうなので打ち切り、ABCを撤収する事に決定する。

三月廿五日 曇。ABC出十五時三〇分―御前小屋BC着二〇時三十五分。

ロ・本峰隊。打出、保母、三沢、浜田。

三月廿一日 晴後高曇り。乗越―本峰。

前夜は殆んど寝ていないのでふらふらした。四人共頂上についた時にはバテていた。カニの横ばいもたいした事はなかつた。頂上のすぐ北にテントを張つた。田村、田井が頂上までサポートしてくれた。

三月廿二日(快晴)逆ポツカ)。

八ツ峰はトレースが完全についているので、万一アタツクが来ても大丈夫だつたので逆ポツカした。前剣の下まで。昼過ぎてW峰附近にアタツク隊を発見。夜電池で確認した。アタツクはV峰の上でビバーク。

三月廿三日 吹雪ガス。停滞。

晴の予想が見事にはずれ、朝から吹雪。八時三〇分アタツク隊を氣遣い、八峰に向けて出かけていこうとしたが、粉雪で危険なので、引返した。一日中八峰を注視したがアタツクの姿は発見出来なかつた。心配した。

三月廿四日 快晴。停滞。

サラサラの粉雪が五〇cm程つもり、行動出来なかつた。十時頃、V IVのユル附近から下降するアタック隊を発見無事を喜ぶ。台湾坊主が発生したので明日真砂沢パーティーが撤収したら、我々も撤収する事にする。

二十五日 高曇り。停滞。

パツキングをして、テントの内張まではずしたが、剣沢にトレースがなく、真砂沢が撤収したかどうかともわからず、判断に迷つたが、停滞とする。

二十六日 曇後風雪。停滞。

九時の予報で、北高南低の気圧配置となり悪天が長びきそうを心配となる。成城のテントが撤収し、うまいピケットを置いていつてくれた。気温が異常に高い。

二十七日 雪。停滞。

異常に高い気温に驚きつつ、ポンを打つていると、粉雪がしんしんと降りつづき、テントの半分まで埋つた。いくら雪のけしきも、まわりに土手が出来てあまり効果がない。

二十八日 吹雪後晴。停滞。

一夜降りつづいたドカ雪で朝おきるとベンチレーターノの所まで埋つていた。気温は下つて来た。夜、快晴となり雲海が美しい。

二十九日 ガス後快晴。撤収。

積雪多く、動きたくなかつたが又天気がぐずれそうなので撤収を行う。停滞破れて歩きはじめは息ぎれがした。鎖場附近はひでいラツセルで前剣頂上より少し剣よりのところでサポートに来た西垣、広瀬、金子、梶本に会いほつとする。剣御前ののはりは雪崩の心配から、尾根通しにかかつた。サポートがなかつたらラツセルの為、もつと時間がかかつていたろう。乗越小屋でゆつくりと飯を食い星空をみあげながら雷鳥沢を下つた。房治では皆が、歓迎してくれた。

〇頂上附近は動けそうに動けない所だ。その判断の基準によつて行動は非常に異つたものとなる。今回はサポートが目的だから無理は絶対にさけた。

〇スコップとは名ばかりのジュウノウを持たされた為、除雪に苦労した。

〇連絡方法を決めていながつたことは今回の最大の欠点である。難しいことだが研究の必要がある。

ハ・乗越パーティー。

メンバー 上西垣、黒木、田井、清水、山本、横尾、

高田、辻、岡久、浅井、大川、佐藤茂、田村、三田。

三月廿一日。黒木他新人五名前剣中腹までサポート。

B 丑出発七時、前剣デポ到着八時四十五分、出発九時十

五分、B H着十時五十五分。

田井及び房治よりの田村は剣頂上までサポート。平蔵の
コル十時三〇分、頂上着十一時四十五分、出発十一時五
十五分、B H着十四時三〇分。西垣他三名停滞。佐藤下
山。田村房治へ。

三月廿二日。西垣、田井、他六名雄山往復。三名停滞。

B H発七時二〇分、別山着七時四〇分、雄山着九時四〇
分、出発十時十五分、B H着十一時四十五分。午前中快
晴風強し。午後風強くガス。

三月廿三日 風雪停滞。

三月廿四日 快晴。奥大日へ六名。五名サポート。B H
発七時十五分。奥大日ピーク、十時五分。雪洞を掘り始
める。サポート隊は奥大日登頂後B Hへ。十二時雪庇の
割目にぶち当り中止。十二時四〇分場所を替えて掘る。

十五日三〇分完成。この頃より薄雲が開始める。
今日はラツセル深く、雪はしまつていたのでワカンも
アイゼンも変りなし。腰までのラツセル珍らしくなし。

三月廿五日。七時十分雪洞発、七時廿五分奥大日、七時
四〇分雪洞着。八時十五分出発、十時四〇分B H。

この日、台湾坊主と日本海の低気圧に挟まれて悪天候
の続く見込みなので食糧は三分が残っていたが、大日に
行かずに引きあげることにする。朝から急激に悪化して

日本海に曇の山脈の押し寄せてくるのをみたが、結局一
日中もつた。二〇時真砂パーティー帰着。

皿・撤 収。

三月廿六日 雪。停滞。

三月廿七日 雪。停滞。

三月廿八日 雪。停滞。

三月廿九日 晴。九時十分発房治着十一時十五分。
剣本峰隊を除き全員下る。

三月三〇日 晴。スキー練習。

剣本峰隊が撤収したので合宿を解散する。

☆☆☆☆☆

一般山行報告

☆☆☆☆☆

五月

○ 剣岳工峰 東面第三稜

広瀬、佐藤茂、西垣、五百蔵。

○ 後立山縦走。鹿島槍―朝日―北又。

里木、佐藤毅、酒井、金子、峰田。

○ 海谷山塊

田井、玉井、三沢。

○比良山新入山行

村井、大工原他新入部員。

○立山山行

大工原、保母。

○比良山

三沢。

六月

○酒沢―奥穂―前穂高縦走

三沢、峰田。

○西穂―北穂―酒沢縦走。

梶本、浜田。

○尾瀬

梶本他一名。

○大山

三沢。

七月

○三俣連華―劍岳縦走

高橋、梶本、浜田、高田、横尾、浅井、岡久、堀井

○後立山 針木―朝日縦走

五百蔵、米沢、三沢、山本、桑原、藤森、池畑。

○立石周辺・薬師南稜、バントレス。(後述)

酒井、西垣、保母、佐藤、黒木。

○南アルプス南半縦走

佐藤、宇野。

八月

○祖母溪

黒木。

○穂高岳山行

前沢、打出、白井。

○薬師岳山行

篠田先生、徳永、西川OB、広瀬、大工原、田村。

九月

○穂高岳……田村、保母、玉井。

○八ヶ岳……梶本。

十月 ○南アルプス北半縦走

田村、大工原、山本、藤森、浅井、笠原、横尾。

○穂高山行

佐藤、玉井、笠松、保母、酒井、佐藤、打出、梶本

十一月 ○燕―大天井 新人雪上訓練山行

田村、佐藤、玉井、酒井、峯田、高田、桑原、横尾

兼清OB

○劍岳・偵察及びホツカ

高橋、西垣、白井、保母、打出、金子、黒木、五百蔵、梶本

○劍岳―平―針木縦走
田村、三沢、浜田、山本、高田、横尾、浅井、池畑。

1 劍岳一峰東面を

中心として1

夏山合宿をここ二年餘月岳千丈沢で行つたが今年には劍沢、真砂沢出合にテントを張り劍岳東面を中心に行われた。これは劍岳が豊かな岩と雪溪をもつと共に、我部がここ數回登はんを試みている八つ峰I峰東面の開拓を目指した。参加人員は上級部員がかなり不参加の爲、減少し、その構成も一・二年部員の基礎技術、二三年の中堅部員のリーダーシップの養成に重点がおかれた。

アプローチは体力養成の点から、従来に比較してかなり強烈なルートである大日岳を越えて劍沢に入った。合宿中は連日の好天に恵まれ、I峰東面の沢・稜のトレースを初めとし、一年を対象に八つ峰、源次郎尾根縦走中級部員は八つ峰側壁、チンネ、ジャンダルム等の岩登り、さらに内蔵助谷を下り黒部へ、大タテガビンの偵察も行われた。

だが二十一日チンネで岡久が転落、大窓で大川がスリップと、同時に二つの事故を起してしまつた。特に岡久

は大股骨骨折という大けがで、チンネ中央バンドよりザイルでつり下すと云つた大がかりな救助作業が行われた。この事故は当人の過失というより部の失敗である。又この夏山合宿の失敗だけに片付けきれない。

この合宿後、我々はいく度かこの事故の原因を論じた。その反省の中には岡久の場合を考えても、直接原因は一本のハーケンが抜けたのだから、單なる技術的な失敗と片付けるよりも、もつとその根底にある山登りに全般に關して我々の進み方、考え方が誤つていたという事である。それは山登りの大原則であるべき「step by step」の登山」を忘れていたのではないか。言い代えれば、基礎技術も不十分な者が「さるまね的」な山登りに走つたということである。この点、今後のトレーニングの方法についてもかなり考えてみる必要がある。

リーダーメンバーも部員の力を過信していたのは失敗である。しかしこれはこの合宿のリーダーシップの失敗だけではなく、平常の部の運営を考えなおす点が多い。この事等、改めたいものだ。

なお合宿の後半は事故の後片付けに終始し、又、上級部員が帰阪したので縦走は少々予定を変更し、四バリエイに分れて行われた。

合宿参加者

酒井 (CL)、西垣 (SL)、大工原、黒木、五百蔵
梶本、浜田、横尾、高田、辻、岡久、桑原、藤森、山本
笠原、清水、三田、大川、牧野、吉川、播本、柳井、秋
濃、竹本。

行動概要

七月十二日 先発隊大阪発。

十三日 本隊酒井ら二十名大阪発。

十四日 曇。小型トラツクで称名一ピツチ手前まで

入る。十一時発。大日平キャンブ十七時。

十五日 晴。大日平発六時二〇分。室堂乗越しにキ

ャンブ十七時。

十六日 晴。出発七時。真砂沢出合少し下にテント

地を作る十四時。十四時三〇分。

十七日 晴。新人雪上訓練。一の沢よりマイナーピ

ークI峰へ。二の沢。三の沢マイナー側壁。I峰へ。四

の沢より八つ峰下半。

十八日 晴。二の沢よりマイナー。三の沢よりI峰。

四稜三の窓側偵察。八つ峰上半。源次郎尾根。チンネ。

ジャンダルム。VI峰Cフェイス。

十九日 晴。四稜よりI峰へ。一の沢よりマイナー

三の沢よりI峰。チンネ。八つ峰上半。源次郎尾根。VI

峰A・Cフェイス。

七月二十日 快晴。晴天停滞。

七月廿一日 晴。源次郎尾根、本峰南壁。VI峰A・Cフ

ェイス。チンネ。剣尾根。ハシゴ谷より内蔵助谷、黒部。

小窓周辺。チンネ上部田々、ラツク登はん。岡久転落。大

窓にて大川スリツプ。

廿二日 晴。岡久チンネより二股へ。

廿三日 晴。岡久二股より剣沢小屋横へ。大川、大

工原滞留。

廿四日 曇。岡久、ミダカ原ホテルへ。

廿五日 雨。岡久、ヘリコプターで富山病院へ。全

員美松荘より真砂沢テント地へ。

廿六日 晴。合宿解散。

事故報告

(チンネの事故)

七月廿一日 晴。

西垣、清水、岡久中央チムニーを登り、中央バンドで
昼食(十時)。その後Gチムニーを登り、田クラツクを

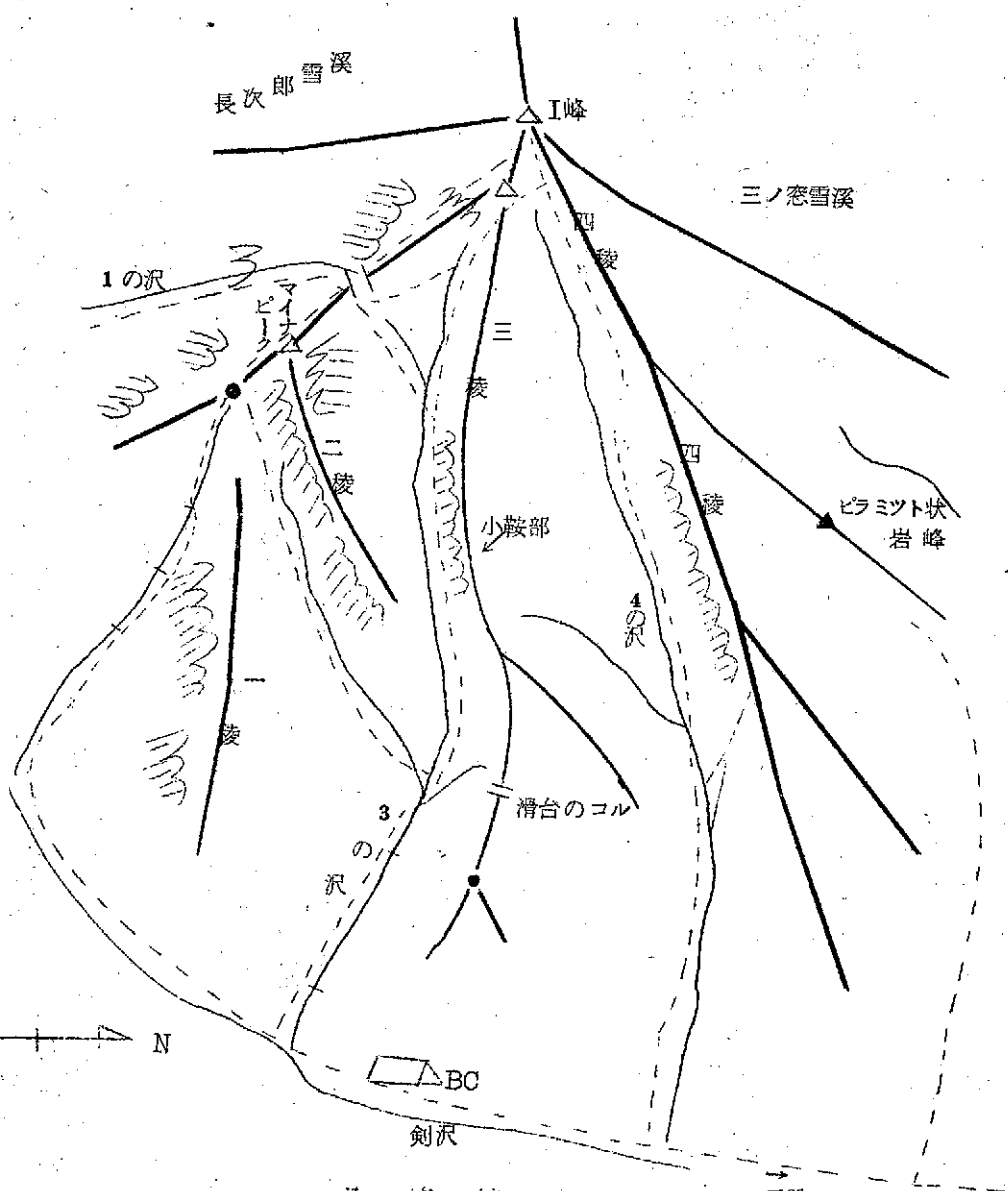
岡久がトツプでつり上げ登はん。中、ハーケンが抜けて二

〇m転落してザイルにぶらさがつて止る。この時、西垣

がジツヘルし、カラビナ五個使用していた。岡久すぐに

意識をとりもどし苦しがる。左稜線を登つてきた高田、

藤森がその場に来て、東北学院、パーテイの援助で中央バ



八つ峰I峰東面ルート図

ンドまで下る(十四時)。右足骨折で、かなり出血した
が間もなく止る。チンネ上で事故を知つた三田、梶本は
左方ルンゼより中央バンドに登る(十四時)。その後梶
本は剣山荘、剣山小屋に急報、警察、学生課に連絡(十
九時)。同時に同小屋の金沢大学医療班に依頼し、真砂
沢テントには東北学院パーテイに伝言を依頼する。
チンネでは農工大、立命大パーテイの応援により岡久を
左方ルンゼまで運ぶ。西垣、三田は岡久に付き添い、他
は三の窓へ下る(〇時)。テントでは伝言を受けて(十
七時)辻、笠原は食糧、ザイル、ハーケン等を持つて三
の窓に向う。明日救出にひかえ、三の窓に泊る。

七月廿二日 晴。

黒木、梶本、藤森、横尾チンネに向う(十五時)。三
の窓に泊つていたものと合流し、又農工大、立命大の援
助により左方ルンゼより岡久を下す。これはハイマツで
作られたタンカに岡久を固定し、四本のザイルでつり下
げ、一歩一歩おろしていった。左方ルンゼには落石が多
く、特にハングした部分は困難であつた。又、約一〇m
毎にハーケンを打つてザイルをまゝにする為、意外に時
間がかつた。十六時三〇分左方ルンゼの下の雪溪にお
ろし、朝からまつていた金沢大の医師の方に診断を受け
る。新たにタンカを作り三の窓の雪溪をピツケルを打ち

込んで、ザイルでジツヘルしながらすべりおろす(十八
時〇時三〇分)。二股の一年部員の待つテントにつく。
この間池の平に行つた浜田ら佐藤OBが来て下さる。

七月廿三日 晴。

二股より真砂沢出合まで、全員汗と泥にまみれてタン
カを担ぐ。ここ二日間満足に寝ていないので足がふらふ
らする。この間、梶本は雷鳥荘よりスノーボートをはこ
んでくる。真砂沢出合からは立命大パーテイが一気にス
ノーボートを引き上げて下さつたので、ずい分助かつた。
広橋OB、坪井OBが待つ剣沢小屋に到着し、小屋横に
テントを張り岡久を休ませる。(十七時)

七月廿四日 曇。

タンカを交替で担ぎながら、小雨の中をミダガ原ホテ
ルへ。二十二時。

七月廿五日 雨。

岡久、自衛隊のヘリコプターで富山中央病院へ(十一
時)。OB、岡久の御家族、黒木、高田は共に、他は全
員真砂沢テントへ戻る。雨の中、どろの中を敗残兵の如
く。だがテントには一年部員が飯をつくつて待つてい
るのだ。

〔大窓の事故〕

七月廿一日

五時二〇分に宇野、桑原、大川パーテイが出發。池の平小屋より小黒部谷を約40分下り、雪溪をつめ、大窓に出る（九時三〇分）。

昼食をとり十時に出発、稜線ぞいに本峰の方へ向う。踏跡を求めて岩まじりの草付をトラバース中、最後部にいた大川スリツプする（十時十五分）。傾斜五〇度一六〇度のガレたルンゼを三〇皿程すべり雪溪のシユルンドに落ちたが、額から鼻への裂傷の出血は間もなく止つた。

その後、桑原は、池の平小屋に救助依頼、居合せた大工、石工の方々三名が現場に向つて下さる。桑原はテントに連絡に帰つたが一年部員のみで、間もなく源次郎に行つていた酒井に会う（十五時三〇分）。

事故現場では救助の人が十五時三〇分に大窓に着き、マ一キユロで消毒後材木とザイルで作つたタンカで出發する（十八時）。十八時三〇分、雪溪を出合まで下つたがそこからの登りは四人の力では遅々として進まず、救援を待つ。（二〇時三〇分）大工原、小屋の管理人の田中正雄氏ら六名が着き、小屋へ向う。

七月廿二日

二時十分頃ようやく小屋にたどり着く。朝になり、六時三〇分浜田、桑原がテントから到着し、酒井に連絡を

つく。大川は名大インターンの方に傷の手当をしていた。その日、宇野、清水と共に小屋に泊る。

七月廿三日。

七時三〇分、大工原、浜田らが小屋に到着し宇野ら八名を阿曾原に下す。大川はほつほつ歩けるようになつていた。大工原がつきそつて帰阪する。



○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
/ 96 / 年度

冬山合宿

ゼミナールと近畿の山歩き

61年12月1日
62年1月

広瀬 貞雄

61年11月富士山行における手痛い遭難事故の後、我々は
今迄の山行につき根本的に考え直した。
そして冬山合宿を次の様に行つた。

行動記録

○一月五日 近鉄鶴橋九時五十三分発、室生口大野下車

十二時三〇分室生寺発、十三時三〇分宇野川橋。こ、

より左に折れ、国見岳西側をまわ、積雪三〇cm程。テン

ト地(国見岳南下)着十五時。夏テンを雪上にはる、

○一月六日 七時三〇分発。テント地より屏風岩を見て

トラバース。積雪五〇cmで足をとられて進まず十一時

屏風岩直下で昼食。こ、より長野へ下りバス道を太郎

路まで行き、龜山への途中の栗林の中にテント設営。

○一月七日 九時四〇分発、落合着十一時赤目十四時着

赤目滝を見て十七時三〇分のバスで近鉄赤目口迄。

1. ゼミナール合宿

期日 61年12月25日〜27日

場所 大阪大学教養学部石橋分校明道館

パネルディスプレイカッション PM 6.00〜9.00

講師 篠田先生・赤尾先生・西川OB・徳水OB

2. 冬山山行

近畿の山歩き

期間 62年1月5日〜7日

(A) 曾爾パーティー

メンバー 佐藤(上)、大工原、高橋、三沢、横尾

④ 段ヶ峰、峯山高原パーティー。

メンバー 広瀬（L）、保母、金子、辻。

行動記録

○一月五日（晴） 新井厭に十二時三〇分着、十三時出発、十四時四〇分奥田路、十六時十五分千町と段ヶ峯へ行く別れ道にある神社にて泊る、村人はとても親切で炭等をもたらつて世話になつたが、次の日には案内してやろうという人が来たのには閉口した。

○一月六日 晴後曇 八時三〇分出発。

始め木こりの人達のラッセルがありそれについてまわがつた沢をつめる。十時四〇分木こりに出合い段ヶ峯はここからは行けないと聞く、引き返すことに決め正しい沢にもどる。ここからはラッセルなく笹の上に雪がのつている状態でふみぬくと腰から胸のあたり迄もぐるのでひどく時間をロス。十七時稜線の少し手前にてテント泊。下が笹のためテント地作りにくく水が流れないため食事の時間がかかる。

○一月七日 曇。十三時出発、段ヶ峯を少し下つた所で道標を発見。それによると地図にている段ヶ峯は倉谷岳である。ハタギリ越十七時、川上十八時最後バスに間にあわず長谷厭までタクシーででる。

今回は思わぬ雪に悩まされて峰山高原迄行かなかった

がぜひ一度行きたい。

⑤ 鈴鹿パーティー。

メンバー 白井（L）、田村、豊坂。

行動記録

○一月四日 快晴後曇 十一時四日市着ーバスー十二時甲津畑ー十五時十五分フジトリ谷ー十七時十五分杉峠ーテント地十八時。

杉峠に近づくにつれ雪は次第に深くなり炭焼の人のラッセルはあつたが、杉峠がせい一杯、杉峠では一皿程度の積雪。風をよけ峠より少し下つたところでキャンプ。杉峠に至り意外に積雪が多いのを知つた。雪上に夏天をはつたので寒さは相当こたえた。

○一月五日 曇時々小雪。十一時四十五分発ー十三時四十五分御池鉾山営業所ー十五時三十五分愛知川ー十七時十分根平峠ー十九時四〇分千草ー二〇時二〇分菰野。朝起きて稜線は風が強いことが分り冬山装備を要するものと思われたので安全を期して直接峠越えに向つた。杉峠から愛知川までは相当のラッセルで部分的にはむねまで達した。

⑥ 京都北山パーティー。

メンバー（Aパーティー）、黒木（L）、浜田、高田、

大川、田井

（Bパーティー）打出（L）、笠松、前沢、

山本、桑原、播本。

当初A・Bパーティー全く別個の予定であつたが予想外の雪量の為合流という形式をとる。

○一月五日 晴。

A M十時出町柳に集合貴船口に下車バスで貴船へ。

谷沼の広い自動車道を進む、一ピツチ後昼食、アソカ谷入り雪道となる。アソカ谷の上部は地形が複雑細いふみあとにつたつて行くと広い道に出る。地藏堂があり旧花背峠の西側、芹生への分岐点だ。谷一つ地図のとはまちがえていた。積雪多量の為Bパーティー天ヶ岳往復中止花背谷を降る。沢筋の道を少し行くと杉林の中に格好のテント地ありここをならして設営、テント小さい為Bパーティーは近くの屋根だけの小屋にテントを利用して小屋がけす。

○一月六日 晴一時小雪。

八時出発。樹林帯をゆく、一ピツチで芹生部落通過。

やがて医生谷へと入る。魚谷峠分岐を見捨ててしばらく行くとラツセルも消え木馬道の厄介なラツセルとなる。積雪膝ぐらいまで両パーティー唯一のストックが効

力を発揮す。十一時十分狼峠への分岐着昼食をとる。

狼峠は難なく通過祖父谷に降る。途中の道標に従つて祖父谷峠のすぐ西側ナベクロ峠に向う。道は雪にうもれてわからず右手の支尾根にとつづく。プユシユの中のラツセルにいじめられたが主稜線に出た所がナベクロ峠（三時）反木谷に下る。谷は広がりが合流点をすぎるとトラツク道に出る。雪はこのへんで姿を消してしまふ。少し下り道路わきの杉林に設営。

○一月七日 晴一時小雪。

短い山行でも帰路は楽しい。大分軽くなつた。ザツクにベースも快調。大森東町に入る所で左に折れ薬師峠へ尾根の取付きで少し迷つたがやがて薬師峠。棧敷岳へのよい道がついている。時間もまだはよいので棧敷往復とし全負荷を置いてゆく。この道は意外に長く雪も相当深い。やつと頂上に着いたがあまり展望も利かざた遠くに真白な坊主頭をのぞかせている比良の山々がなかなかよい。棧敷登頂にともかくも満足して下る。薬師峠に着いた頃よりしばらく小雪がちらつく。峠から一ピツチ足らず下るともう岩屋不動目の下にバスが見えている。案外あつけない終幕であつた。

春山合宿

『北ヌーイブリ山―朝日岳―白馬岳』

62・3月

梶本 孝治

はじめに

昨半の事故後、再び積雪期のアルプスで合宿を持つ機会を得た。この苦しい経験によつて、事故のない山登りを目ざして、いや、無事故を前提条件として山登りをすべくこの合宿にのぞんだ。

春山合宿の計画に当つて、冬山合宿を行わなかつたため当然、部員の多数が積雪期の経験が少なく、自然と春山合宿には積雪期の初歩的な技術の習得がのぞまれた。しかしこのようにトレーニング的要素が多いとは言え、一つの計画のもとに完全な山行を行うことを熱望した。この完全な山行を成し遂げることこそ、再出発の第一歩として重要であると感じると共に、これが事故後の長期間の我々の努力の成果を示すものであると考えた。

この意味で計画された合宿を事故もなく、十二分の成果を上げて終えた事は、その間に若干の不手際があろう

とも、春山合宿は成功したと言えると思う。

計画を立てる際、部員の實力内で出来るだけ稜線を長く歩き、その基礎的な力を養うことに目標をおいた。

それと同時にあまりトレースされていない所、これは人が入らない事、そのものが魅力であるとともに、いくらか秀れたコースであつても他人のトレースに導かれたり、他のパーティーのフィクスの力をかりてでは興味が半減してしまふからだ。この二点を考えて見ると、白馬岳の北方稜線がふさわしく、又その周囲に広がっている未知の地域に魅力を感じた。

泊で下車し、小川温泉に入り、北又小屋を経て、イブリ山、朝日岳、白馬岳のコースを考えて見ると、徒走形式でも成し得るかも知れないが、先にも述べたように部員全体の積雪期の基礎技術の習得すると言ふ意味からポトラ―で成すのが適當であると思われた。そこで北又小

屋をBHとして、イブリ山にCI、朝日岳にC2、雪倉岳附近にC3を勘け、白馬岳をアタックする計画が出来たのである。

期 間 62年3月16日～4月2日

メンバー 梶本(CI3)、三沢(SL3)、浜田(

3)、山本(食3)、横尾(食2)、

高田(装2)、桑原(気象)、大川(医

2)、牧野(1)、豊坂(2)、木原

(2)、広瀬(OB)、田村(5)、三田

(5)、米沢(4)

先発隊報告

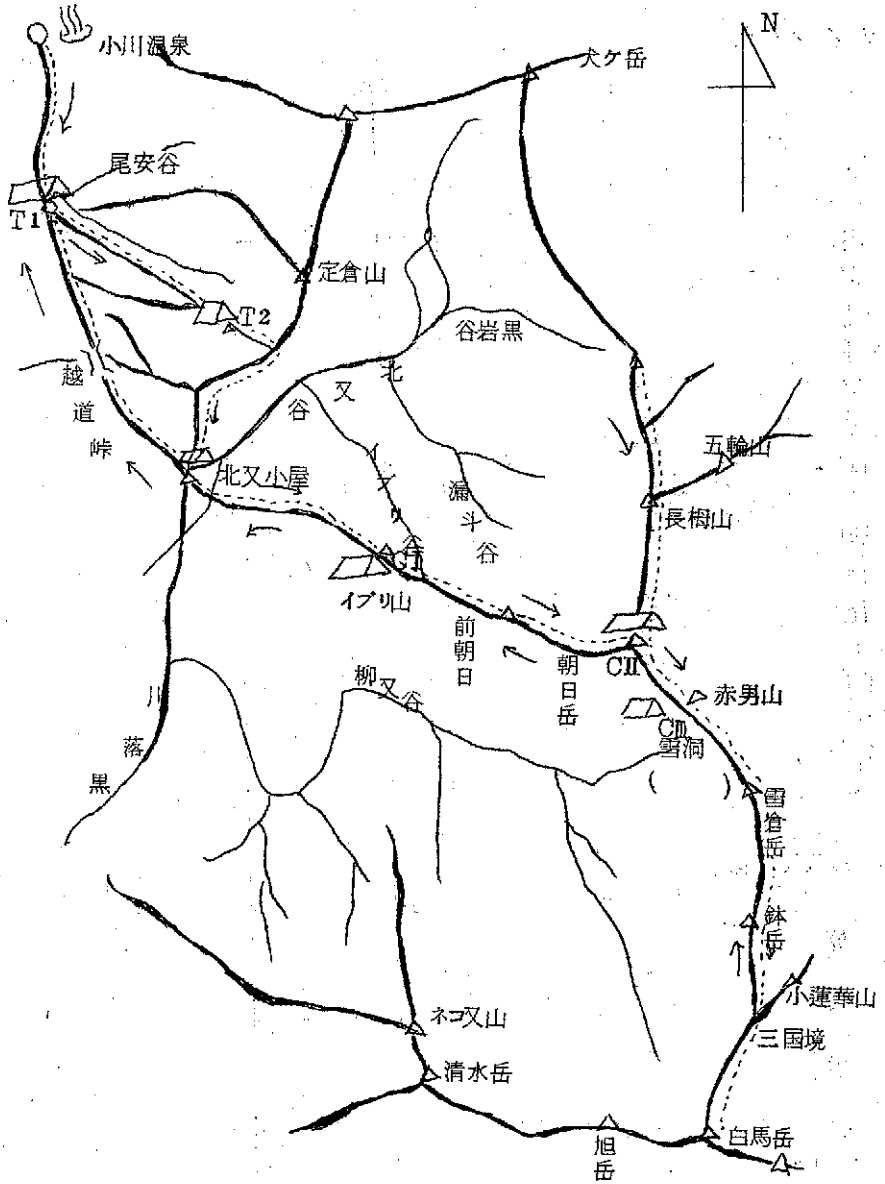
メンバー 三沢、横尾。

三月七日午後八時十分大阪発。八日七時泊着。八時四十分小川温泉着。十時発。快晴。自動車道をスキーをつけて歩き出したが左岸からのデブリがひどくワッパに変える。先に猟師達が歩いている。十三時夏道との分岐点。夏道の沢筋は両岸から雪崩の危険があり日中は通れそうにない。自動車道通しに進むが到る所形跡を留めない程の急斜面に変つていて遅々として進まない。十八時を過

ぎるも越道の小屋は遙か。しかたなく自動車道の上の台地で十八時十五分ビバークと決める。タテ穴を掘リツェルトをかぶつてシュラフにもぐり込む。幸い星空で無風。九日。七時に起き、周りを見てもこれ以上自動車道通しには進めそうにない。荷はそのままにして尾根に取付き稜線に出る。左岸の尾根づたいに稜線に出れば越道峠へ出れそう。だが取付きは雪崩の危険が少しある。

対岸を見ると尾安谷右股左岸の尾根づたいに定倉山下り小。ピークへ出てそのまま北又小屋へ尾根づたいに下れそう。更に上へ登ると、イブリ、朝日や対岸の尾根が一望出来る展望台へ出た。結局尾安谷よりのルートが最も安全であるとの結論を得た。ビバーク地へ戻り、直ちに尾安谷合まで下り河原のドテに雪洞を堀る。饑別にもらつたピーカンが旨い。十日。沢筋のルートを求めたが雪崩の危険を感じて引き返す。十三時温泉へ回る。十四時六湯着。宿主へ一晩の宿を乞う。(横尾記)

〔白馬岳北部稜線〕



行動予定表及びボツカ表

〔太線はボツカ 数字は人員数〕

	小川 III	北又 BH	イノ岳 CI	朝日岳 CII	雪倉 CIII	白馬
1	→ 19					3/11
2	→ 15	↑ 19 ← 4				12
3		→ 10				13 14 15
4	← 3	↑ 9 → 2 ← 4	↑ 10 → 1 ← 5	→ 7 ← 2		16 17 18
5		↑ 4 → 4	↑ 5 → 1 ← 3	↑ 7 → 1 ← 2	→ 4	19 20 21
6			↑ 8 → 2 ← 6	↑ 4 → 2 ← 2	↑ 4 → 9	22 23 24
7			↑ 8 → 6 ← 2	↑ 4 → 2 ← 2	↑ 4 → 2 Attack	25 26 27
8			↑ 8 → 2 ← 6	↑ 8 → 2 ← 4		28 29 30
9		← 8 ← 8	↑ 8	↑ 8		31 4/1 2
10	← 16	↑ 16				3

行 動 表

	小山 尾安谷 出谷T1	尾根ジヤ シラシラT2	北又BH ツツ平	イツ山 O1	朝呂岳 OII	赤男山 OIII	白馬岳
3/6 ○	先発	三沢横尾					
9		三沢横尾					
10		三沢横尾					
11 ①+②		三沢 浜田以下 10名					
12 ●キ		停					
13 ●キ		三沢桑原田村三田 梶本等 8名					
14 ○		三沢桑原田村三田 梶本横尾大川豊坂 浜田山本原牧野 高田広瀬米沢					
15 ④		停					
16 ④		滞					
19 ○		三沢桑原田村三田 梶本横尾大川木原豊坂 浜田山本高田牧野広瀬米沢					

山III

北文BH

イノ山O I

朝日岳O II

赤男山O III

20				
21				
22				
23				
24				
24				

小川

北交BH

1791101

朝日岳CH

赤岩山CE

白馬岳

26	○ ↓ 木 ④		桑原・広瀬	横尾・大川	停 滞
27	④		停	停	停
28	○ ↓ 木 又		高田・桑原・牧野・広瀬 米沢	楳本・横尾	三沢・山本
29	④		停	停	停
30	ガス		桑原・高田	停	停
31	○ (ピラー) 広瀬・米沢		牧野・広瀬 横尾・大川 三沢・山本	楳本・高田・桑原 浜田	(雪倉岳往復)
4/1	○ ← 広瀬・米沢	(字回収) 山本・牧野	三沢・山本・横尾・ 大川・牧野	横尾・大川 (黒岩平往復)	
4/2	○ ← 楳本等 9 名 ①				

〔行動概要〕

三月十日 二〇時十二分 大阪発。

三月十一日 晴後曇。列車延着で、泊駅にて少し手間どる。小川温泉にて先発、横尾、三沢と落ち合う。(九時四十五分)。十時三十分第一次ボツカ出。十三時三〇分尾安谷出合にテントを張る。T_Iナダレを考慮して、梶本、三沢は尾根の偵察。他十名は第二次ボツカを行う。

三月十二日 小雨・霧。昨日CI建設迄の偵察隊として三沢、桑原、田村、三田の四名を指名。本日は停滞。下界は晴の様様。

三月十三日 霧雨・ガス。A偵察隊V六時三〇分尾安谷出合出。十一時十五分尾安谷横尾根(実際は少し違う)のジャンクシヤンにテント。T_{II}途中四ヶ所T_{IX}をもうける。十二時五分二回ボツカの為、テント出。十二時四十五分尾安谷出合。十三時同出。一人二〇Kg。十五時三〇分これより三十六分偵察するも視界五〇mで引き戻す。A後発八名V六時五〇分出。一人二十五Kgボツカ。偵察隊のT_{IX}を利用して十一時二〇分尾根のT_{II}着。十三時三十分下山して尾安谷出合。T_I。

三月十四日 快晴無風。A偵察隊V八時十分T_{II}出。北又小屋へC₁、C₂の④の食料、装備ボツカ。十時五〇分北又小屋着。十一時北又小屋にて、レンズ雲を見る。十二

時同出。十五時三〇分T_{III}に戻る。A T₈名V六時三十分T_I出。八時三十分頃に剣上空に上層雲を見る。九時T_{III}着。浜田、山本、木原、牧野は直ちにT_Iへ。梶本、横尾、大川、豊坂は偵察隊の後を北又へ、十四時四〇分北又小屋着。十七時四〇分梶本等四名T_{III}に戻る。十八時浜田等四名ならびに大阪の後発、広瀬、米沢、高田T_{II}入り。ここにT_{II}に全員集結。

三月十五日 西南西の風。終日雨強く、停滞十四時四〇分春雷が雪崩の如く通過。十八時直径七m程のあられニンニクと粉ミルクのコンデンスはモツさんの風邪によくきいた。

三月十六日 風雪強く停。西南西の風。⊕⊗の天気。テント、食糧の雪かき、及び新人の歩行訓練に一日くれる。

三月十七日 風雪強く停。風向ははつきりつかめぬが息の間隔長くなる。そうでなくても、ガスられるのに、本日は六名もガス中で、名医の世話になった。

三月十八日 雪後高曇。ア、今日も停。ニンニクと塩の特効薬を用いた日也。

三月十九日 快晴後曇。十二名全員七時三〇分出、十一時北又小屋。ガス中の五名はT_{III}へ戻る。偵察隊四名及びサポート四名は十二時五〇分北又小屋出。CI建設に向

かう。北又の渡渉は、ひざ程度。サポート十五時ブナ平へ一ヶの地点にデポして引き返す。十六時北又小屋BH着。偵察隊は十六時ブナ平にてドスン。本日、出発時快晴なるも一ピツチ後、剣上空に上層雲を見る。

三月二十日 高曇。A偵察隊VイブリにCI建設。

A、B、H隊V身体の調子を乱したものが多く、二名だけCIへボツカ。八時三〇分出、十一時ブナ平。奴さん等のテント後に、ウイスキーボンボン。午後雨の懸念あるも思い切つて進む。十二時三〇分CIイブリテント地。朝日、前朝日を目前に絶好の場所。十三時三〇分CI出。二〇分程下ると浜田以下五名に会う。浜田、高田はCIに向かう。他三名はデポして、共に北又へ。(十五時)。この頃雨シヨボシヨボ。ATH隊V四時出。ローンク行列空しく懐電行列。八時北又小屋。

三月二十一日 北又Bは一日高曇。イブリCIは曇十五時より霧・小雨。A北又隊V危ぶまれた天候がもち続け、木原、豊坂を残して、七名出(七時三〇分)。デポ地(九時五分)下山する田村、三田と出会う。温泉に浸るを、奴等は十一時ブナ平で昼食、日本海にワタ菓子現われる。十三時二〇分CI着。広瀬等三人は北又BHへ。本日CIは八名。直、田村、三田は木原、豊坂を連れて小川温泉へ遊びに帰つた。

三月二十二日 ガス・雪。視界二〇m。南部のオツチヤン曰く、「シリ寒シ、クラストしている。ちよつと雪が吹つてるよ、テントにエビの尻尾がついてるよ、雪が吹つてきたよ、風速十m位。シリは剣を向いてる。風は剣からくるよ」以上六時。気温マイナス四℃。本日停。

三月二十三日 快晴後ガス。CI隊、有明の月に剣岳黙して語る。七時二〇分CI出。三ピツチで夕日ヶ原。この当りスキーに快適。十時四〇分CH朝日テント地。梶本等三人CI入り、他五名はCIへ。前朝日からの白馬、雪倉、特に雪倉のスケトルは大きい。A北又隊V

三月二十四日 快晴後曇。ACI V六時四〇分出。十時三〇分CII着。アタツク隊三名CII入り。サポート三名はCIへ戻る。CIIのテント大入り満員のめざし。ACHV朝日の出が素晴らしい。日本海の雲海、妙高、焼、戸隠の連山に夜が明けゆく。梶本、横尾CI建設の偵察に向かう。六時十分出。七時五〇分雪倉岩稜とつき。十一時十五分雪倉ピーク。十四時十五分CIIテント着。昨日もだが、今日も又、十一時三〇分頃からガスリだす。梶本、横尾水壁に相当苦闘したらしくガスに巻かれて、ふらりと戻る。

三月二十五日 快晴後晴後ガス。ACHV梶本、大川サポートで、赤男と雪倉のあたりにCIII建設に出かける。七

時出。八時二〇分赤男ビーク手前にCIII雪洞を設ける。山本、三沢、浜田のCIII入り。ACIV米沢、高田七時出。十時CII着。十時十五分CII出、十一時四十五分CIに戻る。

三月二十六日 快晴後晴・ガス・地吹雪。

ACIV広瀬、桑原。

ACIIV横尾、大川六時五〇分分出。七時二〇分CIII。八時十分CIII出。九時十五分CII。南西の風が猛烈に強い。

ACIIV雪洞の入口に地獄への入口がある。CIIIザイルを使用。アタクク日和も、寝過して取り止め。

三月二十七日 ガス地吹雪。南西の風強く、CICII共

に停。

三月二十八日 快晴後ガスACIV広瀬以下五名勢ぞろ

し。六時五〇分CI出。十時CII。皆モク助。ACIIV梶本、

横尾、六時三〇分分出。七時三十五分CIII。ピフテキ、ホツ

トケイキを浜田に御馳走になる。その上アタクク食をど

つさりCIIへパスつてきた。

ACIIVアタククの記録。

メンバー 三沢、山本。

風はあつたが快晴で、五時出発。雪倉の頂上に着いた

頃はかなり風が強まつて来たが、暖かい風ではあり、天

気も十分もちそうだったのでそのまま、進んだ。三国境か

らは運華からのトレースが、白馬主稜にもトレースがあ

つたけれども、他のパーティは居なかつた。

広い尾根は風の吹き通して休憩もせず三国境まで下りて

昼食をとつた。鉢の鞍部から雪倉山にかけて猛烈な風で

四つんばいになつてがん張つた。CIIIに着いてまもなくガ

スが出てきた。

タイム記録。

四時五〇分CIII発。一六時五〇分雪倉山。九時五分三国

境。九時四十五分白馬岳着。十時十分白馬発一十一時四

〇分鉢岳。十三時雪倉山。十四時十五分CIII帰着。(三沢記)

三月二十九日 ガス、地吹雪。停滞

三月三十日 ガス、ACIV高田、桑原、八時四〇分CI

出。十一時五〇分CII入り。CIの二人が入る迄に、CIIの三

人はすぐく物を食べたらし。

三月三十一日 快晴ACIV広瀬、牧野六時十分CI出。

九時CII。牧野は三沢、山本とCIへ下る。(十二時五十六

分)。広瀬は梶本に相談後、北又から小川温泉へ遊びに

行く(十四時三十六分)ACIIV横尾、大川、CIへ都落ち。

梶本、桑原、高田、六時三十六分CII出。七時十五分CII

十一時十五分雪倉ビーク。三〇分昼寝してCIIへ。ACIIV

三沢、山本、浜田、九時CIII出。三沢、山本はCIへ(十二

時五〇分)。浜田はCIIに残る。

四月一日 快晴。ACIIV横尾、大川、六時三十六分出。

八時四〇分CII。伝言に依り今日中に北又へ撤収する旨直ちにCI。四月バカ?!。ACV棍本等四名、六時十分出。黒岩平へ向かう。九時過CIIに戻り、撤収の準備。十一時出。十二時三〇分CIへ。十三時十五分合宿最後の敗残兵九名北又向け出。十四時四十五分小屋。十八時お休み。四月二日 快晴後晴。越道を早目にとりうので、懐電行列。四時出。五時四〇分越道峠。八時小川温泉。全員湯につかつて、合宿のあかをおとすも、あまりみげえがしない。でも、い、お湯加減でした。(大川記)

装 備 報 告

今回新調したものはV1、V2、V3各テントの内張とスコップ、テルモスなどであつたが、スコップは小型のものを二本、一本は角型で穴のあいているもの、もう一本は先のとがつたもので、これは接続部の木ネジがとんでしまつたが、雪洞用を別としては十分使えるものであつた。又、テルモスは安物を買つたせい、割れたり、すぐに冷めたりして使用不能となつてしまつた。やはり中級以上のものでなければだめであらう。次にボツカ方法であるが、今回は炊事用具などの常時使

用するものを別にして、その他の装備は各テント毎に段ボールの箱にパッキングしておいたが、途中で計画変更の際に開けたり、汗でぬれたりして、結局バラバラになつてしまつたが、ポーターの際、装備に関しては各テント毎に分けてしまふのも考えものである。かえつて、度々使用するものはバラしたままで、途中で使う必要のない細かいもの(メタ、ローソクなど)だけを缶につめておき、適宜分配するほうがよい様な気がする。この点は今後も研究の価値があらう。

それから、ケロシンの量は従来通り一人当り一日一三〇ㄱで計算し、全体量は十分であつたが、CIIIのごとき三名であつたので、一日約四〇〇ㄱとした。所が實際は一日七〇〇ㄱほど必要であつたので、後から補充をした。この原因として、三人でも五人でも實際の炊事の量(どちらの場合もコツフェルに最大限の量をつくる)には大差がない事が考えられる。この点に留意して、今後は各テント毎に(テント単位に)一日何ㄱと計算すべきである。

その他、二、三気付いた事を簡単に記す。
Oポリタンク O2、O3の全量、その他の一部のケロシンをポリタンクで運んだが、ボツカ中にもれたりする事もなく、ラジウスに移す際にも便利で、ロスが少なかつた。

装 備 表

品 名	数 量
テ ン ト	4
ツ エ ル ト	3
グ ラ ン シ ー (雪 洞 用)	2
ス コ ツ プ	4
ザ イ ル 麻	1
ナイロン	3
fix用	2
ラ ジ ウ ス	4
石 油 コ ン ロ	1
な ベ	1
コ ツ フ エ ル	3
テ ル モ ス	3
三 つ 道 具	1組
ケ ロ シ ン	60本
ク	80本
タ	30
メ お	60
竹 他	
の	
そ	
総 重 量	約 150Kg

又、缶と併用しても、缶からまずポリタンクに移し、それからラジウスに入れる事により、ロスが防げる。
 Oメタ、ラジウスの加熱用のメタは全部共同装備とした。
 これは、非常バツクのメタを使わせない為であつた。
 Oマンドリン 十分な量を用意したつもりであつたが、
 スペアーも心もとない程消耗がひどかつた。各人の取扱
 ちに今少しの丁寧さを要望した。

小生にとつて始めてのポリラーメントドでもあり、色々不慣れな点多かつたが、計画が成功したのは何よりもうれしかつた。今回特に感じた事は、ポリラーが計画通りに進行する事はまずないという事だ。だから、どんな計画変更にも直ちに応じられる様に、装備計画の機動性という事に予め十分注意を払つておくべきである。
 最後に簡単な装備表を記す。(高田記)

食料報告

積雪期の食料計画は、出来るだけ軽く、調理は簡単に、栄養価はいうにおよばず、しかもうまくということを念頭において作るべきである。さらにこの上に金銭上の制約が非常に大きい。これ等相矛盾する諸点をどう調和させるかが問題である。

今度の合宿は秋の荷上げ食料が使えず、そのため全部の食料を買い集めさらにそれをボツカしなければならなくなつたため、重量、費用に特に留意したつもりであつたが、一人一日当り一Kg弱、百五十五円という結果で例年とあまり変りなかつた。(梱包重量も含めて)当初はもつと軽く、安くするつもりであつたがこれがせい一杯であつた。

次に各点について反省してみる。

1. 献立内容について

(1) 調理を簡単にし、さらに食事をうまくしようとの意図からスープ袋なるものを作つてみた。これは肉(豚又鶏又鯨)一〇〇gを野菜(キャベツ、ホーレン草、ねぎ、にんじん)をラードでいため塩で味をつけてポリ袋の中に入れたものであり、一袋四人分である。ラードも

一しよに入れてある。これを朝夕湯の中へほうり込み味つけをすれば、うまいスープが出来るようにと考えたのである。これは一応成功し好評だつた様である。しかし塩味がうすく、温度も高かつたため最後には野菜がすっぱくなり、又途中デボしておいた分は押込みると腐つていた。完全な失敗である。使つた肉の内鯨肉はしよう油をたつぷり使い、にんにくとしようがで味をつけたがこれは最後まで大丈夫であつた。豚肉を主に用い鯨および鶏肉を従にしたが鯨を主にすればよい。又味もよい。

味の極度に濃くしておけば長期の保存にも十分であろう。改良の余地は十分あるが、改良してよいものにすればこれからも使つてよいと思う。又昼食用の魚ハムも廃し鯨肉でテキを作つた。これは時間等の関係から生協にたのんで作つてもらつた。一人約七〇gである。行動日に使用したが割合好評だつた様である。今度は魚ハムは極力廃して肉類を使うことに力を入れたが、魚ハムのあのいやなおいが食欲を減じているような気がしたからである。その点、肉にはくせがなく玉らん、ビーフンも美味く食べられたと思う。値段も鯨肉で一〇〇g十二円程度豚肉だと四〇円程度、鯨肉を使えばずっと安上がりだろう。

(2) 停滞日の昼食には米を使つた。停滞日は時間をもてあますのが常であり、せめて米でもたいて舌づつみを

うつてもらおうと思つたのである。調味料はチャーハンの素を即席カレーを使つた。ここでも例のスープ袋がものをいつた。行動日と停滞日の比は一对二であつたが停滞日二のうち一のみ米を使つた、つまり八日分である。

そして米は各自の個人装備としておいた、梱包するのはめんどろであり、八日分といえは一日一、五合だから一・二升、Kgになおして一・七Kgとして負担にならないと思つたからである。時たまたべる米はうまかつた。今度の食糧計画は昼のみ行動食と停滞食の区別をつくつた。しかし停滞食を行動食より悪くするという意味での停滞食は作らなかつた。

(3) めざしをなくしたためカルシウムはスキムミルクからとつた。スキムミルクはミルクにして飲むと同時にメリケン粉と共にホットケーキにした。

(4) 油はラードを用いスープ袋の中にほうり込んでおいた。二人一日三十区である。昼にはマーガリンは食べにくくスープに多く入れるのがよいと思う。

(5) 調味料はコンソメを主にしたがチャーハンの素をスープにしてもうまく、粉末袋入りであり、コンソメのチューブのむだもはぶけ又安い、考える必要がある。

(6) 朝および昼の主食にビスケットを用いたがクラッカー、かんぱんより食べやすく好評であつた。

以上献立内容について気のついた事を書いてみたが詳しい献立については献立表を参照されたい。与えられた範囲の中で出来るだけ、美味しく食べられるように心がけたつもりである。

2. 梱包について

一斗缶を用いた、しかし、BH用にはダンボールを用いた、BHまでのアプローチが短かく一斗缶の必要はないと思つたからである。しかしBHに入るのに予定より手間どり多少破損した。梱包は辻が行つた。

3. アタツク食について

ビバークする時の事を考えて、調理せずして食べれるものにした。又体積が小さく軽いという事に留意した。一人一日一Kg弱である。献立は朝昼晩共ビスケットにした。それにチーズ・ハム・バター・チョコレート・ミカン等をつけ、朝ココアをわかつて水筒、テルモスに入れて行つた。アタツク食は特にアタツクメンバリの嗜好を考慮すべきであろう。今回の場合ビバークするに至らなかつたのでその良否については判断が下せない。

(山本)

献 立 表

朝	ビスケット 1	玉らん $\frac{1}{6}$	昼	ビスケット 粟コシ3	夜	玉らん $\frac{1}{2}$
	クラツカー 1	玉らん $\frac{1}{4}$		鯨テキ(4人分) $\frac{1}{4}$		もち 300g
	塩せんべい $\frac{1}{2}$	玉らん $\frac{1}{4}$		レーズン $\frac{1}{4}$		ビーファン $\frac{1}{2}$
	スープ袋(4人分) $\frac{1}{4}$	間		スキムミルク 20g		スープ袋 $\frac{1}{15}$
コンソメ・塩コシヨ			紅茶			コンソメ $\frac{1}{15}$
			砂糖 30g			味噌 30g
			メリケン粉			カレー粉 塩コシヨ

(注) { 印をつけたものはそのうちいずれか選択
 昼食には停滯食として米とかんぱんを使った、それぞれ8日分づつである。

全 食 料 表

品 名	BH	C1	C2	C3	合 計
クラツカー	53	47	18	12	130
ビスケット	106	94	36	24	260
塩せんべい	32	24	10	—	66
玉らん	63	55	23	9	150
モチ	300	282	108	90	780
ビーファン	29	24	10	3	66
米	各	自	持	参	
粟おこし	157	145	58	40	400
かんぱん	26	24	10	6	66
スープ袋	102	86	28	22	236
鯨テキ	13	12	5	3	33
ハム	12	12	7	2	33
ラード	3	3	2	1	9
コンソメ	10	8	3	2	23
カレー(即席)	3	3	2	1	9
チャーハンの素	8	8	6	2	24
味噌	3	3	2	1	9
レーズン	13	12	5	3	33
ジャム	20	16	6	2	44
砂糖	11	11	5	3	30
スキムミルク	6	7	4	5	22
紅茶	3	3	2	1	9
茶	1	1	1	1	4
塩	1	1	1	1	4
コシヨ	2	2	1	1	6
メリケン粉	—	14	9	7	30
カレー粉	1	1	1	1	4
重 量	157	140	54	27	378kg

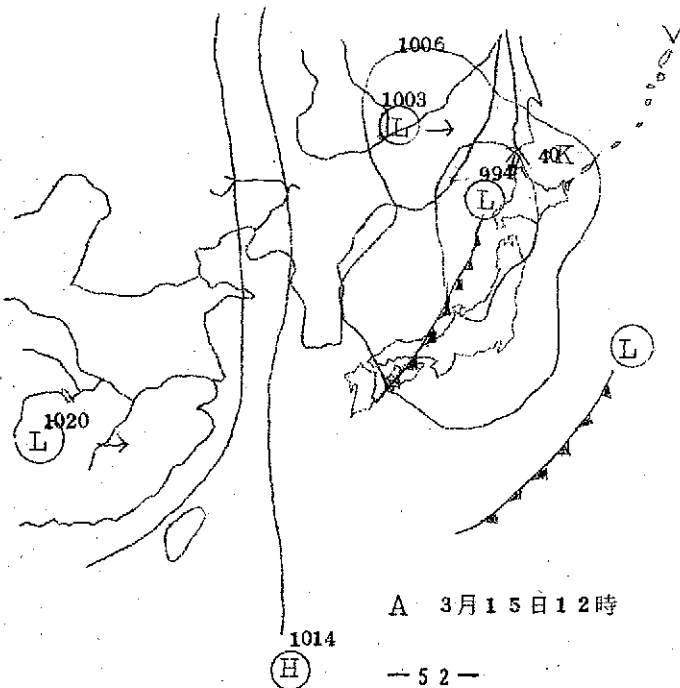
(注) 重量には缶の重さも含む 他にAttak用7kg(缶も入れて)がある

気象報告

春山の美しきそれは何といつても真白な雪と真青な空のコントラストによるものが多い。だから誰しも明日の行動のための天気ではなく春山の美を楽しむための天気に大いに感心をよせる。

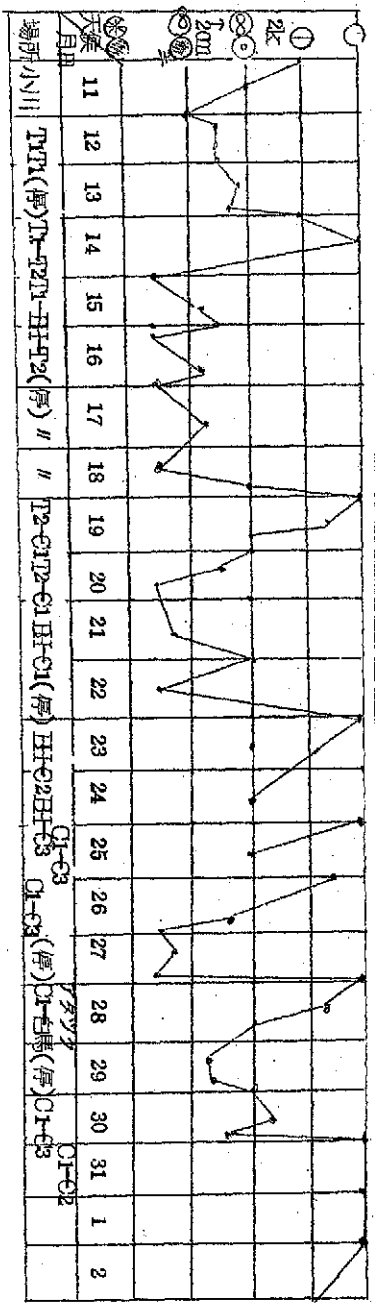
今度の合宿において我々は大いに感心は示したが多分気象係の行いが悪るかつたのか天候には恵まれていたとは言えない。一応ここに合宿中の天気変化を表に表わしそれを第一表とする。第一表によつてもわかる様に一日中快晴の日はほとんどなく午后になるとガスが出て午后の行動に支障をきたしたのは単に天候にめぐまれてなかつたと言うだけでなく日本海に面し朝日から北又小屋に向う尾根を左右から吹き上げて来る黒部でも有数の谷北又、柳又に囲れている地形的な関係によるものも否定する事が出来ない。

ここで高地の気候と低地の気候を比較見当してみる意味で、第二表に合宿期間中の輪島の天気変化を表にしてみた。一見似てない様でも多分にグラフとして大まかに共通点がつかめる。又大部異なる点も表われているのは誰しもこの表から感ずくであろう。日々の行動と天候の

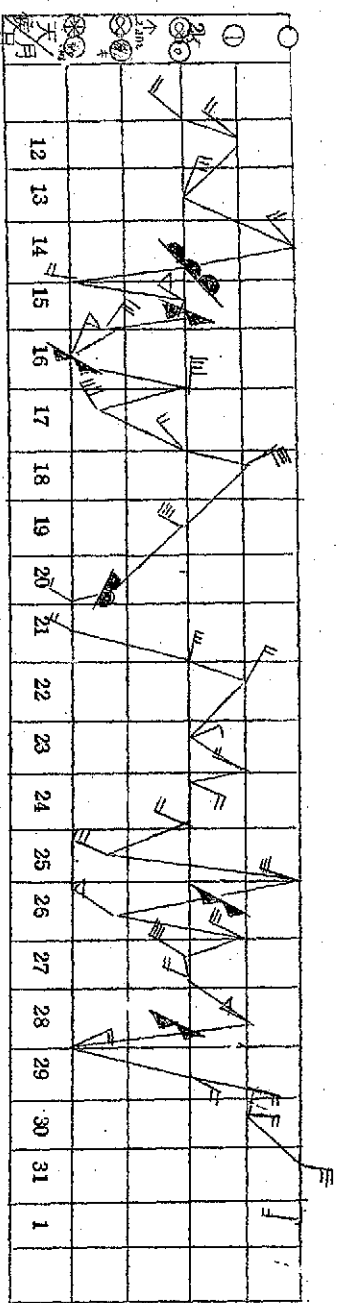


関係は行動記路と先の表を比較してみてもらう事としてここでは気候変化として興味ありそうな日々をかいつまんで一考してみたい。三月十四日北又小屋への偵察隊がAM

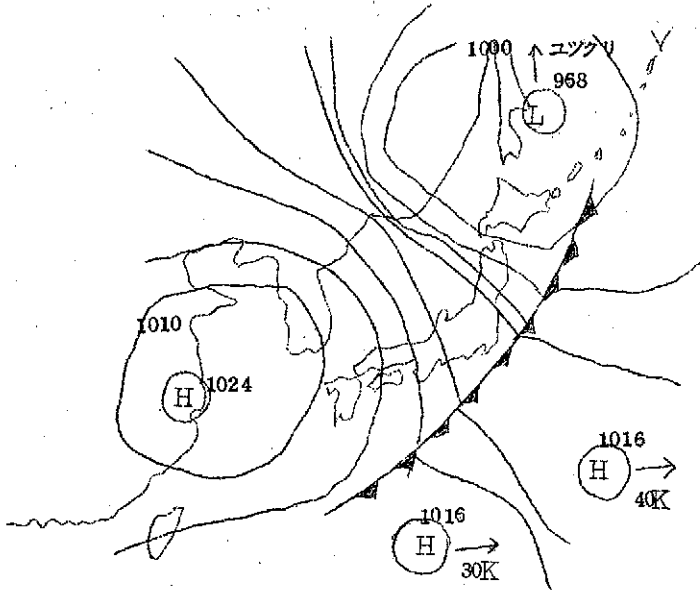
第1表 合宿間天気変化



第2表 合宿間の輪島の天気変化



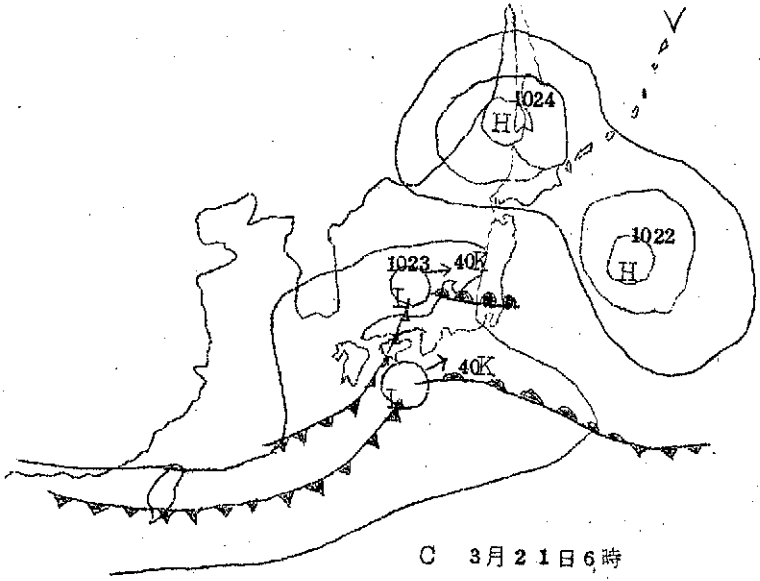
十一時にレンズ雲を見ている。これは温暖前線の接近を意味している。そして輪島ではその明朝六時にすでに前



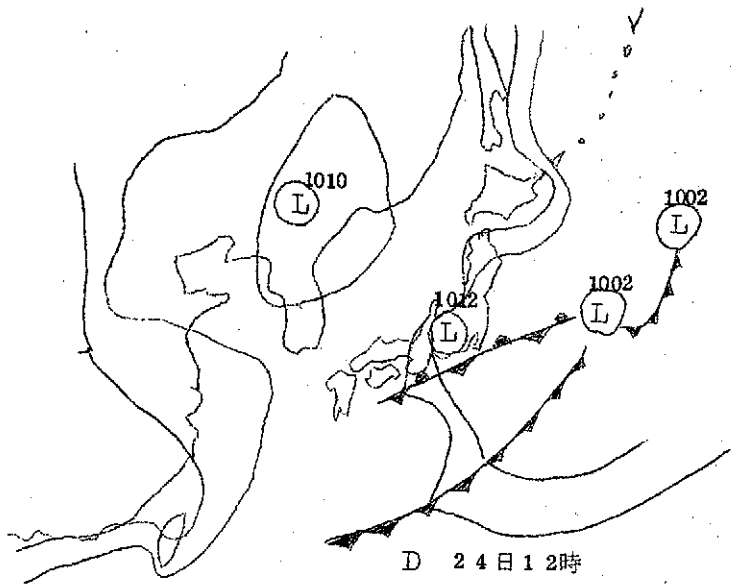
B 3月17日6時

線通過後の雨となつてゐる。十五日から十六日にかけてはアムール河及び日本海の低気圧の引ける寒冷前線の東進により風雪及び雪をもたらし我々はT₂に停滞のめにあつた。十五日十四時四〇分その一つの前線の通過のさい激しい春雷があたかも我らの向いの山に雪崩が起つたごとく我々のテントをゆさぶつて通過した。その時直径七〇程のアラレが降つた。A図はそのすこし前の天気図である。さらに十七日にいたつては天気図Bで示すごとく冬型の西高東低型となり十七日も停滞、次に一、二表の二十一日の天気を比較してみよう。輪島の天候によれば二十日はともかくも二十一日は動けそうにないが二十二日は動けそうである。しかし我々はまったく逆であつた。天気図Cを見ても一〇三〇mbの引い前線のたしかに降水域にあると考えられる。ここに平面的な天気図により立体的な山の気象を考えるむつかしさがあるのだらうか。僕はクマ先輩とのカケに負け百円取られるめに合つたのも彼の立体的な考えに僕の平ベツタイ考えとあつては百円の負けもやむえない。又二十一日(天気図C)に日本海上にかた菓子の様な雲を見た。これは一〇三〇mbの低気圧による降水域の最南端を表わしている様に思える。さて第一表の二十三、四、五日にかけての変化をみると毎日同じ様に凸凹をくり返している。これはD図によつ

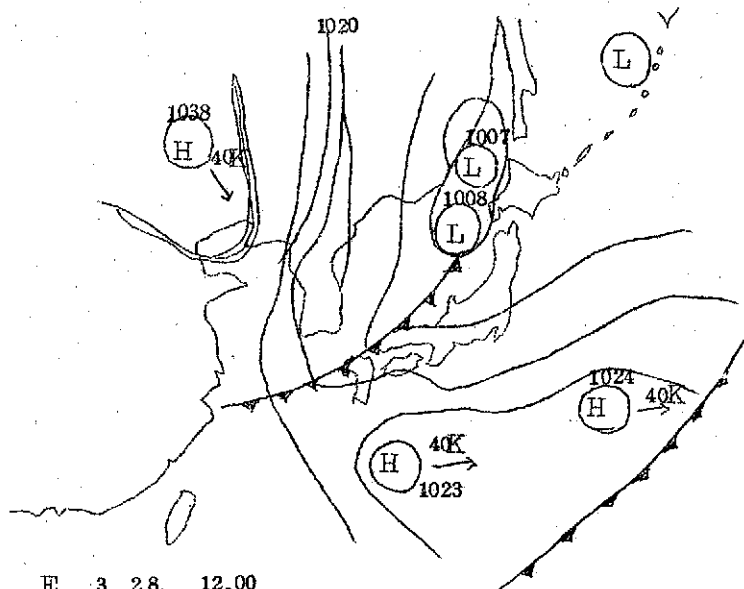
てもわかる様にこの頃きまつて午前中は晴れてて中部地
方にはない低気圧が三日間続けて午后になると現れる。



そしていつもはナタ・毛勝の方からガスつて行きつゞい
てこちらがガスののだがこの頃は白馬の南から雲がむく



むくと上り後立北部の我々の方がガスつてくるというぐあいだった。このたびの合宿で先にも書いたが午后にな



E 3. 28. 12.00

ると大半の日ガスられた。天気図上では前稿あたりに地形的低気圧が出来ている。

しかし天気図には表れない程の低圧部となる様にこのあたりは地形的に作られているのかもしれない。

最後に合宿の最高目的であるアタツクの日の天気図も参加までに記しておこう。

その日の天候の説明はアタツク隊の報告の方にまかした方が天候の実感のわいた説明となると思うので省す。

このたびの気象を考えてみると、もよりの観測所のデータを最大限に利用しそれとまわりの雲を利用する事により立体的にハアクして山行に於ける気象判断に役立つ事は無理だろうか。(桑原記)

あとがき

我が部としては久しぶりのポータである為、リーダー
初めメンバーがポータは無経験で、ポータの特性を十分
にのみこんで行うように気を配った。

結果としては非常にうまく運営され、テント間の連絡
食糧、装備のボンカとともに満足される状態であつた。

特に気象条件の悪いこの地域では、朝晴れていても、
正午頃にはガスリ出し、午後には吹雪出している。その
為行動は午前中に終らねばならない。その点を考えると
C1とC2、C2とC3の間の距離は適当だつた。

ここの稜線は広く技術的に困難さはないが、少しでも
ガスにまかれると盲同然となつてしまうやつかいな所だ。
そこで全行動が気象に支配される為、天候の予想が重要
になり、気象係のみならず、全員が常に関心をもつて正
しい判断を下して行動した点は今度の合宿の成功の一因
であつた。

この春山合宿で唯一遺憾であつたことは、新人の参加
が少なく、又二年部員の一部が急に不参加になつた為、
計画達成に目指す為、新人の訓練がOBの広瀬氏にまかせ
きりになつた点である。

(梶本記)

一九六一年度

一般山行

後立山

期 間 大谷原上流―布引―白馬岳
四月二十八日―五月五日

メンバー 前沢、白井、清水、横尾、頭森。

穂高岳

期 間 西穂―奥穂―北穂―潤沢
四月二十九日―五月四日

メンバー 酒井、佐藤

黒部・横瀬

七倉―鳥帽子―東沢―赤牛岳―金作谷―
―薬師岳―トビ谷

期 間 四月二十九日―五月四日(後出)

メンバー 田村、笠松、玉井、田井、梶本、三沢。

中央アルプス

期 間 宝剣―空木
四月二十九日―五月六日

メンバー 山本、笠原、岡久、辻、広橋OB、岡田OB

御岳

期 間 黒沢口―御岳―濁川
四月二十九日―五月一日

メンバー 西垣、大川、森、吉川。

黒菱―唐松

期 間 五月三日―五月五日

メンバー 打出。

上高地

期 間 槍見―焼―蝶・大滝
五月四日―五月八日

メンバー 梶本。

穂高

期 間 西穂―北穂―槍―徳本峠―島々
六月七日―六月十二日

メンバー 高田、岡久、辻

西穂高

期 間 五月三十一日―六月一日

メンバー 黒木。

赤谷山

期 間 ブナクラ谷―赤谷山―大窓―パンバ島
六月九日―六月十二日

メンバー 酒井、保母。

大峯山

期 間 坪内―彌山―深仙
六月九日―六月十一日

メンバー 浅井、吉川、牧野、播本。

夏山縦走

○東沢―雲ノ平―笠ヶ岳

期 間 七月二十七日―七月三十一日

メンバー 横尾、桑原。

○太郎山―薬師沢―雲ノ平―笠ヶ岳

期 間 七月二十七日―八月三日

メンバー 三田、藤森、牧野、吉川。

○薬師沢―雲ノ平―槍ヶ岳―穂高岳

期 間 七月二十六日―八月二日

メンバー 宇野、山本、笠原、柳井。

○剣岳―雲ノ平―鉢ノ木―唐松岳

期 間 七月二十六日―八月六日

メンバー 浜田、辻、秋濃、竹本。

○レンゾ温泉―白馬岳

期 間 八月二十五日～八月二十八日

メンバー 大工原、岡田OB。

○北俣谷

期 間 八月二十六日～八月二十八日

メンバー 打出、横尾。

○広河原―荒川岳―二軒茶屋

期 間 十月六日～十月九日

メンバー 横尾、浅井、大川、木原。

○夜叉神―農鳥岳―塩見岳―広河原

期 間 十月八日～十月十六日

メンバー 高田、吉川、牧野、秋濃、豊坂。

○双六岳―笠ヶ岳

期 間 十一月一日～十一月二日

メンバー 山本、浅井、豊坂、木原、竹本。

○双六岳―槍ヶ岳―西岳

期 間 十一月一日～十一月三日

メンバー 横尾、桑原、秋濃、吉川、柳井。

○新穂高―双六岳―鷲羽山―雲平―薬師南稜―有峰
(春山の偵察)

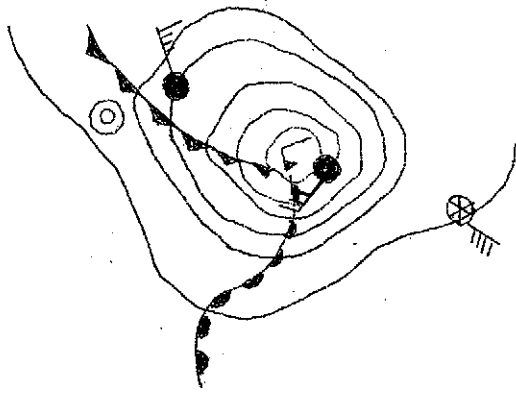
期 間 十月二十九日～十一月四日

メンバー 梶本、高田、三沢。

○新穂高―三ツ俣小屋―黒部五郎―薬師岳―房治
(春山偵察)

期 間 十一月二十八日～十一月五日

メンバー 保母、浜田。



1961年度

会 計 報 告

高 田 邦 雄

収 入 の 部

前 期 繰 越	8,728.-
部 費	35,500.-
体 育 会 より	12,700.-
ダンスパーティー	
利 益 金	52,013.-
そ の 他	3,120.-

計 112,061.-

支 出 の 部

通 信 費	6,104.-
交 際 費	7,600.-
装 備	37,553.-
備 品	6,225.-
(ノート・紙・その他)	
交 通 費	2,480.-
そ の 他	2,670.-

計 62,632.-

残 高 49,429.-

1 9 6 2 年 度 報 告

										役 員	監 督	
体 育 会	気 象 係	記 録 係	食 料 係	装 備 係	岳 連 係	会 計 係	新 人 係	マ ネ ー ジ ャ ー	サ ブ リ ー タ	チ ーフ ・ リ ー タ		
辻	桑	大	山	牧	横	高	浜	三	梶		広	木
	原	川	本	野	尾	田	田	沢	本		瀬	村
光	昭	和	久	大	秀	邦	彰	日	孝		貞	裕
弘	夫	秋	夫	輔	郎	雄	三	夫	治		雄	一
												元

1962年度

夏山合宿

1962年7月18日

「山小屋建設のポツカと穂高岳澗沢合宿」

梶本孝治

最初、夏山定着合宿地として、鹿島槍大冷沢を中心として一部カクネ里へ分散と考えて、調査研究を進めていたのであるが、六月末になり急に梅池の山小屋建設のポツカをしなければならなくなった。一方メンパーも上級部員が少く、初級、中級のルートが多くとれるという点で澗沢に決定した。従つて七月後半は梅池でポツカ生活、続いて八月に入り、澗沢定着合宿、そして縦走と一ヶ月に渡るかなり苦しい計画となつた。

澗沢合宿では、当然梅池での半月にわたるポツカの疲労から来る不注意による事故を最も恐れた。夏山合宿の第一の目的は一、二年部員のトレーニングとし、上級部員はその指導性の面に重点を置いた、そこであまり極端的で困難なルートは避け、穂高を広く歩き、岩を登るように努めた。時期が少し遅かつたため澗沢の残雪少く、岩場への往復に十分の雪上歩行が出来なかつたので、特

に、従来以上に雪上訓練に時間をかけた。これはかなりの成果があつたと思う。

結果として、夏の穂高は予想以上に登山者で混乱し、人工落石の危険性から滝谷等秀れた岩場に手を出しかなかった。澗沢のテント地の人間くさいのもあまりいだけない。穂高にしる、剣にしる、他の山々に比較出来ない豊富な岩場と残雪を蔵し、ルート図、グレートイングも明確で秀れたトレーニング地であるのだが、あまりそれに依存すると、人にわずらわされ、形式主義に流れやすく、岩は登れても、山を総括的に見る力のない登山に陥る。これは夏山合宿に限らず、一考を要することである。

縦走はあまり日数もとれず、意欲的なものが出来なかつたのは少々残念である。

「ポツカから澗沢合宿へ」

今年の夏山合宿は、前半は山小屋建設の為のポツカにスキー部、ワンゲル、一般の協力者等と共に当り、後半は澗沢で定着合宿という形式をとつた。

ポツカにあたっては、神ノ田圃早大小屋を中心として行動し、澗沢合宿に入る数日前に下山して、猪股氏宅を中心にした。ポツカの毎日を如何に暮らすか、又ポツカ

の疲労が涸沢合宿に残らない様にどの様に配慮すべきかこの辺りが、前半のキーポイントである。ポツカ時間は平均三時間程度であるが、砂利、小石等を七貫十六貫運ぶのであるから、大変である。しかし、これは豊坂の治療が物を言つた。

毎日の自由時間は、高山植物の理解とか、山の雲の観察、あるいは、ヒマラヤ夢物語にと過した。今後この様な場合、山の地質的な面に触れる者が、部員に一人位あつてもよいと思う。

又、疲労の問題は、猪股氏宅で、数日布団で寝ること及び、ポツカ量を制限すること及び、涸沢へ出発する前日は休養にあてることとして、涸沢合宿へと引継いだ。次に合宿記録を簡単に印す。

△ポツカ記録△

浜田、辻、木原は部よりも、山小屋建設の為の全体的な面から、働いている。

参加者 L三沢^④、山本^④、高田^④、桑原^④、大川^④、牧野^②、吉川^④、播本^④、秋濃^④、豊坂^④、栗原^④、原^④、大笹^④、中村^④、石浜^④

行動 7月16日と25日 栗原、原、猪股氏宅にてポツカ

7月16日と25日 全員早大小々にてポツカ

7月26日と31日 全員猪股氏宅

△涸沢定着合宿△

期 日 8月1日と8月9日

メンバ― L梶本^④、山本^④、三沢^④、高田^④、横尾^④、大川^④、桑原^④、牧野^④、吉川^④、播本^④、秋濃^④、木原^④、豊坂^④、中村^④、大笹^④、栗原^④、原^④、石浜^④、畑中^④、田村^④、笠松^④、宇野^④、広橋^④、田井^④、兼清^④、広瀬^④、玉井^④、佐藤^④、米沢^④

記録

8月1日(快晴)ポツカ連中 南小谷駅より一路大糸線で松本へ。徳沢園。

8月2日(晴)後発梶本等10名共に涸沢定着(19・36)

8月3日(快晴後雨)第一回雪上訓練全員。

TK宇野・米沢。この日三沢下山。

8月4日(雨ツ後快晴)台風九号の為停滞。玉井下山。

8月5日(快晴)北尾根、東稜、明神岳、天狗のコルと4パーティに分かれて歩く。木原・桑原・下山・広橋

・田井・入山。

8月6日(後後雨)昨日の一般ルート他にジヤンタルム岩登り、奥穂東北稜を加える。兼清・佐藤下山。

8月7日(曇)更に又白池、涸沢東稜、北穂北壁、

滝谷第二尾根にパーティを出す。

8月8日(曇後晴)第二回雪上訓練。

田村、宇野、米沢下山。

8月9日(雨ツ)停滞 定着合宿終了。

広橋、笠松下山。

合宿終了後、直ちにその場で反省会を開いてみた。

主な内容を次に個条書きに示す。

一、大バカ天が、台風に惨々であつた。又、青天のホ
ールが折れた。

一、新人のザイルの必要性、ザイルさばき。又トレ
ーニングの基本がおろそかになる。

一、落石が多い。ヘルメットの使用を考えねばなら
ない。縦走路で事故が起こつてゐる。

目撃者には非常なショックを与える。

一、テントに戻る時間の厳守。

一、二年生のルートフラインディングに不安がある。

一、ガス、雨中での岩登りとその判断。又雨具のつけ
時について。行動中での天候判断。

(大川記)

夏山涸沢定着合宿個人行動表

	雪上訓練		北尾	根東稜	天狗 コル	奥穂 東稜	ジャン タル	涸沢 東稜	北陸	又白池	高谷 2尾	横尾 本谷	明神	T.K	下山日
梶本	3日	8日	5日	6日							7日				10日
山本	3日	8日	5日			6日	7日						5日		
高田	3日	8日	7日	5日			6日								
横尾	3日	8日	6日		5日			7日	7日						
大川	3日	8日	5日	7日		6日						7日			
牧野	3日	8日	6日	5日				7日	7日						
吉川	3日	8日	7日	6日	5日										
播本	3日	8日	5日			6日	7日								

秋濃	3日	8日	5日	7日			6日					7日	5日		
豊坂	3日	8日	6日	5日						7日					
中村	3日	8日			5日									6.7日	
栗原	3日	8日	6日	7日								7日		5日	
石浜	3日	8日	7日	5日										6日	
原	3日	8日	5日	6日						7日					
畑中	3日	8日	5日			6日									7日
大笹	3日	8日		6日											5.7日
田村	3日	/	5日	7日			6日					7日	5日		8日
笠松	3日		6日		5日					7日				8日	9日
宇ノ		/	6日	7日	5日							7日		3日	8日
広セ	3日	8日		5日		6日				7日					10日
広橋	/	8日	7日	6日											9日
田井	/	8日		6日			7日								10日
兼清	3日	/	5日												6日
玉井	3日	/													4日
佐藤	3日	/	5日												6日
米沢		/		5日										3.7日	8日
三沢	3日	/													3日
桑原	3日	/													5日
木原	3日	/													5日

※ 数字は行動日 8月××日を示す。

冬山合宿報告

「梅池より白馬三山」

梶 本 孝 治

白馬岳梅池に今年の夏、部員が文字通り、汗と涙で資材をボツカした阪大の山小屋「梅木寮」が完成した。

長年にわたり希望した山小屋を山岳会発足当時の先輩の輝しい足跡を残した白馬岳の麓に得たことは大へん喜ばしい。夏山合宿後、山小屋建設を見に行つた時、既にぜひ今年の冬山は木の香りも新しい山小屋をベースとして決めていた。これは又、資材を背にした部員一同の希望であつた。

十一月白馬岳が新雪に被われた頃、山小屋完成、同時に冬山、春山食糧荷上げと偵察を行つた。梅池より不帰往復の冬山計画で偵察した結果、地形的には乗鞍岳の斜面の雪崩、不帰の通過が問題となつたが、さして困難とは思われない。しかし問題はこの地域の悪天候にある、過去数年の記録を調べると予想以上に悪く、遭難例も長期の風雪と多量降雪によるものである。統計的に考えて、樹材帯以上の行動は三日に一日では無理な様なので我々

の冬の休暇では不可能に思われた。春山計画は日本海より後立縦走であるので、冬山は白馬鎗までとし、新人も可能な限り上部テントに入り露営訓練、スキー練習も重視する事にした。

結果として二十三日に入山以来二十九日まで冬の北アルプスとしては、例外的な好天候に恵まれ、連日行動で二十四日にB入り、二十五日、天狗原にABC設営、二十七日大池南端にACを設営し、二十八日に予定の鎗往復を行つた。その間前後三日間二年部員以上ほぼ全員白馬岳往復出来た。この前後はまるで春山の快晴を思わせ、雪も天狗原より上部はよくしまつていた。三十日より新人もABCで四日にBHに撤収するまで、スキー練習を行つた。この間機会があれば新人のトレーニングに再び上部に行きたかつたが、さすが厳冬期らしく風雪の毎日で成し得なかつた。天狗原の風が通る所に張つたテントも朝目が覚めた時にはベンチレーターまでうずまつていた。数日前の天狗原と異り、強風に粉雪が川のように流れていた。この胸まで没する登攀には絶望的な粉雪も、我々に最高のスキーガレンヂを提供してくれた。

天狗原の風雪の中での五日間のスキー練習では基礎を一通りやるのがせいぜいといつばいで、もう数日欲しい、しかし、かなり全員上達した様だ。

天候が良ければ、山岳部のスキーらしく広範囲に歩き回
りたかったが、風雪の天狗原では盲同然で出来なかつた。

四日、天狗原の三張のテントを掘り出し、風雪の中、
腰までの粉雪の中を泳ぐように下る、BHにたどりつき、
ストープの囲りに部員の顔がそろうと、凍りついていた
口もおもほころび、ストープの前にどつかと座り込む
と胸に我々の山小屋を持つた喜びがぐつと来た。

冬にこの山小屋「梅木寮」を使用した結果、今後この
小屋をベースとして新人合宿を持つ事は非常に有効だと
思う、スキーが広範囲に使用出来、天狗原にテントを設
営すれば、天候にさえ注意すれば白馬往復は容易である。
新人を冬山合宿にすぐ参加させるにはいろいろ問題もあ
り、トレーニングも中途半端になりがちであつた。

梅池周辺でスキーで雪にまみれる事は冬山第一歩に最も
ふさわしい。それに今度のように正月休みを利用して先
輩達が多数小屋を訪れば、楽しい新人合宿になるだろう。

行 動 予 定 表

予定日	千園崎	猪股氏宅	御殿場	神ノ田 B,H	天狗原 ABC	大池 A,C	小蓮華	白馬岳	白馬鎗
12/21	先発 4名	2							
22		2		2					
23		2	18	2					
24		18		2					
25		18		2					
26				20					
27				9					
28				11	9				

29	三沢・OB		3	4			
30				4			
31			(8-3)	8 5	4		
1/1			3			アタツチ 2	
2							
3						サボ 2	
4			11	5	2(+2)		
5				5		2	
6			11			2	
7				5			
8			11	5 4	4		
9				5			
10							
11							
12		20	20				
13							

行 動 表

○ : スキ - 練習

	猪股宅	御殿場	神田園BH	天狗原ABC	大池AC	白馬岳	白馬鉾
12/21	3	先発隊	浜田・山本・高田				
22		3	(本隊 大阪港)				
23◎	本隊 15	3 16	デポ	御殿場小や、食糧一部デポ 浜田・高田は山小やの仕事で猪股宅			
24⊗		12	5	梶本等5名 上部偵察 デポ回収ダラルポツカ			

25	○			○	梶本, 横尾, 高田, 大川, 山本, 栗原, 秋, 豊坂 次田, 吉川, 橋本 新人5名	天狗原ABC講習
26	○		!	⊗	AC用食糧予和 キ-18-1 炊)	
27	○			⊗	キ-18-1 豊坂 高田, 大川 山本, 栗原 横本, 横尾 秋, 秋)	A.C 建設 初一回白馬登頂
28	○	2	木原 (米沢)	⊗	山本, 豊坂, 秋, 吉川 横本, 横尾 キ-18-1 橋本, 秋)	白馬麓下力の成功 初二回白馬登頂
29	○	三沢等4名	次田, 藤, 柳中 木原 (米沢)	⊗	栗原, 秋, 秋, 秋) キ-18-1 橋本 山本 石浜, 栗原 高田, 大川 横本	初三回白馬登頂 新人ABCに付
30	○	野田, 平田, 大工原		⊗	栗原, 秋, 木原 (米沢) 秋)	
31	⊗	野田, 平田, 大工原 保母		⊗	山本, 高田, 横尾	
1/1	⊗			⊗	三沢, 栗原, 秋, 秋) 山本, 高田, 横尾, 木原 (野田) (大島) (清水) (保母) (田中) (米沢) (大工原)	
2	⊗	(田中) (清水) (保母)		⊗	山本, 横尾	
3	⊗			⊗	ABC 積雪多<天井修理中	
4	⊗	(野田) (木島) (保母) (大工原) (米沢) (高橋) (佐々)		⊗	天狗原ABC 撤収 積雪多<天井修理中 橋本ら16名	
5	⊗	22名		⊗	全員BH撤収 会宿解散	

行 動 概 要

期間 12月20日と1月5日

メンパー CL 梶本、SL 山本、SL 浜田、装、牧野、播本、
 食 古川・秋濃、気象、記録 大川、医 豊坂、
 梱包 桑原、三沢、横尾、高田、木原、中村、大笹、原、
 石浜、畑中、栗原、大工原、保母
 阪大梅ノ木寮訪問 OB 大島、平田、野田、清水、高橋、
 佐藤麟、米沢、田井

12月20日 先発浜田、山本、高田3名

12月21日 先発3名 杏掛猪股氏宅泊。

12月22日 夏道を阪大小ヤへ向う。

10・30猪股氏宅出 14・30阪大小屋

後発 梶本等現役16名、篠田先生始め、OB多数の見送りの中を、大阪駅を後にした。

12月23日(◎)おきまりの時刻に千国崎の駅に着いた。とに角、猪股さん宅迄、一時間程、ボツカせねばならぬすごい荷物である。この人数で、1回で運びきれるか、と疑問になつてくる。ある者はザツクには背負いきれず、両手を使用する。途中、先発3名が小屋から下りて、迎えにきて呉れた。秋の降雪の名残りも消え、予想外に雪

はなく、東山連邦も、所々白いのが見えるだけである。猪股氏宅で御馳走になり、午後には、御殿場の小屋迄一人平均七割ボツカする。夏道が殆ど出ていて、全く意外だった。先発の話では、既に早大始め、数パーテイが入山していることである。風呂に入り、ぐつすり寝込んだ。

9・15千国崎着 10・20同出 11・30猪股氏宅
 14・00同出 16・00御殿場 17・30猪股氏宅

先発7・30小ヤ出 9・10猪股氏宅

12月24日(◎)起きれば雪である。私達は小ヤに入る迄このドカ雪のラツセルを極度に嫌だった。ところが今年のは雪が少く、又先に入山した者があつてこのラツセルの苦勞の減つた様に思われた。しかし本日は雪である。

これで山の様子も一変するだろう。小ヤ迄は膝程度迄のラツセルだった。そして雪の中に我が小屋を見た時、夏の汗と泥から今日のこの姿迄、感慨にふけらずにはいられない。降雪は激しく、寒かつた。その中を、御殿場迄昨日のデボ荷を取りに下る。一部は、天狗原への登りを偵察に行く。この隊は、スキーでかなり苦勞した。

5・00起床、6・55出発、13・10小屋、13・50同出
 14・20御殿場 15・30小ヤ

12月25日(○)起きれば満天星空。目指す白馬三山

が目前にどつしり構え、やがて赤色を帯びてくる。無風である。全員スキーにシールをつける。出発早々に問題が起きた。勿論ある程度は予測されていたことだが・・・始めてスキーをつける者の選れである。こゝで一年生は殆んど全員ワツパになる。スキーにした場合、パーティーが分散しがちになる。スキーは登りの道具と割切つてい

るが、その登りの技術に利用するにも、まだまだ未熟であるし、個人差が激しい。とに角、快晴無風の中を11・30天狗原へ全員集つた。そして、こゝをA・B・Cとした。場所は天狗原社のすぐ横。未だ夏の岩が露出している。どこかのパーティーが、テントを張つている。又今日の快晴に、白馬アタツクの連中も戻つてくる。懸念された乗鞍の斜面も、大丈夫の様である。しかし、一度、ドカ雪がくれば、やはり危険だ。浜田等の新人中心部隊は小ヤへ下り、天狗原では、でつかいブロックを組んで、テントを構えた。里の景色も、一辺して化粧する。午後には白馬を見ながら、スキーでころげまわる。

4・10起 8・30小ヤ出 11・30天狗原、浜田等
 8名小ヤへ下る。天狗原1テント2張り9名、
 12月26日 ④↓○[※] 地吹雪である。様子を見ていると青空が広がっている。この強風の中を大池にACを出すのは、少し見合す。大池のテント地選択を兼ねて、荷物

をデポしに出る。乗鞍岳を登りきると、猛烈な風が、顔に吹きつける。旗ざおをもつ横尾は、足がとられると、ボヤク。テント地は、大池の南のコルの附近にする。乗鞍岳の頂上でガスに巻かれると、動きがとれなくなるなるう。帰りは早かつた。強風について、スキーに戯れる。

小ヤの連中は、浜田を先頭に樽池へ出かけ、スキー練習。早大の連中は相当上手いらしく、劣等感を抱いた。

5・00起床 11・30出 13・00大池にデポ
 13・50天狗原 14・30スキー 16・00テント
 12月27日 ○↓○↓◎↓○

AC建設の日。鹽の様な好天気恵まれ、大池AC予定地迄楽に行けた。冬山の九日週期あるいは、天候の九年周期等、今の所当たる気配がない。AC建設には高田、大川が当たり、梶本、横尾及びサポート4名は、あまりの天候に小蓮華往復と足を延した。更に小蓮華から白馬岳へと足を延してしまつた。馬鹿陽気である。一体、冬山でこの様なことが・・・?。時に気温6℃

3・00起床 5・30出 7・00大池AC 7・30梶本
 等6名小蓮華へ迎う。8・40小蓮華 10・00白馬
 16・30同出、12・00大池、山本等4名ABCへ下る。

この日小ヤでは、やはりスキー練習を行い、又早大との親睦を深める。又、播本、吉川が天狗原へ入った。

さて夜は、明日アタックが出せそうだとのこと、準備をする。アタック食の量が馬鹿に多い。スリーブ袋10も要らぬ。ビーフン迄も多すぎる。1/2程度に食糧を減らす。ラジユースの調子も快調だ。点検も終わり、アタック棍本、横尾は18・30寝る。高田と二人、22・00の天気図をつける。ラジユースで水筒に水をたつぷり積み、ローソクの明りの中で、二人しんみりラジオのメロディに耳を傾け、夜の更けるのを感じた。テントから出ると、星が親しく眼ばたきする。

天気図から、僕がいえるのは、午前中は今日と同じく快晴だろう。しかし、午後は下り坂に向う可能性が強い。アタック隊には、日本海の雲の変化に特に注意してもらおうということだった。

28日(○)無風快晴である。4・20テントを飛び出す。すでに他のパーティーが先行している。懐電の明りをたよりに、アイゼンをきかす。アタック隊の重量は十五kg/二十kg、快調のピッチで、どつちがサポートに分からぬ。白馬のピークで、四人そろってモルゲン、ロートをあびる。数パーティー一緒になる。剣の勇姿を仰ぎ、槍穂高の山群に目をやる時、我々は自然の一個

の生体にすぎない。

頂上で握手を代わし、別れをつげた。棍本の青い影かなキルティンク、横尾の草色の地味なキルティンクが、見る間に去つてしまった。ACに戻り、天狗原から来た4名と乗鞍で日向ぼっこをしてアタックを観察するも分らず。天候は春の快晴に劣らない。あまりにも運に恵まれている。午後になつて気温6℃。昨日積んだブロックは、解けて隙間が出て、みじめである。

アタックは全く御機嫌で戻つた。13時間程の行程でさすがに、へばり気味ながらも、白馬三山往復にすつかり気をよくしていた。天候がよかつたので、烈風に合うこともなかつた。

小ヤでは相変らずスキーである。

アタック記録、メンバー、棍本、横尾。サポート、高田、大川、3・00起床 4・45出 6・00小速華 7・15白馬岳頂上 7・45同出 サポート引返す。9・00杓子岳、9・45白馬鎚岳、10・40同発、13・30白馬頂上 15・30AC
12月29日(○) 予想外の好天の連続でアタックが予定より早く終つたので、2年部員を全員白馬へ連れて行くことにし、大池ACは今日撤集することにした。
明日からは天狗原で1月4日迄スキー合宿にきりかえ

る方針。この日、梶本が2年吉川、豊坂を連れて白馬を往復する。これで2年部員以上で頂上を踏まぬのは、浜田、遅れで入山の三沢、木原、捻座の播本である。又、スキー合宿の為、小ヤから新人を全員天狗原を上げた。

12月30日 ⑥ ミゾレ気味

12月31日 ④

1月1日 ④

1月2日 ④

1月3日 ④

スキー練習

連日の好天とはうつつて変つて地吹雪の連続である。

降雪も激しく、一晚の中に、テントの高さは積もる。

この中で梶本をコーチにしてスキー練習に励む。

新人にはかなり、こたえた様だったが、いゝ経験だった。

尚お途中1月1日にはOB連が、私達の顔を拝み

きたので、敬々しく拝んでもらった。

1月4日 ④ テント周囲の雪の量が烈しく雪かきも追

いつかなくなり出す。今日撤収。撤収にひどく時間を

食い、考えねばならぬものがある。撤収は一つの大仕

事であつて、軽々しく考えてはいけない。やゝもする

と、もう下山だという気が先に走つて、安易に考えら

れはしないだろうか。小ヤの夜は楽しかった。小豆を

ぐつぐつ煮て、サトウを入れ、もちを入れて食べたなら、うまかつた。

4・00起床 12・00出 15・30小ヤ

1月5日○↓◎ 出発の時と同じ様にモルゲン・ロト

トに輝く後立を仰ぎ、喜び勇んで、懐しい山小ヤを後

にした。この長いツラ、も、又春がくると共に消えて

いくことだ。親ノ原のにぎやかなスキー客を横目に、

重い荷物を背に、下手ながらもきたえたスキー客を猪股

さん宅へとすべらせた。

4・30起床 7・10出 12・00猪股氏宅 解散。

(大川記)

装 備 報 告

ポラーラ形式をとつた合宿であるため、特に軽量化を
 図る必要もなかつた。只、風の強い所であることを考慮
 して、張線の予備を十分に持つて行くとか、どんな小さ
 な穴でも修理するとか、テントには十分気を使つた。以
 下各品目に就き説明を加えることにする。

テントAC用を使用したテトロンテントは、相変わら
 ず雪が吹き込む状態で、内張りを何とかしなければなら

め必要を感じた。山行後、点検を行なった際、テントの破損がかなりひどかった。特に全体よりも外に出ているポール入れの破損がひどいということから考えて、除雪の際のスコツツによるものと考えられる。特に、積雪の多い時などテントの *area* が掴みにくく注意して欲しい。撤集の際、前日除雪を怠つた為、ベグまで掘り起こすことができず、その日のうちに小屋に着けるといふ安心感も手伝つてか、結局張線を切つてしまつたが、ギリギリの撤収ならともかく、可成り余裕のある撤収であつたのだから、反省すべき行動である。

スコツツ——大1、小2を携行したが、小の方は大に比して極端に除雪能力が弱く、AC用ならまだしも、極地に於ける中間キャンブのように、かなりの期間にわたる同一地域に設営する場合には、是非とも大型を使用したい。

竹ザオ——赤布にひもをぬいつけて竹ザオに結びつけ使用したが、強度的に不十分であり、又合宿の都度部員の家族や *girl friend* に迷惑をかけねばならず、一考の余地がある。一つの提案として、布を直接竹ザオに巻きつけ、ゴムで止めるようにしたらいいと思うのだが。

ラジウス——*attack* 用に一個購入した。その性格上、軽く、取扱いが簡単で、かつ普通の能力をもつものを捜

したが、適当なものがなく、用途の広いことも考え合わせて、結局 *normal* な *Radius* に落着いた。従来の

Radius は各部品(特に *Packtag*)の老朽化が著しく、能力が可成り低下している。しかし、なにせ外国製であるため部品の入手が困難であろうと思われる。御存じの方は御一報願いたい。従来の合宿に於てもそうであつたが、*Radius* の使用が乱暴である。例えば、ゴムのついたジヨウゴを平気で使うとか、曲がつたマンドリンを使うとか……。

テルモス——相変らず破損が多く、二本程壊してしまつた。外のカバーとガラス瓶との間に綿をつめれば、ある程度防げるものではないか。

ケロシン——*0.75 pint day* として準備した。少し余つたがギリギリなのもちよつと不安だし、適当なところと思われる。容器のポリタンクは内蓋のないものを購入したが、どうしてもケロが漏れ出し具合が悪かつた。

以上思いつくままに書いたが、さして悪天候にも会わず、欠点が現れなかつたが、テント、或いはザイルに対する明瞭な *Data* が無いことは今後に残すものである。数的な *Data* を得る手短かな方法はないものだろうか。一般に装備品の取扱いが非常に雑である。装備は融通性に乏しいものであるから、破損、粉失等は致命的

な結果を引き起こし得る、ということを考えて、取扱いは山だけでなくルーム内に於ても充分留意して欲しい。

(牧野記)

装 備 表

品 名	単重量	樽池 BH	天狗原 A B C	大池 AC	A 用	合計	総重量
テント V1	12.0 ^{Kg}		1			1	12.0 ^{Kg}
V2	12.0		1			1	12.0
V3	12.0	1				1	12.0
T1	8.0			1		1	8.0
ペグ	0.1	12	28	18		58	5.8
G.S	1.5	1				1	1.5
鋸	0.5		1	1	1	2	1.4
スコツラ	大1.6	1	1			1	3.0
	小1.2		1	1		2	
張線予備			4	2		6	±0.3
タウシ	0.05	2	2	2		6	0.3
ツェルト	1.2		2	2	1	4	4.8
ビニールシート(3×3m)				1	1		0.5
ザイル (白)	2.5		1	1		2	5.0
(赤)	2.0			1	1	1	2.0
カラピナ	0.12		2	4	2	6	0.72
竹ザオ	0.1	20	20	10		50	5.0
赤布		15				15	
ラジウス	1.2	1	2	1		4	4.8
石油コンロ	3.0	1				1	3.0
コッフエル	0.8		2	2	1	4	3.2
オ玉	0.05	1	2	2	1	4	0.15
テルモス	0.54	2	2	3	2	7	3.7
ケロシン		40ℓ	16ℓ	10ℓ	2ℓ	68ℓ	68.0

メタ	0.12	6	8	6	2	20	3.0
トランシーバー	1.0	1	1	2	1	4	4.0
ラジオ	0.8	1	1	1		3	2.4
自記温度計	3.0	1				1	3.0
寒暖計	0.04	1	1	1		3	0.12
天気図		1	1	1		3	
ポリタン		2	4	5	1	11	
エヤマット修理具		1	1	1		3	
ブラックテープ		1	1	1		3	
ラジオ電池		1 set	1 set	1 set		3 set	≠ 1.0
ポリエチレン袋				2	2		
ローソク	0.06	30	25			65	4.0
マンドソン		3	6	8		17	
計		27 ^{kg}	58 ^{kg}	39 ^{kg}			124 ^{kg}

食料報告

冬山合宿の食料計画は、主として昨年度の春山合宿の食料計画を参考にして立案した。秋にB日へ二三〇kgの食料をポツカしてあつたので、軽量化には留意しなかつた。B日とABCで停滞食として米を少し使つた以外は行動食と停滞食の区別をしなかつた。主食と調味料は出来るだけ種類を多くしたかつたけれども、費用などのために結局旧態依然たるものになつてしまつた。

反省

一、秋のポツカるとき、梱包の仕方を間違つたために、主食や調味料の種類がテントによつて偏つてしまつたのは食料係のミスであつた。しかし合宿の期間が予定より短かつたこととテント間の連絡が容易にできたので、極度に種類の偏りを感じなかつたかもしれない。

二、スリーブ袋について

これは昨年度の春山合宿のときは、非常に手間がかつたので、生協に依頼することにした。肉として、豚肉ばかりを用いたのは失敗であつた。もつと脂肪の少ない肉を用いなければ、肉の量が少く感じる。軽量化のためにはまだ改良の余地がある。

三、その他

量が少いという声も一部ではあつたが、それは胃袋が少々異常な連中のことで、常人にとつては十分であつたと思う。

合宿が予定より早く終つたので食料が相当余つたが、それは春山で使うことになつた。

アタツク食について

アタツクが非常に気象条件のよいときに行われたので、アタツク食としての良否の判断を下すことはできないと思う。しかし、もう少し軽量化、簡素化をはかる必要があると思われる。

次に献立表、食料総表を記す。

= 冬 山 =

献 立 表

(1 人 1 日 分)

	BH	ABC	AC
朝食	ビスケット 1本	ビスケット 1本	ビスケット 1本
	クラツカー 1本	クラツカー 1本	クラツカー 1本
	カンパン 1袋	カンパン 1袋	
		バタクラツカー 1袋	
	コンソメ $\frac{1}{15}$	コンソメ $\frac{1}{15}$	コンソメ $\frac{1}{15}$
	チャーハンの素 $\frac{1}{4}$	チャーハンの素 $\frac{1}{4}$	チャーハンの素 $\frac{1}{4}$
	ミソ 30g	ミソ 30g	ミソ 30g
	カンヅメ $\frac{1}{5}$	スーウ袋 $\frac{1}{4}$	スーウ袋 $\frac{1}{4}$
	ラード 20g		
	野菜 適量		
スーウ袋 (行動日のみ)			

	玉 蘭 ソ バ $\frac{1}{6}$	玉 蘭 ソ バ $\frac{1}{6}$	玉 蘭 ソ バ $\frac{1}{6}$
昼 食	ビスケツト 1本 カ ン パ ン 1袋 クラツカー 1袋 ハ ム $\frac{1}{4}$ ソ ー セ ー ジ $\frac{1}{3}$ ジ ャ ム $\frac{1}{4}$	ビスケツト 1本 クラツカー 1本 カ ン パ ン 1袋 ハ ム $\frac{1}{4}$ ソ ー セ ー ジ $\frac{1}{3}$ ジ ャ ム $\frac{1}{4}$	ビスケツト 1本 クラツカー 1本 バタークラツカー 1本 ハ ム $\frac{1}{4}$ ジ ャ ム $\frac{1}{4}$ ミ カ ン $\frac{1}{2}$ (行動日のみ)
夕 食	玉 蘭 ソ バ $\frac{1}{2}$ 中 華 ソ バ 1 ビ ー フ ン 1 モ チ 6ケ ス ー プ 袋 $\frac{1}{4}$ カ ン ツ メ $\frac{1}{3}$ ラ ー ド 20g 野 菜 コ ン ソ メ $\frac{1}{5}$ チヤ ー ハ ン の 素 $\frac{1}{4}$ 即 席 カ レ ー $\frac{1}{4}$ ミ ソ 30g	玉 蘭 ソ バ $\frac{1}{2}$ 中 華 ソ バ ビ ー フ ン 1 モ チ 6ケ ス ー プ 袋 $\frac{1}{4}$ 全 左	玉 蘭 ソ バ $\frac{1}{2}$ ビ ー フ ン 1 モ チ 6ケ ス ー プ 袋 $\frac{1}{4}$ 全 左

注 上表で〔 〕印をつけたものはそのうちいづれか一つを使う。〔 〕印をつけたものは同時にそれだけ全部を使うことを示す。

以上の他に紅茶、ミルク、緑茶、砂糖、メリケン粉(ホットケーキ用)等を使った。

BH、ABCに於て、停滞日の昼食用として米及びカレーを少し使った。

アタツク食

総 量

スープ袋10ケ 2米2袋 紅茶1袋 ビーフン9ケ ウィンナーソーセ
 ージ30本 砂糖1袋 玉蘭ソバ4ケ チョコレート20枚 レモン1ケ
 ビスケツト10本 チヤ ー ハ ン の 素 5ケ カステラ4食分 アメ玉2袋

計 10日分

献立表は省略

= 冬 山 =

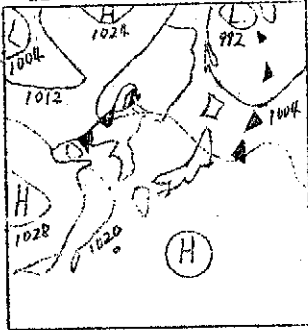
食 料 総 表

	梅 池 BH	天 狗 原 ABC	大 池 AC
ビスケット	161	96	30
クラッカー	10	40	22
カンパン	204	20	10
バタークラッカー	54	26	10
米	92合	41合	
玉 蘭 ソ パ	61袋	24袋	17袋
中 華 ソ パ	34	40	
ビ ー フ ン	109	28	6
モ 子	1.8kg	6.6kg	4.5kg
コ ン ソ メ	14ヶ	5ヶ	2ヶ
チヤ-ハンの素	63袋	29袋	6袋
即 席 カ レ ー	36筒	11箱	3箱
ミ ソ	1.5kg	1.7kg	0.5kg
塩	2袋	1袋	1袋
コ シ ヨ ウ	1	1	1
砂 糖	7.5kg	3kg	1kg
ハ ム	12本	15本	11本
ソ ー セ ー ジ	39本	18本	
カ ン ツ メ	89個		
ラ ー ド	10kg		
ス ー プ 袋	15ヶ	46ヶ	23ヶ
ジ ャ ム	50ヶ	17ヶ	11ヶ
ミ ル ク	12箱	6箱	2箱
紅 茶	5箱	2箱	1箱
緑 茶	6袋	2箱	1袋
野 菜	426食分		
メ リ ケ ン 粉	適量	適量	適量
計	298日分	94日分	36日分

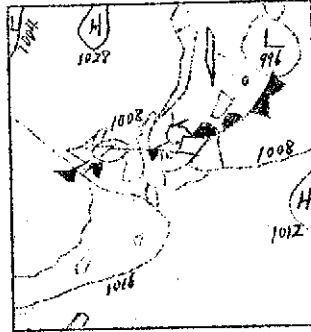
気象記録 (その1)

天気図 (1962.12.22 ~ 1963.1.6) (18.00)

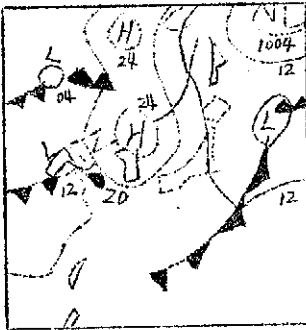
12/22日



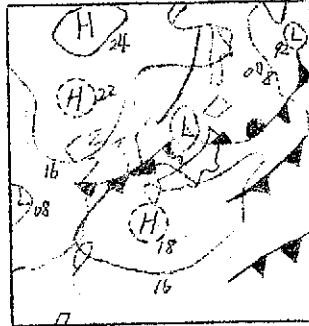
23日 (◎)



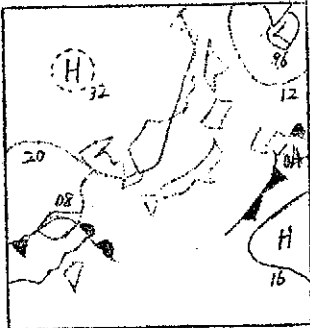
24日 (⊗)



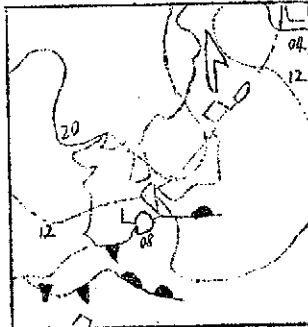
25日 (○強風)



26日 (○強風)

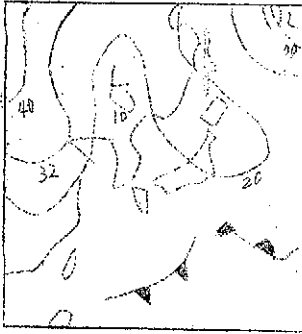


27日 (○)

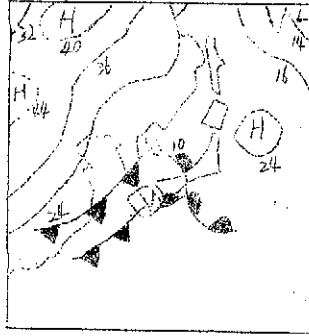


右表の「計」は一人で食べばそれだけの日数がかかることを示す。
(吉川記)

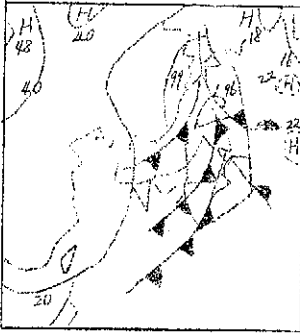
28日 (○)



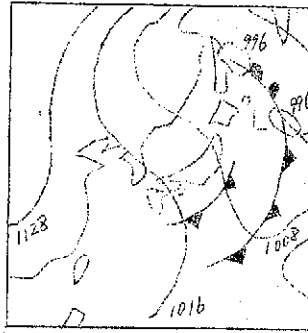
29日 (○)



30日 (⊗)



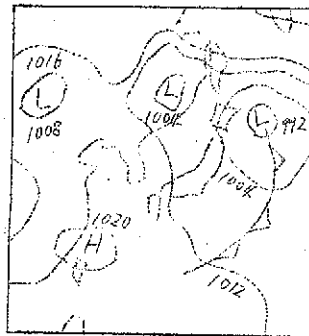
31日 (⊗)



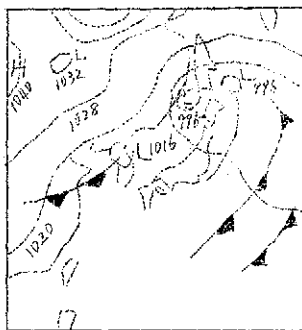
1/2日 (⊗)



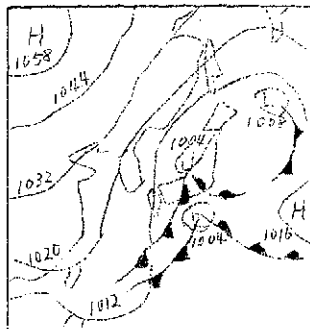
3日 (⊗)



4日 (⊗)



5日 ① → ⊗



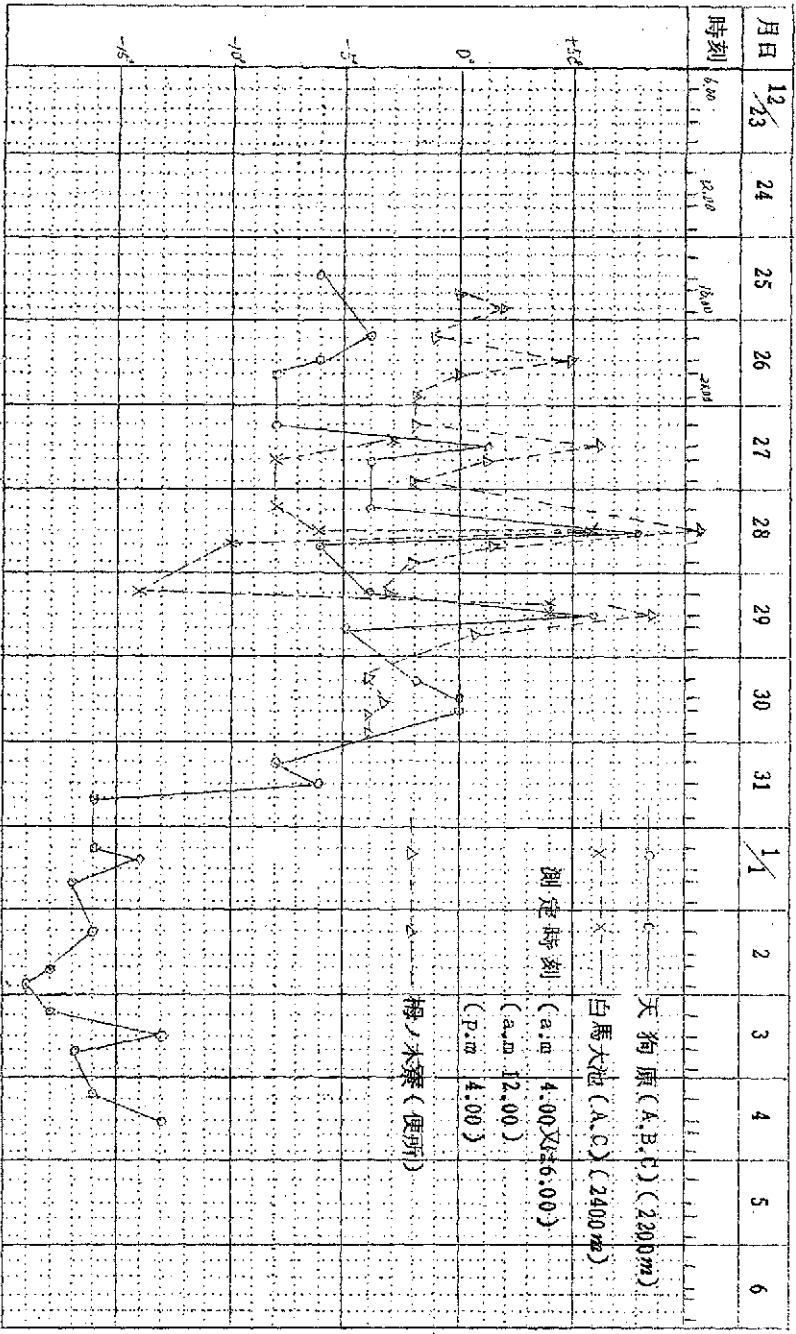
気象記録 (その2)

		神ノ田園(樺木寮)	天狗原	白馬大池
12月24日	天候・風	雪 N		
	気温	-8° (19.00)		
	新雪量	5.0 cm		
	備考	18人泊り		
25日	天候・風	快晴 無風	快晴→ガス→無風→W/W	
	気温	(4°) 6.00 5° 12.00 6° 18.00	-6° (16.00) W/W	
	新雪量	0	0	
	備考	9人泊り	地吹雪→快晴 W/W	地吹雪 W/W
26日	天候	快晴		
	気温	((6.9°) 4.00 → 5.5° 12.00 → (6°) 18.00		
	新雪量	0		
	備考			
27日	天候	晴	快晴→曇→快晴 N/W	快晴→曇→快晴 N/W
	気温	(4°) 6.00 → 5° 12.00 → 4.5° 18.00		-3° (12.00) → -8° (16.00)
	新雪量	0		0
	備考	?人泊り		
28日	天候	快晴		快晴 終日雪降
	気温	5° (12.00) (1°) (16.00) (8°) (20.00)		-2° (12.00) -1° (16.00) 6° (20.00) → -15° (18.00)
	新雪量	0		0
	備考	7人		ブロッケ氷解け

29日	天候		快晴	無風	快晴	風 302
	気温	快晴		-5° (12.00)	-14° (2.00)	-24° (12.00)
	新雪量	(5.5°) 1.00 → (8.0°) 2.00	0		0	
30日	天候	小雨	曇時々雪	風 302		
	気温	-0.5° (2.00) (17°) 2.00 (18°) 1.00	-5° (2.00)	-2° (12.00)	-2° (16.00)	
	新雪量					
31日	天候		地吹雪	NW		
	気温		-5° (2.00)	-6° (2.00)	-16° (14.00)	
	新雪量					
1月1日	天候	雪	地吹雪と雪	WNW		
	気温	4° 2.00 → 2.5° 12.00 → 2.5° 16.00	-16° (8.00)	-14° (20.00)	-17° (12.00)	
	新雪量		120 cm			
2日	天候	雪一時曇	地吹雪と雪	WNW		
	気温	2° 2.00 → 4.0° 12.00 → 3.5° 16.00	-16° (6.00)	-18° (16.00)	-19° (18.00)	
	新雪量		200 cm			
3日	天候	雪 NW 302	地吹雪と雪	WNW		
	気温	-2° 2.00 → 6.5° 12.10 → 6° 16.00	-13° (2.00)	-13° (12.00)	-19° (16.00)	
	新雪量		250 cm			
4日	天候	雪 NW 302	地吹雪	NW		
	気温		-16° (2.00)	-13° (10.00)		
	新雪量		300 cm			
5日	天候					
	気温					
	新雪量					

※ 梅ノ木寮の温度の中、括弧の温度はストーブの燃えているとき。

気象記録 (その3) (気温測定)



春山合宿報告

日本海より五龍徑へ

横尾 秀次郎

一九六一年に於る一連の遭難事故、しかも、その一人の友を失つた悲しむべき、苦しい時期を経験し、一つの大きな転期を我々は経験してきた。そして梶本リターの時期は、部の再建の第一歩であり、まず事故を起さないことを主眼に地味で着実な運営が行われた。そして我々の時代にはそれを如何に発展させるか、新しい方向へ向けるか、と云う大きな課題があつた。しかし、沈滞の気分は相変らずぬけ切らず、春山計画も長く決らぬままであつた。只、去年の春山での白馬岳以北の稜線ないし白馬周辺、朝日岳東面等の地域の広いおらかな地形に心引かれた。又、阪大山の家が去年の夏山の前半をボツカに費やしたかいあつて梅池に完成し、文句なしに冬山合宿は梅池の調査を兼ねて白馬周辺と決つた。そこで春山も白馬周辺を更にトレスし、しめくりりたい気持であつた。自分としては、まず高等な技術より、出来る限り広い地域を、雪稜線を確実に歩き得る能力を養ふこと

が先決と考へ、縦走形式を主体とする山行を考へた。そしていくつもの案が出た。八方尾根―唐松―祖母谷―毛勝山、白馬―日本海、宇奈月―突坂山より後立山連峯へ、等々の案が出たが、分散合宿は上級部員の不足の理由から不可能と考へ、一つの縦走パーティーを日本海岸の親不知より白鳥山―朝日岳―白馬岳―五竜岳迄の縦走を行い新人を含むサポーター隊が朝日岳へサポーターすることに決つた。日本海より白馬岳へのトレスは恐らく初めての記録であろうと考へていた。(白馬岳より日本海への縦走の記録はかなりある。)しかし、秋に白鳥山へ偵察に行き、そこで先年春に法政大学が同様の山行を行つてゐることを知り少なからず失望した。しかし蓮華温泉より朝日岳へサポーターを出すこと、二年部員全員を縦走に参加させること、我部として、純粹に縦走形式に依る合宿がはじめてであることこの理由からこの計画を実行に移す事に決つた。たまたま此の冬に愛知大学の葉師岳遭難と云う空前の事件が起り、岳界のみならず世間から、大雪山山岳部のあり方に手痛い批判の聲が起り、マスコミも手伝つて一大センセーションを引起した。今春もし遭難を起す様な事があれば理由の如何に依らず結果は明らかであろう。それに何か重苦しい気分があつた。勿論遭難を起さぬ確信はあつたが――。更にOB監督の関で、

今後春、冬の合宿にはOBが監督として参加し、リーダーグループを補佐する事を決した。日本の冬山の様に、気象雪質の変化の激しい条件で、大学三年間で十分な知識が得られるとも思えず、年功者の参加により、適切な助言が得られ、危険も未然に防ぎ得る、と考へ、OBの参加が決つた。只、これを制度化した場合、年により長期の合宿に参加出来るOBの居ない場合もある。又、リーダーとOBとの間に妙な譲り合う気持があるとかえつて危険でさえある場合もある。要は、平素OBとの意見の疏通を盛んにし、極く自然な形でOBと現役とが共に部を運営して行ける雰囲気を作ることにあると思う。そうすると、現役の一人よがりもなくなるだろうし、現役の溢れる意気も理解してもらえよう。

さて、今度の計画での問題点は、1. サポート隊と縦走隊が朝日岳でいかにかうまく出会うか、2. サポート隊を、梅池―天狗原―蓮華温泉―朝日岳と云う長いルートを用いること、3. 不帰の通過、4. 連絡方法の4点である。

1. については、サポート隊が早く着いた時は、そのまま三月末迄待機、縦走隊の場合は、三月二十五日迄朝日岳で待ち、蓮華温泉へ下り待機することに決めた。しかし、実際には、待機の必要はなかつたが、サポート隊の最終キャンプが長梅山にあつた為、縦走隊があやうく看過す

所であつた。あの広大な地域での出会いは難しいことではあるが、出発前の最終的な打合せに徹底を欠いた為か、両隊のリーダーの言にくい違いがあつたのは心残りである。2. については、勿論、確実を期す意味から、梅池より白馬岳へサポートすべきであつたらうが、冬と全く同一のコースであり、変化に乏しいこと、一方蓮華温泉へ下り朝日岳へのコースは、殆んど人も入らないコースで、しかも変化に富んでいて、スキー使用も可能と考へ、日数に余裕を取つて、このコースを選んだ。結果的にはスキー使用の必要はなかつたか、一年部員には、苦しく楽しい山行であつたと思へる。不帰の通過については、最近の記録では殆んど問題なく通過しているが、関学ルートの最もあり望と思われた。しかし、異例の好天で、雪が少く、ほぼ夏道通しに殆んど不安なく通過出来た。4. の連絡方法として、トランシーバーを使用したか、思う時に発信出来ず、全面的に信頼出来る迄にはなつていないと思われ。

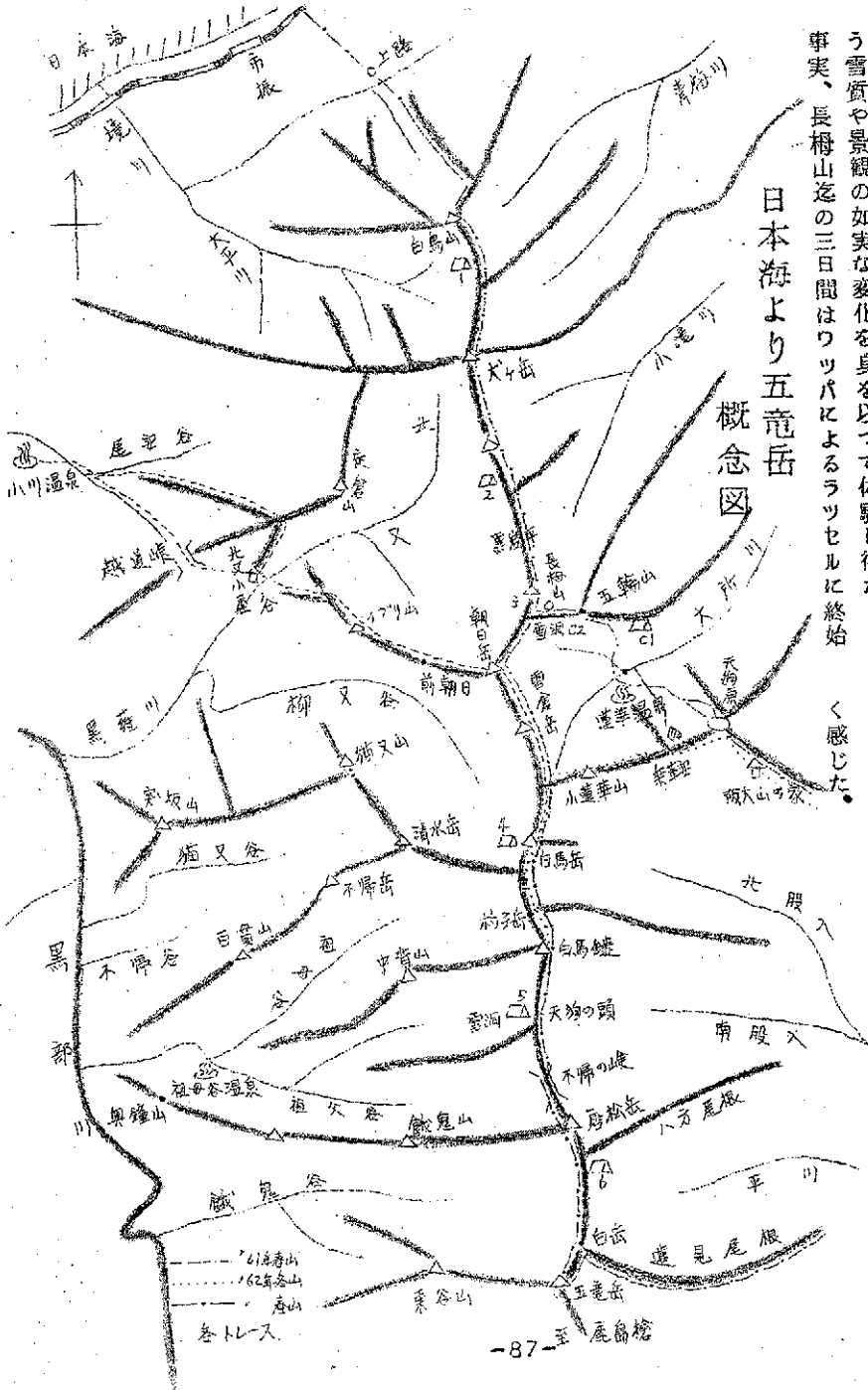
計画は、異例の好天が幸いし、思つた程の困難もなく予定より一週間も早く無事終了し得た。しかし、連絡の悪さが随所に見られるのは心残りであり、精密な計画を更に心掛けることが大切である。

海拔〇米より出発し、徐々に高度を上げ、三〇〇〇米

に迫る後立山連峯を踏破したが、特に、高度の変化に伴う雪質や景観の如美な変化を身を以つて体験し得た。事実、長梅山迄の三日間はワツパによるラツセルに終始

日本海より五竜岳

概念図



した。二五〇〇米迄と、それ以上とは雪質は更に極端に変化した。この点、地形の構造の変化と共に特に興味深く感じた。

行 動 予 定 表

	沓 掛	梅 木 寮	天 狗 原	櫻 葉 温 泉 B.H.H	五 輪 湯 根 C.	朝 日 岳 C.	黒 岩 平	犬 ヶ 岳	白 鳥 山	親 不 知
3/11		→ 3								
12			→ 3							
13	← 11			→ 3						
14	→ 11 → 1			← 3						
15		→ 4 → 4 → 4	→ 4							
16			→ 12	→ 3						← 5
17										
18			→ 5	→ 3	→ 3					
19			→ 5	→ 3	→ 3					← 5
20					→ 12	→ 3				
21					→ 12	→ 3			← 5	
22		→ 1				→ 4				
23						→ 9		← 5		
						→ 4				
24			→ 4			→ 4				
25			→ 1			→ 4	→ 5			
						→ 4	(2名×12分×1名)			
26	← 4			→ 7	→ 7			→ 5		→ 5
27					← 4					
28			← 12					→ 5		
29										
30		→ 5	→ 7					→ 3		
31		→ 5	→ 7					→ 3		
4/1								→ 3		
2										
3			→ 12	→ 12				→ 5		
4										
5	← 12									
6									→ 6	

行 動 表

	沓掛	梅ノ木 御殿場	天狗原	蓮華温泉	五輪尾根 C I	長梅山 C II	黒岩山	犬ヶ岳	白鳥路
3 /13		高田以下10名 高田以下10名							
		大川、笠松、牧野							
14	豊坂	高田以下10名 高田以下10名	田井、玉井、笠松						
15			高田、田井、玉井、牧野						
			大川以下7名						
			茶田、山本						
16			大川、田井、玉井、岡久原					横尾、桑原、山本、深田、田下	
			高田以下5名						
17			高田以下7名						
			大川、岡久原	田井、玉井					
18				大川、笠松、原					5
			1	高田以下2名					
		田井、玉井							
19				高田以下7名	大川、笠松				5
20					笠松、牧野、置坂				5
					高田以下6名				

21			停滞			朝日岳 管倉岳 申高岳	木島岳	五竜岳
						高田以下6名		
22						高田以下6名 橫尾、栗原、秋葉 笠松、吉川、秋葉	吹野、豐坂、田村	
23							5	
						高田以下10名		
24						高田以下7名		
			笠松				停滞	
25							停滞	
26						高田以下6名 放深、中村、吉川、原 小蓮華	5	
27						高田以下5名 吉川、高田以下3名		遠見尾根
28						高田以下9名		

縦走隊行動記録

桑原 昭夫

メンバー 横尾(〇)、桑原、田村(〇)、吉川(前半)、秋濃(前半)、牧野(後半)、豊坂(後半)

三月十五日、昨日からの風邪で頭がどうもすつきりしない。田村(〇)のお父さんに覗てもらおう。「「行くな」と言つても行くのだから行つて良い」と言われ、大急ぎで個人装備をまとめ、ルームに行く。ルームにはサポート隊の内張らしきものを見つけ、彼等に届ける事を考える。夜八時十分の汽車に乗り込む。篠田先生初め(〇)の方々の見送りを受け大阪駅ではてんやわんや。汽車が動き出しザツクを数えると、どうも少ない。まずは失敗の巻である。この時、広瀬(〇)や榎本(〇)には大変迷惑をかけた。京都駅で田村(〇)はザツクをさがしに大阪駅に、とに角大変な出発だった。これからの山行きでは事故のない様注意しなくては、と横尾と話し合う。

三月十六日 五時五十分 市振着、九時四十五分 十一時五十分 上路役場着、気も重く、何か不安な我々の気持が、しとしと降る雨の中の田舎の駅での我々の様子とよく調和してかえつて心には安らぎを感じた。

九時過ぎ田村(〇)が遅れて着く、秋濃はサポート隊の忘れたテントの内張を千國の猪股氏宅へ届け、彼はあとから上路の役場に来る事とする。両がわに家を見、人を見ながら北海の漁村を通りぬける。

去年の秋、偵察に来た時、遊んでいた小さな子供に「どろぼうだ」と言われた事が僕の心に浮んで来る。

彼等には大きな荷を負い、きたならしい姿をした者は泥棒としか映らないのだろう。日本海が黒々と広く、実に雄大だ。雨が冷たく背中をはう。上路口から一本杉を経て上路それから五竜へ向うのだ。足下を日本海の波が洗つて白く輝いている。雨がなおも背中を這う。

一本杉からは実に雄大に、美しく白鳥山が見える。冷たい雨の中で親鳥が羽を上げ、ひなをあたためている様に見える。こゝから日本海ともお別れだ。上路の役場で茶を飲み、今日はこゝで宿ることにする。横尾、桑原、田村の三人で偵察に出る。結局松谷右岸の尾根が適当と思われたので昨年の偵察通りとする、この尾根筋に沿つて高度七百米位迄登り、一日で十分白鳥山を越す確信を得て役場に引き返す。

秋濃も千國から帰つて来てやつと縦走のメンバーもそろ

う。
三月十七日(雨)停滯、出発しかけると雨が本降り

なつたので、役場にもう一日お世話になる。僕は歯が痛み涙をぼろぼろ出し、信さんの名アノマに世話になる。田村OBも風邪気味、役場の上原さんと上路の観光開発の可能性について話している。僕はそれどころではない。頭をかゝえ、歯をおさえて寝ていた。「近くの町に土砂くずれがあつた様だ。村の人も心配そうだ」夕方より晴れて来た。明日は出発出来るぞ。

三月十八日 快晴 上路役場出発(三・五〇)―白鳥山(9・50・10)ピーク $\frac{2}{3}$ テント地(15・25)今日の快晴にかせごうと朝へツドランプに導かれながら出発、昨日のトレースをたどり、後は尾根らしきところをよつて坂峠への稜線へ出る。実にすばらしい。はるか犬ヶ岳を越えて、五輪山、朝日岳が眺められる。あの山の向うに僕らの仲間がいるのだ。去年の春、朝日岳を眺めたのと方向こそちがうが、いつもながら実に立派だ。しかし又こゝからは実に遠く見える。ふり返ると春霞の下に日本海がにおく光っている。白鳥山の頂上は真丸の雪面で鳥の頭の様で印象的だ、白鳥山より犬ヶ岳への稜線は小さな上り下りが激しく、雪もくさつており、歩きづらい事、消耗する事、甚しい。特に千二百九米峰より下りが急である。そこから約二百米の登りで小ピークに出る。白鳥山と犬ヶ岳の約三分の二の地点である。(我々はこ

れにP $\frac{2}{3}$ と名づけたのだが)こゝにテントを張る。

三月十九日 快晴 出発(5・50)―犬ヶ岳(9・00
19・30)―黒岩山手前へ

こゝまではまったくワツパのみであつたが、犬ヶ岳への登りは、雪の下が岩であるので、アイゼンワツパで登る。今にもずり落ちそうな雪の傾斜を木をつかみながら上へ上へと犬ヶ岳の登り、これは今思い出しても「しんどかつた」事しか思い出せない。犬ヶ岳からの眺めは実に陰けんだ。黒岩平犬ヶ岳から一本の帯、いや帯ならまだしもチクザクにまがつた一本の線となつてつながつている。白鳥山と反対に犬ヶ岳頂上は狭く、ザツクを降すのも気をくばらねばならない。一瞬「パサ」と言う音がして何かど落ちて行つた。記録係の大川がくれた記録ノートがみるみる見えなくなつて行つた。大きな雪庇が信州側に出ている。北又からの吹き上げがさぞ強いのだろう。犬ヶ岳からの狭く細い稜線は一寸気味悪い。今までの記録ではこのあたりは、ワツシユでいやな所の様に書いてあつたが、今年は例年になく厚雪だつた為か、うまいぐあいに雪庇が出て、その上を恐る恐る通る事が出来た。黒岩平のあたりにテントを張る。その頃から北又の吹き上げははげしくなり、プロツクを作る。二千米との上と下、かくも風あたりがちがうのかとおどろく。ヘルマン

ナールの八千米の上と下、それも同じ事なのかな。

僕の山日記に犬ヶ岳を「こましやくくれた子供」と書いて
いる。まさしく犬ヶ岳周辺はそんな感じのする山だ。

三月二十日 快晴 黒岩平テント (am 6・00) — 黒岩
山 (am 11・10) — 長梅山雪洞 (pm 2・15)

実に美しいながめだ。朝日岳が雄然としてすばらしい。

午前中は暑さと、しまりの悪い雪になやまされながら高
度をかせき、黒岩山を過ぎて、すこしの所で涼しい風が
吹き、雪質もかたくなる。長梅山手前で、真新しいトレ
ースを見つけ、どこのパーティだろう。ひよつとしたら
偵察隊位のトレースか、などと話し合う。実の所、まさ
かサポート隊がすでに僕らを待っているとは思わなかつ
た。長梅山と朝日のコルへ下りかける頃ラストの横尾が
後の方を向いて呼んでいる。遠くに真黒い顔をして真白
い歯を出して牧野の笑顔が見える。まだ数日しか過たな
いのになつかしい。でもそれにしてもサポート隊は実に
良く頑張ってくれたのだ。信州側の雪の吹き通しの所へ
立派な雪洞が掘つてあつた。黒い顔をした、笠松OB、豊
坂が出て来た。変な出会い方だつたが、僕らの合宿の間
題点だつた、サポート隊と縦走隊のデイトは無事終つた。
横尾の足が調子が悪いので明日は停滞だ。サポート隊、
縦走隊とも合宿前半の色々な話に花がさいて楽しい夜だ

つた。それにしても予想以上のサポート隊の活躍にはお
どろき、又感謝した。高田もさぞつかれたらう。大川
のひげはそろそろ変色しだしたらうなどといろいろ考
えなかなか眠られなかつた。だが合宿はまざまざこれか
らだ。

三月二十一日 快晴 停滞

今日のはんびり公休日、ひねもすのたりのたりかな、ま
さしく春だ。

三月二十二日 快晴 長梅山雪洞 (am 6・00)

朝日岳—雪倉 (am 11・00) — 三國境 (pm 4・10) — 白馬
岳テント (pm 5・10) いよいよ後半の縦走だ。今まで一
緒だつた吉川、秋濃ともお別れだ。代つて牧野、豊坂が
加わるのだ。雪倉山頂でパッキングをしなをし、いよいよ
5人で行かねばならないのだ。ツシンと重いザックを
かつぎ今さらながらうんざりする。丁度その時、サポー
ト隊の高田始め全員で朝日へ来たのを、トラংশーパー
で連絡が取れた。こちらも次々代り、話した。殿下始め
新人も元氣そうだ。田村OBはトラংশーパーが始めてら
しく、気まり悪るそうによそ行きの言葉でしゃべつてい
る。山行きもモダン化されているのだ。鉢ヶ岳とのコル
の小屋で昼食、無風快晴の中を暑さにあえぎ登つた。

白馬の最後の登りはまったく死にもぐるいで歩いた。後から来た北大山岳部の連中が腰にスキーをつけ、サプでおいこして行く。実にしんどい一日だった。

三月二十三日 快晴 白馬岳テントへ (am 7・00)

越ヶ岳 (am 10・00) 天狗小屋―天狗の頭雪洞

風も少し出て来てやはり高度を感じる。杓子沢上部で北大山岳部がスキーを楽しんでるのをうらめしそうに眺つ、時々吹いて来る風に重い荷の為か千鳥足になる。昨日かせいだ為、又、不帰I峯下のテント地があてにならない為、天狗の頭にドン、と言う前もつての約束があるので、今日は昼食もゆつくり天狗の小屋で食う。うまそうな物もなきそうだ、どこも不景気だ。タバコも切れて来た。小屋で「しげもく」捨い。雪洞を天狗の頭の南西面に掘るが雪は少なく、掘り過ぎると地面に出くわす。テントが有るのでテントを張れば良いのだが、早く着いたし、雪洞の方が徹収が簡単なのと風が吹いても僕らのテントよりあてになりそうだからだ。変な雲も出だしている。長い間持った晴天もぼつぼつ終りだ。

三月二十四日 地吹雪 停滞

三月二十五日 地吹雪 夕刻より少し明るくなる。

停滞

帰りしな猪股氏宅で新聞で読んだのだがなんと日光で70

m位の強風だったとか。何と僕らの貧弱な雪洞は風で入口がけずられ朝起きた時は入口近くに寝てた僕と豊坂のシユラフの上に雪が積っていた。一日中雪洞拡張工事で忙がしかつた。スコツラが折れ、ピツケルと、コツフエルでの工事は広島弁で言うなら実に「ヤネコイ」事だった。

三月二十六日 快晴 天狗の頭 (am 6・30) I峯とII峯のゴル (am 9・00) II峯北峯 (pm 0時) I唐松―大黒岳手前のゴル (pm 4・30) 実の所、この日の行動は問題があつた。前もつての約束では、天狗の頭より一日偵察の日を考えていた。出発前に家田OBに相談した時も合宿前に不帰II峯は一度見ておき、それから合宿に入つてはと言う意見を出され、考えたが、メンパトと時間とが不足し実現されなかつた。この様な事情の許に偵察もなく、一日で通過するのは問題だが、我々は雪洞に今までの余りの食料全部をおき、II峯が困難な様なら又天狗の頭の雪洞に帰りじつくり出なおす事を決め、出発した。昨日までの悪天はどこへやら、遠く勿岳、薬師岳いや北アの全山がみえる。

不帰I峯までは別に大した事もなくI、II峯のゴルにくく。こゝは信大始め数パーテイでどつたがえしていた。

信州側の夏道とはほとんど同じあたりに上手にトリースが

つけてある。こゝではとんどII峯は登攀可能な事がわかつたので、資料を調べてる時よく出て来た、関学ルート
を横尾と僕で見に行つた。十一月偵察の時良くわからなかつた二本の目印である松の木も雪からよきり出ているのですぐわかる。しかしそこまで行くトラパスもありま
り歩き良くない。あんな急な斜面を25m以上もありそ
うなザツクをかついで歩くなんて考えたつて、うんざり
する。やはり関学ルートにサブ位なら雪の条件だけあや
まらねば(僕等の通過したすぐ後日表層雪崩が起きてた
そうだ)大じようぶだが、しかし又信州側も鶏卵状に雪
が木の上のつていいる。僕らは他人のトレース通しに行
つたのだから問題なかつたが、始めにトレースをつけた
人は大変だつたろう。

我々はいつも心配していた不帰II峯の北峯でゆつくり昼
食を食つた。登る途中で出合つた人にタバコを六本もら
い五人の内タバコをすう者三人で分けいかにも大切なも
のゝように味つた。唐松までは夏道通しを難なく行つた。
唐松から大黒へは夏道も二つに分れてる所だが下の方は
雪がべつとりつき上の方を僕はルートとして選んだ。
雪と岩がミックスしてゝ、思いがけない悪場だつた。

幸運な事に今日は一日中無風で助かつたのだが、時々
「風が吹けばいやだらうな」と思われる様な所もあつた。

三月二十七日 快晴 風強し

テント地(am 6・30)―五竜小屋―五竜岳(am 8・15) & 8・
25)―五竜小屋(am 9・00)―神城スキー場(pm 1・00)
―南小谷谷掛猪股氏宅(pm 5・00)

時々風に足をうばわれながら白岳へ。五竜小屋附近は多
くの人でごつたがえしていた。どいつもこいつもきたな
い顔したオチエンばかり、メチ公には出合わない。五
竜へ!僕ら合宿の最後の登りだ。時々風で足を止めなが
ら頂上へ。八峰キレットがみごとに切れている。記念写
真を取り下山だ。山に行くのが楽しみでそれでいて下山
の時の楽しさはその最高のものだ。山へは下りる為に登つ
ているのか?と自問したくなる。遠見尾根に入ると風は
全く感じない。暑さのみだ。時々ふり返り鹿島槍の北壁、
五竜の東壁を見上げる。実に美しい。僕らの先輩がそこ
の美しさに引かれ足跡を残している。頭には下山の喜び
と同時に次の山行の計画がねられる。10時トランシーバ
ーをいじつていいると岡久の音が聞えた。全くかすかに。
彼等も元氣らしい。11時にも一度連絡に成功、高田の元
氣そうな声、彼も僕らの無事喜んでくれ、以外に早い
とにおどろいてる様子だ。明日、猪股氏宅で落ち合う事
にする。これでサポート隊とも連絡は取れた。あとは猪
股氏宅へ神城から汽車で千国へ、千国から皆へとへとに

なつて沓掛へ。飯がたらふく食える。なんと五人で二升の米をたいらげた。こたつに入り、知らぬまに寝てしまふ。

サボート

「梅池、遼寧温泉より朝日岳」

〔期間〕三月九日～二十八日

〔メンバー〕

三年 L 高田、大川、山本（先発）

二年（前半）牧野、豊坂
（後半）吉川、秋濃

一年 原、畑中、大笹、中村、岡久

四年 浜田（先発）

OB 笠松、田井、玉井

〔行動概要〕

三月八日 先発の浜田、山本出発

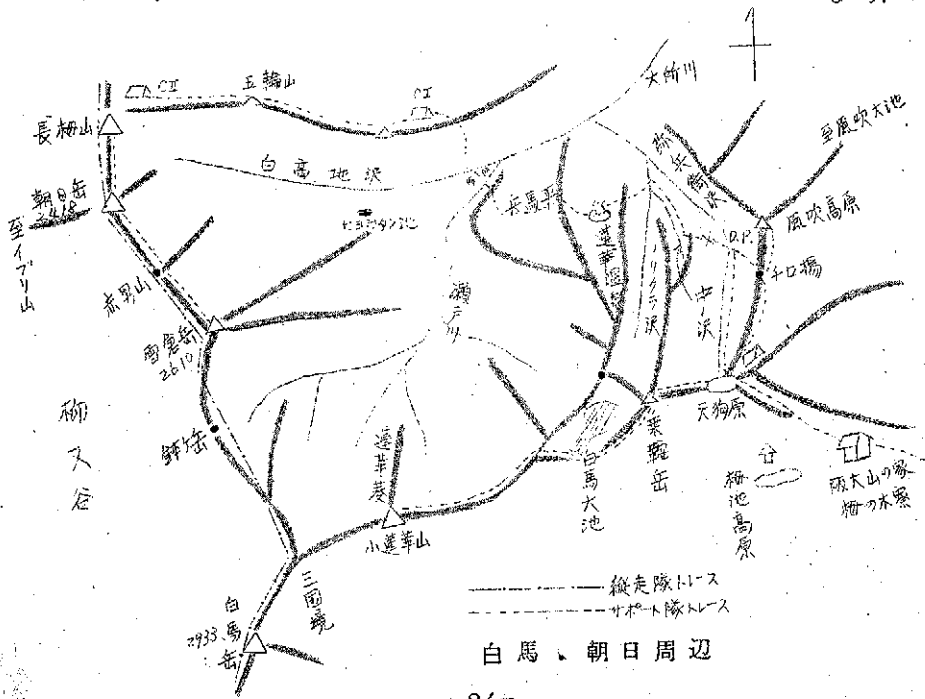
三月九日（曇） 先発の二名、阪大山の家に入る。

三月十日（曇）

スキー

三月十一日（曇）

三月十二日（晴後曇、大阪は雨）



先發隊は山の家より天狗原、赤兵衛沢を経由して連華温泉に向うも、下りすぎて乗鞍沢下部にてピバーク。

本隊の十名は夜大阪發。数日遅れて出發する縦走隊の見送りをうけ、例によつてあわただしい出發。富山に帰る秋濃も同行。

三月十三日（高曇り夜半より冷込み）

大糸線千口崎下車、急いで荷物を下したところ、車中に忘れられたしく罐三口が行方不明。運よく森上行の列車だったので、すぐに電話で連絡し、列車が折り返してくる時に回収し喜なきを得た。荷が多いため、一部（約80K）を駅に残し、各自40Kをかついで沓掛へ。

正午すぎ笠松OB到着。

午後は、三名が千国崎に残した荷をとりに、残りの八名は御殿場小屋までデボに往復。

千口崎10・25 | 沓掛、猪股宅11・30

（大川以下三名）沓掛13・40 | 千口崎14・30 | 15・00 | 沓掛17・00

（高田以下八名）沓掛13・50 | 御殿場小屋16・50 | 17・10 | 沓掛18・15

三月十四日（快晴）全員で梅の木寮入り。全くの快晴で、早朝はまだよかつたが、陽が昇るにつれて強くなる日ざしに、汗だくの行進であつた。御殿場小屋より上部

は、冬よりはるかに増した積雪量のおかげで、すばらしい展望を一分に満喫した。

午後は三名を天狗原偵察に、残りは御殿場のデボを取りに行く。両パーティーとも練習のためにスキーをつけてゆく。午後、豊坂が単身到着。ワングルの七名も加わつて非常ににぎやかになつた。今日の快晴でみんなの顔は早くも真黒になり、これからが悪いやられる。

夜、装備係の牧野がテントの内張りを忘れてきた事に気づき、驚ろかされた。重大なミスであるが、今さら仕方なく、なしでもすませれる事にする。

沓掛6・30 | 梅の木寮11・10

（天狗原へ）田井、笠松、玉井

梅の木寮13・10 | 天狗原14・45 | 梅の木寮16・00
（御殿場小屋へ）梅の木寮13・20 | 御殿場小屋13・50 | 14・20 | 梅の木寮15・30

三月十五日（晴後曇り）

二隊に分け、一隊はまず天狗原に設営し、その後風吹尾根の偵察とデボ、残りは往復ボツカの後天狗原に入る。

両隊そろつて出發、雪はよくしまつており、スキーは使用せず。快調なペースではかどり祠の前から更に、風吹尾根に向つて少し下り弥兵衛沢の源頭に設営。設営後、大川隊は梅の木寮に引き返し、高田隊は風吹高原まで往

復し千口場にてテボ、田井、玉井はさらに千口場より弥兵衛沢への下降ルートを探察。

テボから帰ると、大川隊は早くも到着しており、先発の浜田、山本も蓮華温泉より帰つてきていた。先発の二人はやがて下山したが、連絡の悪かつたためか、彼らは天狗原から直接弥兵衛沢に下るルートをとつており、今日の偵察からも、結果的にはこのルートのほうがよい事がわかつた。そこで今後このルートを取る場合、千口場のテボの回収が問題となつた。

・偵察、テボ隊 高田、牧野、田井、玉井、梅の木寮
6・30 | 天狗原テント地 9・00 | 10・30 | 千口場 11・40
| 12・00 | 風吹高原 13・00 | 天狗原 14・30

・往復ポツカ隊 大川以下八名

天狗原 10・30 | 梅の木寮 11・15 | 12・00 | 天狗原 14・15

三月十六日 (雪後曇り)

朝から湿つた雪が降り、風も強かつたが、高度が低くなるので行動に差支えるほどではない。テボを回収するため、まず、千口場、弥兵衛沢を経由して蓮華温泉に入るパーティーを送り、続いて残りの五名は、先発ルートにより途中にてテボをすべく出発。

千口場より弥兵衛沢へは沢を使つたが、兩岸の切り立つた沢で側面からの雪崩も予想されたが無事通過。ルート

が弥兵衛沢本流を離れる所に荷の一部をテボする。そして中の沢に入つたが、この沢もかなり兩岸の傾斜が強くてところどころ小さなテボリが出ていたので、休憩所を探すのに苦労した。

蓮華温泉到着後、四名はテボ地点にもどり、一部を回収する。

一方、先発ルートをとつたパーティーは前記のテボを発見し、同じく約100Kをテボして引き返す。弥兵衛沢は、地形が複雑であるがスキーツァー用の標識が無数にあり、大体迷う心配はないが、上部は標識間が長いのでガスが濃い時には慎重を要する。

テボを終えて引き返す頃には、全くの湿雪のため上衣はびしょめれになり、帰りついたテントも内張りがないため、しきりに水がたれるというみじきであつた。

・蓮華入りパーティー 大川、岡久、原、田井、玉井

出発 7・00 | 千口場 7・50 | 8・20 | テボ地 9・40 | 10

・00 | 蓮華温泉 11・30

・テボ隊 高田、牧野、豊坂、畑中、笠松

出発 7・40 | テボ地 10・15 | 50 | テント 13・30

三月十七日 (雪後晴)

蓮華温泉先着のメンバーの内、玉井、田井は前方の偵察に行くが、ガスで視界が利かず、瀬戸川まで引き返す。

大川、原、岡久は昨日のテポ地を往復して、残りの荷を回収。天狗原に残った七名は、悪天なるもテントを撤収。新雪が相当つもつていたので、弥兵衛沢へ直降するのを避け、風吹尾根をまくようにして降り、傾斜の落ちた所で沢身に入る。沢の上部では正面から吹きつける強風に悩まされたが、下るにつれて風も弱まり、テポ地点に着く頃より晴れ間も見えてきた。

テポ地点に荷が残っていないのを見てホッと安心し、大川達の健闘に感謝しながらトレースを辿り、やがて蓮華温泉に着く。

温泉の建物はすつぽりと雪をかぶり、赤いトンガリ帽子の屋根がのぞいているだけ、そして、中で火を炊くとけむい事おびたしい。しかし、昨日の水のたれるテントの事を思うと、はるかにましである。

出発 7・10 | テポ地 9・15 | 45 | 蓮華温泉 11・40

三月十八日 (快晴)

いよいよCI建設に向かう。依然としてポツカ量は多く平均25K、ワツパをつけて出発。

昨日の偵察のトレースをたどつた為、ラツセルもなく、二ピツチで瀬戸川降り口に達する。ここで玉井、田井は引き返し下山する。

眼下の流れまでは、高度差約200m、20 | 30度の急斜面で、

なるべくまっすぐに慎重に下る。流れはうまつていないが、スノーブリツチが所々にかかつていて簡単に渡る。

瀬戸川を越してからは、先発隊の標識もないが、格別複雑な地形でもないので、適当にルートを選びながら行く。まず、~~図~~池の記号の二つある所を通つて白高地沢へ。これは流れも完全に雪に埋もれており問題なく通過。

白高地沢をすぎると五輪尾根までは大した高度差でもなく、尾根にとび出る手前の斜面を除いては概してゆるやかな登り。尾根に出て一ピツチ半で具合のよい台地がみつかったので、ここをCIとし、さつそく設営。

大川、原、笠松を残し、六名は蓮華温泉にもどる。

田井、玉井は夜、杏掛に到着。

蓮華 6・40 | 瀬戸川降り口 8・00 | 昼食 (白高地沢) 9・15 | 45 | 五輪尾根末端テント地 11・45 | 12・30 | 蓮華 14・50

三月十九日 (快晴)

CIの大川、笠松は偵察のために朝日に向う。強風に悩まされながら五輪尾根を登りつめ、夏道はブツシユが隠れていないので朝日へのトラバースルートはあきらめて、五輪山經由国境稜線に出る。そして長梅山の山腹に雪洞には丁度よい地形を発見し、引き返す。

蓮華に残った七名は、温泉をあとにCIに向かう。

うまい具合に昨日のトレースが固く凍りついて、30Rを越える荷だが快調なペースではかどり、三時間半でCIIに着く。これで全員がCIIに集結したわけだ。

午後になると、高度が低いため、テントの中にはとてもおれないくらい暑くなる。

● CI 5・00―五輪山9・30―長梅山一帯10・30―13・00
I CI 16・00

● 運華 7・35―CI 11・00

三月二十日 (快晴)

CIIに入る牧野、豊坂、笠松を六名でサポートする。背中を痛めた畑中はテントキーパー。雪はよくしまつていてので今日もツツパ、スキーなどはつけず、所々くるぶしまでもぐるが大した事はない。好天ではあるが、尾根筋にでると風は相当強く冷たい。CIIとのトランシーバーの交信は、一回目が成功しただけであとは不成功。

五輪山頂上にてアイゼンをつける。この頂上からは大ヶ岳が正面に望まれ、黒岩平には、はつきりとトレースとわかるものが見えた。縦走隊がもうやつてきたのに違いないと再会の期待に胸をおどらせる。

五輪山より約30分、稜線直下の長梅山の山腹の凹み―昨日の偵察で発見したものを雪洞地点とした。さつそく雪洞掘りにかかるとともに、大川、笠松は縦走隊が雪洞

をすぐに発見できるように長梅山から朝日とのコルにかけ、赤旗を立てめぐらす。

サポートの六名は朝日往復を考えていたが、時間的に無理なので今日はあきらめて引き返す。ところが、それからしばらくして縦走隊の五名が到着。CIIに引き返した六名がくさつた雪に足をとられながら、ラツラツと言つていた頃であつた。

CI 5・40―CI 9・50―13・15―CI 15・30

14・00ごろ縦走隊CIIに到着

三月二十一日 (快晴なるも停滞)

好天だが風が強いのと、入山以来の連日のボツカで全員が相当疲れている為、CIIからの撤収待ちとする。午後になつて風は弱まつたがCIIから降りてくる気配はなく、結局、停滞となつた。縦走隊は昨日CIIに到着しているはずだから今日はどうしたのだろうかと少し不安にもなつたが、計画が順調に進んでいるので今日は休養にしたのだろうかと推測した。

三月二十二日 (晴)

CIIの六名は連絡の為にCIIへ。風は相変わらず強いが南よりの風のためか、さして冷たくはない。CIIに着くと雪洞はかうで、縦走隊は本日出発、三名は雪倉までサポートとの連絡が残つていた。雪洞が倍に広げられており、縦走

隊も雪洞に泊つたらしい。

小憩の後、朝日に向かう。朝日の登りはアイゼンが快適にきき、途中、10羽ほどの雷鳥の群が目を楽しませてくれた。

頂上でゆつくりと展望を楽しみながら食事をとり、11・00縦走隊とトランシーバーで交信する。出発以来初めて聞く縦走隊のメンバーの声がなつかしく、30分近く交信する。

雷洞に帰り全員サブザツクに入るだけ食料、装備をつめて帰る。雪倉までサポートした笠松、吉川、秋濃は、夕刻CI帰着。夜は北半の縦走を終えた二人を迎えて、にぎやかに話はずんだ。

CI 6・15 | CI 8・50 | 9・30 | 朝日岳

頂上 10・15 | 11・20 | CI 11・50 | 12・15 | CI 14・00

三月二十三日 (晴)

CIを撤収。相も変らず快晴とあつて気持のよい撤収だ。

落ちてはいまいかと心配された瀬戸川のスノーブリッジも、どうやらまだ無事であつたので一安心。蓮華温泉までとあつてのんびりと雪景色を楽しみながら行つたが、眠くなるようなけだるさに襲われて困つた。温泉に着くと、すでに小屋主も入つておられ了度、除雪作業の真最中であつた。

午後は待望の野天風呂に入つて、最高の気分になりながら汗を流す。

CI 7・30 | 蓮華温泉 10・45

三月二十四日 (雪後強風雪)

天狗原へ向うべく、往路と同じく弥兵衛沢経由として、まだ暗い内にランプをつけて出発。ライトの灯りの中に雪がちらちらと舞つている。笠松OBは今日中に下山すべく単身先行する。中の沢に入る頃より夜が明けはじめる。依然として降りやまない雪に全身まっ白にして、あきあきとする長い登りを黙々とたどる。最後の急斜面を登り切ると風の強い稜線に出、往路とはちがつて祠の前の冬と同じ場所をならして設営する。

さあテントに入らんとしている時に、急に風が強くなり、以後、間断なくテントをゆさぶる風との闘いがはじまつた。

蓮華 5・00 | 天狗原 11・45

三月二十五日 (地吹雪、停滞)

目をさますと寝袋の上に雪がうすくつもつており、寒々とした感じをそそる。風は依然勢力を弱めず吹き荒れているが、雪は降り止んだようである。テントに当り音をたてるのは地吹雪のせいらしい。ラジオで、この強風の被害を聞き、日光で最大風速75mというのは、全く驚き、

それほどでもないにしても、よくこのテントが大丈夫であつたと感心する。

終日釘付けになつたが、夕刻より風も弱まつてきて、夜には星空が見られた。

三月二十六日 (快晴)

風はまだ少し強かつたが、絶好の晴天。そろそろ食料も底をついてきたので、4名は梅の木寮へ食料をとり、4名は偵察をかねて小蓮華へ。小蓮華に向つた4名は、乗鞍の斜面もアイゼンが快調に利いて、寒風に頼を硬ばらせながらも小蓮華頂上に達する。帰途、乗鞍にかかる頃より風もなく暖たかい陽気となつた。一年生は、今回の合宿で初めてアイゼンを着けたので、無理して白馬までは行かせなかつた。

食料荷上げの4名は、スキー部が入っているはずだが、もし寮が閉つている場合には沓掛まで鍵を取りに行かねばならない事を考えて2名がスキーをもつてゆく。ところが案の定寮には誰も居らず、2名は沓掛へ、2名は連絡の為、天狗原にもどる。午後、再び寮に下つた2名は、下からもどつてきた2名に出会い、3名で天狗原に食料を持つて帰る。1名は、明日入山するものがあるというので寮にとどまる。

。小蓮華往復 高田、大川、畑中、岡久

天狗原7・00 | 昼食9・10 | 40 | 小蓮華9・50 | 10・15 | 天狗原12・00

。荷上げ 吉川、秋濃、中村、原

天狗原7・00 | 梅の木寮7・50

(秋濃、中村)寮8・20 | 沓掛9・50 | 10・50 | 寮13・30 | 14・30原、合流 | 天狗原16・00

(吉川、原)寮10・45 | 天狗原11・30 | 12・10 | 寮12・35吉川、残る。

。テントキーパー 大笹

三月二十七日 (晴)

昨日に続いて小蓮華を往復、風は強いが南よりの風のせいとか、さして冷たくはないのだが、時折おそつてくる強い突風には悩まされた。テントに帰つてみると、縦走隊とのトランシーバー連絡がついたとの事で、早くも遠見尾根を下山中とか。丁度交信時間になつたので、打合わせの結果、こちらもすぐに撤収する事にした。午後になつて風も止み、春の陽光が降り注ぐ絶好の撤収日和になつたが、雪がくさつて時にはももまでもぐるのは閉口した。成城とヒユツテの下で、丁度登つてきた米沢、金子両OBと吉川に出会う。

帰りついた梅の木寮は、いつもながらの快適な気分を迎えてくれ、もう半ば下界に降りたような感じがする。

きつそく、屋根や小屋の周囲の雪かきにはげむ。

天狗原 6・20 | 小蓮華 8・45 | 9・05 | 天狗原 10・50
| 13・00 | 梅の木寮 14・00

三月二十八日 (晴)

合宿の最後の日も晴天で明けた。朝の光に輝やく白馬三山の麗姿は、しばしの別れの今朝とさら美しく感じられる。

荷が多いのでスキーはかえつて面倒とばかり終始つけない事にした。御殿場小屋、赤ヌケとすぎ、清水沢までくると、もう春の気配で、雪の中に音をたてて流れる清水にのどをうるおす。もうひと気のなくなつたスキー場をぬけたところで、迎えに来てくれた縦走隊のメンバーと出会い、出発以来の再会と計画の成功を喜び合う。話しながら道を行くと沓掛はすぐであつた。振り返ると白馬三山が午後の陽光に遠くかすんでいた。昼食には、白い御飯をたらふく食べ、全員で成功を祝い合つた後、現地解散とした。

(高田 記)

装 備 報 告

この合宿の性格上、軽量化ということが第一に考えられねばならなかつた。しかし、長い縦走であるから、ある程度快適な生活を営むことが必要な点、及び経済的な面から、軽量化は二、三についてできたのみであつた。

以下名品目について説明を加えることにする。

テント―縦走用にはテトロンテントを使用した。冬の経験から、他のテントの綿の内張りを流用する積りだったが、*padding* が合わず、結局縦走のものを使用せざるを得なかつた。が幸い天気が良かったのと、悪天候の時はタイミングよく雪洞を掘つたこと等から、大して影響はなかつた。*Support* 用にビニロンテントを二張り携行したが、内張りを忘れた為、甚だ居住性の悪いものになり、それ以後に危惧を抱かせたが、好天に恵まれたこと、部員諸君の協力で格別の事態にも至らなかつた。大いに反省を要することである。ビニロンテントの老朽化は可成り激しく、新しいテントの製造が望まれる。

ペグ―縦走用に長さ 45 cm、幅 3 cm のものをつくり軽量化を図つたが、従来のものより 40 g 位軽くなつただけで、成功とはいえなかつた。幅の 3 cm はこれが限度であり、

(今度の合宿でも二、三本張線をかける凹みが折れた。) 長さも一尺以上なければならぬと思う。従つてこれ以上の軽量化は、軽合金に頼る以外ないのではなからうか。スコップ・シャフト、特にそのつけ根が弱く、縦走用の小型のスコップも、雪洞を掘っている最中に折れてしまった。何らかの補強策を考えねばならない。

Fix ザイル 10mm の麻 70m を使用した。しごきが足らず操作が困難であつた。特にこのような長いザイルは十分にしごいておく必要がある。Fix ザイルをもつと有効に使う手段、例えばゼルブストを使うとか、を考える必要がある。

雪洞 1 地形の選定、プロツクの積み方等充分に考慮してから、ことを行うべきである。長梅山の雪洞は非常に大きな船クボ地形を利用したものであつたが、風向きが變われば、簡単に埋没してしまふ危険性があつた。入口布も、更に改良を加えねばならない。

(牧野 記)

装 備 表

品 名	縦 走 前 半		縦 走 後 半		サ ポ ー ト	
テント(含ポール <small>内張表</small>)	T1	8.0 Kg		Kg	VI-VII-VIII	33 Kg
バ グ	25	2.0			70	6.5
雪 洞 用 バ グ					8	0.8
グ ラ ン ド シ ー ト					2	2.0
鋸	1(大)	0.5			1(大)	0.5
ス コ ッ プ	1(小)	1.2			40(木)	5.5
張 線 予 備	12m	0.6			18m	1.0
タ ワ シ	2	0.1			7	0.4
ツ エ ル ト	1	1.2			2	2.4
ザ イ ル	1(白)	2.5			2(赤・白)	4.5
Fix ザ イ ル			100m	5.0	50m	2.5
カ ラ ビ ナ	5				4	0.4

食 料 報 告

ハーケン			10	0.2		
ハンマー			1	0.4		
竹ザオ(付赤旗)					100	11.0
赤布					50	
ラジウス	1	1.2			4	4.8
コッフエル	1	0.8			4	3.2
オ玉	1				4	
テルモス	2	1.5			4	2.8
ケロシン	7	7.0	9.5ℓ	9.5ℓ	58ℓ	58.0
けい燃	4	0.5	5	0.6	24	3.0
ローソク	10	0.6	13	0.8	60	3.6
ポリタンク	4		(4)		8	
ラジオ(各々予備電池 ¹ set)	1	1.0			2	2.0
トランシーバー(〃)	1	1.0			2	2.0
エヤマット修理具	1				4	
ブラックテープ	1				4	
工具類					1 set	0.7
合 計		30.2 kg		16.5 kg		153.6 kg

春山合宿は縦走形式であるため、軽量化と体積を小さくすることに留意した。また、合宿費も少く、物価も値上りしているもので、今までより相当賢素な献立にせざるを得なかつた。また行動食、停滞食の区別も全くしなかつた。縦走隊は半ばアタック隊のようなものであるとの考えから、サポート隊の献立より少しよいものを用いた。次に今回の食料の個々の点について記す。

一、梱包、重量

サポート隊の梱包はいつもの通り一斗籠を用いた。

縦走隊は軽量化のために段ボールの箱にビニール塗料を塗つたものを用いた。そして一つの箱に五人二日分の食料を入れ、約8kgとした。このような箱は、防水性はほとんど完全であるが、つぶれやすいのが欠点である。サポート隊のポツカした7ヶの内、長梅山の雪洞に到着したときは3ヶしか原形を保っていなかつた。しかし取扱いを注意すれば、もう少し長持ちすると思う。小人数の山行にはもつと使われてもよい。天満で箱をもらつてくれば三〇円くらいで作れる。

サポート隊の食料の軽量化には余り留意しなかつたの

は失敗であつた。しかし冬山よりは軽くなつてゐるはずであるが、山行形式が異つてゐるために重く感ずるのではないかと思う。縦走隊は梱包を入れて一人一日0.8kgとした。段ボールの箱を用いたことが相当軽量化に役立つた。

二、主食について

カンパン、クラツカゝの類にどうも満足すべき市販品がない。山岳部特別謎えのビスケットを作る必要がある。

三、スープ袋について

今までのスープ袋は重いので（一袋四人分が約四百五十g）鯨肉を油炒めたものと切干を用いた。生野菜は全く持つていかなかつた。その代りニンニクをやや多く用いた。

四、献立について

大体今まで通りの形式を踏襲することになつてしまつた。

いつの間にか献立についての一定の形式が出来上つてしまつて、無条件にそれを採用してゐることが割合に多い。しかし合宿のように、長期間で多人数の山行の計画ではどうしても事無かれ主義的に今まで通りの形式をとることになる。我々の献立の形式についてもこのような点で再検討の必要があると今度の合宿を終つて私は感じ

た。特に朝食と昼食についての検討が必要であらう。蛋白質は全部夕食に取ることにし、朝、昼、は炭水化物を主としたカロリーの高くて食べやすいものばかりにすることも考えられる。

五、費用について

二十六日間の合宿費が四千円であり、そこから装備の費用を除くと食料費はますます少くなり、財政は相当苦しかつた。

= 春山 =

食 料 総 表 (サポ-ト隊)

	神の田甫	蓮華温泉	C 1	長 梅 山
ク ラ ッ カ ー	20	50	54	12
カ ン パ ン	178	100	50	
ピ ス ケ ッ ト	24	145	40	12
バ タ ー ク ラ ッ カ ー			21	
玉 蘭 ソ パ	46	38	9	2
ピ ー フ ン	20	42	15	
モ チ		8.1 kg	6.4 kg	2.4 kg
コ ン ソ メ	60 食分	100 食分	30 食分	8 食分
チ ャ ー ハ ン の 素	60 食分	100 食分	30 食分	8 食分
ミ ソ	4 袋	2 袋	1 袋	8 食分
カ レ ー	38 食分	60 食分	32 食分	16 食分
ハ ム	14	19	7	4
ソ ー セ ー ジ	20	23	9	
カ ン ツ メ	62	38	9	
鯨 肉		22 袋	13 袋	7 袋
ラ ー ド	5 kg	6 kg	2.1 kg	4.6 kg
ジ ャ ム	28	33	14	3
紅 茶	1	2	1	1
緑 茶	1	2	1	1
ミ ル ク	4	6	3	1
砂 糖	3 kg	5 kg	2 kg	0.5 kg
メ リ ケ ン 粉	8	8	3	1
塩	1 袋	1 袋	適 量	適 量
コ シ ョ ウ	1	1	適 量	適 量
キ リ ボ シ	600 g	3.2 kg	1.3 kg	300 g
ニ ン ニ ク	適 量	適 量	適 量	適 量
計	111 日	149 日	54 日	12 日

食 料 総 表 (縦 走 隊)

クラツカ ー	35本	即 席 カ レ ー	5ヶ
ピ ス ケ ッ ト	155本	ハ ム	10本
カ ン パ ン	35袋	ウ イ ナ ー ソ ー セ ー ジ	70本
玉 ラ ン	42袋	鯨 肉	46袋
ビ ー フ ン	30	ジ ャ ム	23ヶ
マ キ ー ス ー プ	98個	紅 茶	3
チ ャ ー ハ ン の 素	28ヶ	緑 茶	2
ミ ソ	11袋	ミ ル ク	4
(1袋150g)		メ リ ケ ン 粉	6
塩	2袋	ニ ン ニ ク	適 量
コ シ ヨ ウ	1ピン	サ ト ウ	5ヶ
キ リ ボ シ	23袋	計	115日分

【注】 鯨肉はラードで炒めて5食分100gを一袋とした。

献 立 表 (1人1日分)

	サ ポ ー ト	縦 走		
朝 食	クラツカ ー	1本	クラツカ ー	1本
	カ ン パ ン	1袋	ピ ス ケ ッ ト	1本
	ピ ス ケ ッ ト	1本	カ ン パ ン	1袋
	バ タ ー ク ラ ツ カ ー	1袋		
	(一 部)			
	コ ン ソ メ	$\frac{1}{15}$	マ キ ー ス ー プ	$\frac{7}{5}$ 個
	チ ャ ー ハ ン の 素	$\frac{1}{4}$	チ ャ ー ハ ン の 素	$\frac{1}{4}$
	ミ ソ	30g	ミ ソ	30g
	カ ン ツ メ	$\frac{1}{5}$	鯨 肉	$\frac{1}{5}$ 袋
	ラ ー ド	20g	キ リ ボ シ	$\frac{1}{10}$ 袋
鯨 肉	$\frac{1}{5}$ 袋			
キ リ ボ シ	適 量			

昼食	{	クラッカー	1本	{	クラッカー	1本
		カンパン	1袋		カンパン	1袋
		ビスケット	1本		ビスケット	1本
		ハム	$\frac{1}{4}$		ハム	$\frac{1}{4}$
		ソーセージ	$\frac{1}{3}$		ウインナーソーセージ	1
	ジャム	$\frac{1}{4}$		ジャム	$\frac{1}{5}$	
夕食	{	玉蘭ソバ	$\frac{1}{2}$ 袋	{	玉蘭ソバ	$\frac{1}{2}$
		ビーフン	1袋		ビーフン	1
		モチ	6枚			
		コンソメ	$\frac{1}{15}$		マギースープ	$\frac{7}{5}$ ケ
		即席カレー	$\frac{1}{4}$		チャーハンの素	$\frac{1}{4}$ 袋
		チャーハンの素	$\frac{1}{4}$		ミソ	$\frac{1}{5}$ 袋
		ミソ	30g		即席カレー	$\frac{1}{4}$ 箱
		カンツメ	$\frac{1}{5}$		鯨肉	$\frac{1}{5}$ 袋
		ラード	20g		キリボシ	$\frac{1}{10}$ 袋
		鯨肉	$\frac{1}{5}$ 袋			
		キリボシ	適量			

以上の他に、紅茶、緑茶、ミルク、メリケン粉、砂糖1日30g、塩、コシヨウ、ニンニクを用いた。{印はその中の一つを、【】印はその中のものを同時に使うことを示す。

(吉川 記)

気象雑筆

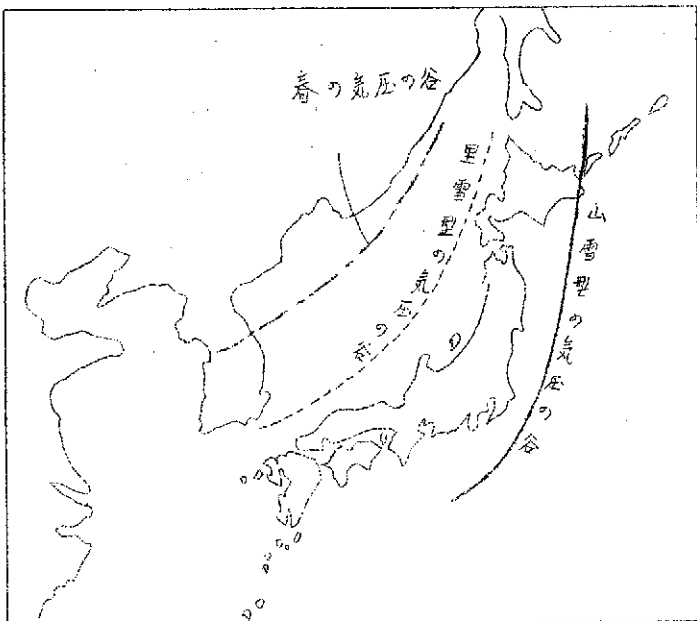
合宿を進める場合、好天に恵まれ、ば予想外にスムーズに計画を運び終えることが度々ある。今年度の春山行動としての大きな特徴は、従来、行動日は三日に一日と組んだのに対し、二日に一日としたことにある。私共としては、始めての企てだけに、統計的にかなり調べて予定したわけである（梶本前リーダーの助言が大きい）。

春山の気象といつても、三月中旬から下旬の四月へかけての気象はかなり異なってくるものと思わねばならぬ。こういつた一般的なことは別に今年の春山は気象的に恵まれた。今年の冬、春の気象の判断についてはあまり軽々しいことも述べられないが、次の様な説明がある。

この冬の北陸の豪雪については上層の気圧の谷の配置に例年に比べて図のような相違があること。又この気圧の谷は春には日本海の北方に逃げた為、太平洋側の高気圧が全般に優勢だったこと。

*「科学朝日」一九六三年六月号、九二頁、一〇三頁

「今年の気象は異常なところか」武井川俊英
及び西月上旬におけるテレビジョンでの気象解説



私達の気をつけていたことは降雨がある。サポートは
 蓮華温泉を中心として高度一五〇〇米前後で活躍するこ
 と、縦走隊は海拔〇米より出発することであるから雨具
 にはかなり注意した。幸い雨には合わなかつたが二〇〇
 〇米以下では雪に対しても雨具が有利な場合が多々ある。
 この様な雪の積雪は当然歩行にも影響を及ぼす。瀬戸川
 のスノーブリッジも、一雨後には危険な状態に陥つたこ
 とだろう。

高度の影響と地理的影響とのミックスによる気象変化
 (雪質、雪庇等も考慮した意味での変化)は当然予測さ
 れるものだが、経験してみると味わうべきものがある。
 トランシーバーの信用については多々問題があるが、
 この合宿では大きな威力を発揮したことをつけ加えて、
 宮本OB及び早川電機に御礼申します。

(大川記)

一般山行報告

南アルプス

期 間 4月28日と5月3日
 メンバー 三沢(L) 桑原、大川、秋濃、木原
 行 動 4月29日(晴) 転付峠―二軒小屋
 4月30日 (晴) 二軒小屋―千枚嶽
 5月1日 (曇雲)―東嶽―魚無沢―小西俣出合―
 中俣出合
 5月2日 (曇後晴)―三伏沢―三伏小屋―烏帽子往

復

5月3日 (曇) 塩見岳往復―塩湯

毛勝三山

期 間 4月28日と5月2日
 メンバー 梶本(L) 横尾、山本、高田、塩坂
 行 動 4月29日(曇) 宇奈月―僧ヶ岳
 4月30日 (快晴) 僧ヶ岳―駒ヶ岳―サンナピキ山
 5月1日 (薄曇)―ウダの頭直下―東又谷―稜線―
 毛勝山
 5月2日 (快晴)―猫又山―ブナクラ谷―馬場島

樽池―白馬岳

期 間 4月30日と5月6日

メンバー 辻、米沢OB

5月1日 (◎↓●) 猪股氏宅―赤ヌケ

5月2日 (○) 赤ヌケ―神ノ田圃、乗鞍岳往復。

5月3日 (ガス) 停滞

5月4日 (●) 停滞

5月5日 (◎↓①) 乗鞍岳往復

5月6日 (○) 白馬岳往復。下山。

遠見尾根より鹿島槍ヶ岳

期 間 5月2日と5月6日

メンバー 三田、保母

行動概要 5月2日 大阪発

5月3日 (○) 神城―遠見小屋

5月4日 (●) 1大遠見―五竜小屋

5月5日 (◎↓●) 五竜岳往復。

5月6日 (①) 小屋―唐松岳―八方尾根

赤牛岳より黒部川へ 後述

新人山行

大峯山

期 間 5月3日と6日

メンバー L浜田、吉川、播本以下新人6名

及び広瀬OB

行 動 5月3日 下市―坪ノ内―狼平。

5月4日 雙門の滝往復、

5月5日 (●) 弥山―山上ヶ岳―行者還

5月6日 洞川―下市。

穂高

期 間 6月8日と6月12日

メンバー 高田(L) 吉川、秋濃

行 動 6月8日 (曇後晴) 横尾にテント

6月9日 (雨一時曇) 瀧沢小屋往復

6月10日 (雨) 停滞

6月11日 (雨後曇) 停滞後散歩

6月12日 (曇後雨) 北穂往復―上高地

夏山縦走?

穂高岳―雲平―太郎山

期 間 8月10日と8月14日

メンバー 高田(L) 播本、秋濃、原、大笹

行 動 8月10日(晴) 潤沢テントーキレットー
中岳水場

8月11日 (快晴) 中岳ー槍ヶ岳ー三俣蓮華岳ー
雲ノ平

8月12日 (晴) 水晶岳往復

8月13日 (晴) 薬師沢ー中俣
8月14日 (晴) 中俣ー太郎小屋ー折立ー富山

2 洞沢ー烏帽子嶽縦走

期 間 8月10日ー8月14日
メンバー 山本(山) 吉川、牧野、中村、栗原

行 動 8月10日 潤沢ー横尾ー槍ヶ岳ー双六池
8月11日 (快晴) 双六池ー黒部乗越ー五郎沢ー

祖父沢出合
8月12日 (晴) 祖父沢ー赤木沢ー薬師沢ー雲平ー

祖母沢ー祖父沢
8月13日 (晴) 水晶岳往復

8月14日 (晴) テント地ー烏帽子小屋ー葛温泉

潤沢ー薬師
期 間 8月10日ー8月13日

メンバー 横尾(山) 大川、豊坂、石浜、畑中

行 動 8月10日(晴) 潤沢ー横尾ー槍沢ー槍の
肩

8月11日 (快晴) 槍の肩ー三俣蓮華ー黒部乗越
8月12日 (晴後曇) 黒部乗越ー黒部五郎ー太郎山

8月13日 (晴) ー薬師岳ースゴ小屋ポツカルート
ー常願寺川ー富山

上ノ廊下 (後述)

期 間 8月21日ー26日
メンバー 上保母、高田、横尾

秋山
南アルプス 赤石岳ー光岳

期 間 10月7日ー10月14日

メンバー 上豊坂、岡久、播本、石浜、畑中

記 録 10月7日 18・20 大阪発

10月8日(晴) 7・45 伊那大島ー10・30 大河原ー
13・35 小涉湯ー15・55 広河原小屋

10月9日(晴曇) 6・00 出発、11・20 大聖寺平、
13・00 赤石岳ー14・30 百間平ー15・40 百間洞山の家

10月10日(快晴) 5・25 出発ー10・20 前聖岳ー13・20

聖平小屋

10・11日(雨)風雨強く停滞
 10・12日(雨後快晴) 7・00 出発→10・40 仁田池小屋
 10・13日(快晴) 4・30 出発→6・10 易老岳→光岳往復(7・50→10・50) 12・15 易老岳→14・45 仁田池小屋

10月14日(雨) 5・00 出発→7・00 畑烽山→8・30 沼平 8・50 バス停車場

大台ヶ原東ノ川遷行

期 間 10月10日→10月14日

メンパ― L 山本 牧野 吉川

記 録

10月10日 7・50 近鉄阿倍野発 13・05 河合
 14・00 出発 15・30 ザンギリ峠 18・30 中商店
 10月11日(雨) ↓
 10月12日(晴) 8・00 出発 9・15 出口橋→10・30 木組橋 13・15 白崩谷→17・10 中崩谷
 10月13日(晴) 6・40 出発→7・30 地獄釜滝上→10・30 西ノ滝上→16・00 東ノ滝上→16・10 シオカラ谷吊橋→17・00 大台教会
 10月14日(雨) バスに乗る

蓮華温泉 (春山荷上げ)

期 間 11月1日→6日
 メンパ― L 高田 吉川 畑中 石浜
 行 動 10月30日(◎) 大阪発
 11月1日 (○↓◎) 平岩→11・30 ヒワ平 15・00
 ↓蓮華温泉

11月2日(○) 6・00 温泉→8・40 ヒワ平→16・15 温泉、ダブルボツカの繰り返し。

11月3日(●) 停滞

11月4日(◎↓●) 7・35 温泉出→8・50 瀬戸川→9・45 白高地沢→10・30 カモシカ平手前→13・40 温泉

11月5日(⊗) 停滞

11月6日(①×◎) 7・20 温泉出発→10・30 風吹高原→12・00→12・30 風吹大池→14・30 藤三郎→16・40 北小

谷

梅池→乗鞍岳→蓮華温泉(冬山荷上げ)

期 間 10月31日→11月7日
 メンパ― L 三沢 横尾 大川 秋濃 播本 原
 栗原 大笹
 11月1日(晴) 9・30 千國崎→10・30 猪股氏宅 11・50 千國崎→12・50→13・45 猪股氏宅→18・15 早大小屋

11月2日(晴) 7・早大小屋→猪股氏宅往復
15・20早大小屋

11月3日(ガス後雨) 7・30早大小屋→10・05乗鞍岳
11・30早大小屋。大川下山、三沢入山

11月4日(雨) 停滞

11月5日(雪) 6・55出発→10・20乗鞍岳→11・10

11・40)白馬大池 12・50蓮華温泉 横尾、原下山。

11月6日(晴後ガス) 7・10出発→8・20瀬戸川→

10・30カモシカ平→11・20引返し地点→14・15蓮華温泉

11月7日(快晴) 7・15出発→9・10ヒワ平→12・15

平岩

春山偵察山行

1 白鳥山

期間 10月1日→6日

メンバー L 高田、桑原

行動 10月1日(◎)市振出→上路→楡谷

10月2日(◎)終日木登りとブツシユ漕ぎ

10月3日(◎)猪股氏宅→赤ヌケ

10月4日(◎)早大ヒユツテ

10月5日(◎)→赤ヌケ→落倉。

2 蓮華温泉

期間 10月14日→10月17日

メンバー L 横尾、大川

行動 10月14日(曇後雨)千国崎→早大小屋

10月15日(曇後吹雪)→大池→三國境

10月16日(晴)→鉢ヶ岳最低鞍部→蓮華温泉

10月17日(曇)→平岩

3 白馬岳→不帰岳→唐松岳

期間 10月30日→11月7日

メンバー L 10月30日(◎) 9・40千国崎→

猪股氏宅→15・00梅ノ木寮前

11月1日(◎↓) 6・00出→13・30小蓮華→14・00

三國境

11月2日(○) 6・00三國境→13・00天狗の頭

11月3日→11月5日(風雪) 停滞

11月6日(○) 梶本、山本、桑原、三名不帰岳二峯偵

察。

11月7日(○) 6・00出→10・00不帰岳II峰→唐松岳

八方尾根→与兵衛氏宅。

トレーニング記録

3/3 (土) 場所 芦屋川ー横池ー奥池ー鷲林寺ー甲陽園

メンバー 三沢(L) 横尾 山本 大川 桑原

牧野 豊坂 木原

3/6 (火) 場所 宝塚ー東六甲縦走路

メンバー 梶本(L) 山本 高田 牧野 豊坂

4/15 (日) 場所 八丁谷ー六甲頂上ー油フツレ谷

メンバー 梶本 横尾 山本 大川 吉川

牧野 豊坂 秋濃 打出OB

4/22 (日) 1. 場所 御影ー地獄谷ー六甲頂上ー船坂谷

ー生瀬

メンバー 高田(L) 三沢 横尾 笠原 高橋

秋濃 播本 木原 栗原 広瀬OB

田井OB

2. 場所 御影ー西山谷ー六甲頂上ー船坂谷

ー宝塚

メンバー 山本(L) 梶本 桑原 牧野 豊坂

吉川 佐々木 田村OB 笠松OB

5/13 (日) 場所 轟来峡

メンバー

三沢(L) 浜田 山本 横尾 桑原

大川 牧野 吉川 秋濃 豊坂

石浜 原 栗原 中村 畑中 打出

5/20 (日) 場所 芦屋ロツクガーデン

メンバー

梶本(L) 三沢 山本 横尾 高田

桑原 牧野 吉川 播本 秋濃

木原 豊坂 中村 栗原 石浜 原

5/26 (土) 5/27 (日) 場所 船坂谷 次の日ー蓬来峡ー坐頭谷ー逆瀬川

メンバー

逆瀬川

梶本 三沢 浜田 横尾 山本

桑原 大川 高田 豊坂 牧野

播本 吉川 秋濃 木原 栗原 原

畑中 石浜 広瀬OB 広橋OB 大源

OB 田井OB 笠松OB 田村OB 保田

OB 米沢OB 西垣OB

6/17 (日) 場所 百丈岩

メンバー

山本(L) 高田 横尾 秋濃 牧野

吉川 播本 豊坂 原 佐々木

6/23 (土) 場所 畑中 石浜 大笹 打出OB 高橋OB
惣河谷

メンバー 梶本(L) 山本 高田 辻 吉川 播
本 秋濃 石浜 原 佐々木 中村

6/24 (日) ホツカ訓練

場所 芦屋川―荒地山―軒茶屋―東六甲

1宝塚

メンバー 梶本(L) 牧野 吉川 播本 秋濃

豊坂 木原 石浜 栗原 原 大笹

中村

7/8 (日) 場所 不動岩

メンバー 横尾(L) 秋濃 播本 中村 栗原

大笹 石浜 原 笠松OB

10/21 (日) 場所 芦屋ロツクガーデン

メンバー 高田(L) 梶本 山本 横尾 岡久

牧野 吉川 播本 秋濃 栗原

石浜 原 大笹 畑中

10/28 (日) 場所 保塁

メンバー 山本(L) 梶本 三沢 桑原 秋濃

11/11 (日) 場所 仁川

メンバー 横尾(L) 梶本 高田 桑原 播本

牧野 吉川 秋濃 中村 大笹

11/17 (土) 場所 夫婦岩

メンバー 横尾(L) 大川 牧野 秋濃

11/18 (日) 場所 逢来峽

メンバー 梶本(L) 三沢 山本 高田 横尾

大川 岡久 牧野 吉川 秋濃 豊

坂 栗原 石浜 原 大股 畑中

11/24 (土) 11/25 (日) 場所

御所―山開―葛城―青崩―
金剛

メンバー 高田(L) 吉川 秋濃 原

畑中 大笹

12/2 (日) 場所 百丈岩

メンバー 梶本(L) 山本 横尾 桑原 吉川

石浜 畑中 原 中村

12/10 (日) 場所 箕面―好見

メンバー 山本(L) 高田 牧野 秋濃 石浜

栗原

一部記録もれがあるかもしれませんが(特に
OB)御了承下さい。

一九六二年度の

部会における研究発表

3/1	気象(春山)	桑原
	雪崩	横尾
3/8	医療	大川
	ボートについて	辻
3/9	五月山行の気象と注意	三沢
3/6	六甲周辺の説明	播本
	上廊下周辺の説明	玉井
3/7	地図の見方について	高田
	岩登り技術	梶本
3/9	黒部周辺の記録	横尾 高田
3/4	気象 観天望気	大川
3/1	圏谷の形成について	牧野
3/8	夏山合宿、穂高の岩場について	梶本
3/0	気象研究会 大阪気象台より齊藤氏(大阪管区気象台)来講	
3/5	岩場における怪我の処置	田村
	遭難が起つた時の処置	三沢

夏山小屋建設ボツカ中(7/11 ~ 7/31)

	高山植物	吉川
	ヒマラヤ登山史	播本
10/25	十一月の気象	大川
	十一月山行の注意	梶本
11/5	冬山個人装備について	高田
	冬山個人装束について	桑原
11/22	十一月山行中での天気図	横尾
	白馬周辺の厳冬期の記録	播本 牧野
	雪山露営	
11/29	雪崩と雪庇、雪崩と天気図	大川
	冬山での注意	梶本
12/13	冬山気象	秋濃 吉川
	医療	豊坂

＝ 1962年度 ＝ 決 算 報 告

自 1962.4.1 ～ 至 1963.3.31

I 収入の部

前期繰越	32,189
部費・入部費	35,300
体育会援助金	28,500
その他	4,645
計	100,634

II 支出の部

装備備品	47,960
事務用品	10,696
通信・交通費	16,824
諸会費	4,000
雑支出	8,340
次期繰越	12,814
計	100,634

責任者 高 田 邦 雄

一般山行記録

§ 立石黒部上廊下 §

(一九六〇年夏山縦走)

佐 藤 毅

メンバー 保母、酒井、西垣、黒木、金子、佐藤

期 間 七月二十九日～八月九日

七月二十九日 晴 千丈沢～大町

縦走用食糧が置いてあるので、保母を湯股に残し、他のパーティと共に酒井、西垣、金子、佐藤の四名で

大町迄出る。大町で精進落を行ない、駅で一泊。

七月三十日 晴

大町～湯股

山の神の所で軌道が約五百米程不通になつており、朝のパーティと一緒に不通所のポツカ。縦走とはいへ、人数と日数で相当な量、夕食は朝のパーティと一緒にやつてもらふ。実に有難い。明日からは自分達でと考えると少々億劫になる。

七月三十一日 晴

湯股～伊藤新道～三俣蓮華

六人分の荷物を五人（黒木とは三俣で落合う予定）で担ぐ。米二斗その他色々としものも多く、

一人当り十二、三貫の荷になる。三俣に着いたのが四時過ぎ、朝一緒に出た剣のパーティは一時過ぎに着いた由。今日はさすがにバテた。飯を食べ終つた頃黒木がたどりつく。やつと、たどりついたという様子、我々の注文が多過ぎるとさんざん文句を云う。一日で新穂高から来たので完全にいかれている。

八月一日 晴

雲ノ平、黒部源流

今日は休養日、源流での鯉釣りと雲ノ平の散歩とする。保母、酒井、金子の三名は雲ノ平へ、西垣、黒木、佐藤の三名は釣竿片手に源流へ。やはり腕自慢を誇る連中だけあり、夕刻迄に五十数匹を釣上げる。六人で食べ切れず近くのテントに売りに行くが買手なし。明日の食料とする。

八月二日 晴一時雨

三俣蓮華↓高天ヶ原

目が覚めるともう九時、いそいで出発する。六人で分けたが相当の荷物、途中で会つた剣のパーティの一年部員がびつくりしていた。高天ヶ原に着いた頃、突然空が暗くなり、雷がなり、パチンコ玉より一まわり程大きなヒヨウが降り始めた。こんな大きなヒヨウは始めてなので一同びつくり、あわててテントに逃げ込

む。高天ヶ原にテントをはるのほらないのと一悶者あつたがこのヒヨウで既成事実を作つてしまう。雨上りの空に出た日の美しかったこと。

八月三日 晴

高天ヶ原↓立石

朝露にべつとり濡れて大東鉾山小屋に着く。立派な無人小屋である。途中で金作から来た京大パーティに逢う。これで上廊下に行く連中は一段と元気になる。岩小屋を物置きとする。酒井が今年の春、薬師より立石に降りた時のフィックスザイルをみつける。

さつそく鯉釣り、昨日は源流で釣つたのをどこかに落したので食いはぐれた。今日はどうしても釣らなければ。ようやくして一人二匹づつの割当にありついた。しかし源流ほど釣れない。魚がすれているのか、それとも少いのか。

八月四日 晴夕刻小雨

酒井、保母、金子の三名↑上廊下へ

西垣、黒木、佐藤の三名 立石滞在

立石組行動記録

酒井、保母、金子の三名を三日の予定で上廊下に送り出す。残り三名は立石にて鯉釣りとする。本流で釣るがなかなか釣れない。やはり沢、小谷の方が魚が多

いのである。黒木が尺蠖を釣る。今日より三名となり、昨日迄寝苦しかつたテントも非常に快適となる。連中は。

八月五日 晴午後より雨

今日も好天気、午過ぎまで竿をふりまわしていたがあきてしまう。午後より雨が降り出したが、岩苔小谷で釣っている西垣は帰つてこない。黒木と二人で釣れないのでかつかしているんだらうと話していると、ずぶ濡れになつて帰つてくる。しかし手には相当な獲物である。それも八寸位のやつばかり、穂先をとられたのでしかたなく帰つてきたらしい。黒木と西垣と二人で、土産にもつて帰るのだと云つて、燻製を作り始めた。雨の降る中で。

八月六日 晴

西垣が昨日なくなした穂先をさがしに行く、我々二人も、彼が昨日釣つた所に案内してもらおう。丁度滝になつていて、魚の行止まりの様な所である。たしかによく釣れる。それも形のそろつたのが、昨日なくした穂先がみつかる。やはり魚がひつかかつていた。

昨日の話ほどでもないが、二時過ぎ上廊下の連中が帰つてきた。その様子たるやまさに山乞食である。地下足袋はやぶれ、ふらふらした歩き方でさぞ困難であつ

たのだらう。金子が手を負傷している。途中でスリップしてあぶない所であつたそう。高橋が喜ぶだろうと春の食料の残りをひろつきていた。

今日から又にきやかになる。

§ 上ノ廊下隊記録 §

保 母 武 彦

メンバー 酒井(T3) 金子(T3) 保母(岳4)

装 備 ナイロンザイル m 一本

シエルト 1 携燃 2コ

食 量 三日分

8月4日 (晴後雨)

8・30 立石出発 三人共地下足装でサウである。右岸を通り、9・40 左岸に中央カールよりの沢の出合通過、11・00 大きな瀧に出合い右岸を30m程を高巻き、ケンスイして河原に降りた。ここより下流金作谷までは本格的な廊下となつている。昼食(12・00 & 13・00)後さらに右岸壁をへつて14・00に金作谷出合に致る。その頃より小雨が降り始めた。左岸の礫に渡渉し、さらに右岸に移つたところから下流は沢通しに行けそうもなかつた。

大きく高巻きしてスゴ沢の合附近に出る横りで20m程の壁を登り、やぶこぎをした。河原より150m程登つたところの草付きで一人が約30mスリツプ。(16・30)幸い滝つば様の処で止つたが足を打ち歩行困難となつた。

附近を物色しやつと60m位はなれたところに3人が横になれる場所を見付け、ビバーク(17・30)

八月五日 晴 後雨

足の痛みは心配した程のことではなくなんとか歩けるといので予定のコースへ7・30出発。

露にぬれた身のたけをこす葉の中を歩き6時間後ようやくスゴ沢合に着いた(14・00)ここで火をたき食事し、衣服をかかわしてスゴ沢へ入つた。スゴ沢合より下流へは時間的に無理なのであきらめた。(16・00)

スゴ沢はこの附近の逃げ道としては唯一のものである。スゴ沢のF1は右岸をまいた。すぐ上のF2は左岸を登つた。F2の上になつとした平らな処があつたのでそこに泊つた。(18・25)

八月六日 快晴

6・00 出発 7・30 スゴ乗越 8・00 スゴ小屋

10・00 北薬師 10・40 本峰

11・30 / 12・00 (南稜(東南尾根)第一尾根ジャンク ション) 昼食 13・00 第二尾根コル これよりガレ沢を

下降、黒部への落口が滝になつていたがアツプザイルして河原へ降りた。(15・30)

右岸に移り17・00 立石着

この山行では上廊下の核真部である金作谷、スゴ沢間を見ることが出来なかつたのは残念なことであつた。

しかし黒部上廊下の雰囲気を知るにはかなりの効果があつた。

八月七日 晴 薬師バツトレス

今日は、上廊下の連中は休養 立石組は薬師バツトレスを登りに行く、酒井、金子を残し、四名で二パーティを組む。

。保母 佐藤組

右手のリツチを登る西垣達を別れ、正面のフェイスを登る予定で沢をつめ、やつと下部に達する。フェイスは三つに分れ、縦にリスが一本走つている。長さにして三ピツチ(百二・三十米)位であるが、手持のハーケン等が不十分であるので、フェイスの右を登ることにした。クラック状の所から取付き、十五米位で小さなオーバハンクにぶつかる適当なリスがないので、腕力で登りこえる。二ピツチのトツチを保母にゆずる。右手のリツチに出るのだがハンクについて相当困難、結局あきらめて、トツチ交代、左寄りにフェイスにルートを取る。

草付きのいやな所であつたが、四十米一杯でフェイスの右上に出る。所要時間三時間ばかり、これから上部ブツシユこぎをやらされた。やつと岩峯の上に出て一の沢に下る。ハーケン七本使用 捨て縄一。

遠方より見た所立派な岩壁にみえるが、實際そばで見るといくつかに分れており、ブツシユが多く、又スケールが大きいためルートを選択が非常に困難である。

○黒木、西垣組

城壁のようなバットレスの、一番右手のリツジを登ることにし、保母達と別れ、基却へくい込んでいる沢をつめる、右手の尾根へつきあげている沢より別れて岩にとりつく。リツジの左の凹角をハーケン二本で一ピツチ、さらにリツジにて二ピツチ、核心部は終つた、後は岩とブツシユの中をマンティニアスで薬師からの尾根へへた。取付から約三時間、途中保母と佐藤がハンクの下で苦勞しているのが見えた、帰りは左手の沢を降つた。

八月八日 晴

立石―薬師沢、立石―槍

今日で立石ともお別れ、佐藤は槍経由下山予定、残り五名は薬師沢―太郎平―有峰のコースで下山と決定する。

佐藤 立石―三俣連華―槍

五名ものものと分れ八時に立石をとび出す。六日前通つ

た道を引き返す。高天ヶ原でしばらく、景色を楽しみ三俣の小屋に着いたのが一時過ぎ、千丈乗越の辺で日が暮れ始め、膚の小屋に着いた時は七時をまわつていた。素泊り百五十円に値切り、久し振りにフトンで寝た。

五名(保母、西垣、酒井、黒木、金子)

9・00立石出発 9・50高巻き終り 14・00廊下終り

16・40薬師沢出合

八月九日 晴

佐藤 槍―徳本峠―島々

銀座のような上高地に出るのをやめ、徳本峠を越えることにして猛烈にすつとぼす。徳本峠登り口には九時過ぎに着いた。さすがに通る人はほとんどいない。終止の小屋で昼飯を御馳走になる。残つた食物を全部お礼として置いていく、昨年の五月の時とは違つて危かしい橋も新しく取かえてあつた。涼しい川風に吹かれながら島々へ。

五名

10・00出発 16・00尾根取付

八月十日 小雨

五名

7・30出発 8・15太郎平 10・00三角美 11・00折立。

北アルプス中央部横断

(一九六一年五月の記録)

玉井 康雄

われわれの黒部に関する記録は一九五六年春の下廊下横断、五八年冬の赤牛岳、五九年春の上廊下横断とつみかさねられてきたが、これらの行動によつて、いまさらながら薬師のスケールの大きさに気のついたわれわれは六〇年春、その頂上をベースとする合宿で、東面のおもな尾根と沢をトレースした。このときの計画には、黒部をわたつて赤牛へ向かうプランも含まれていたが、実行できず、翌年春、改めて薬師―赤牛―烏帽子をむすぶ計画とした。しかし、これも遠征への準備などのためにやはり流れてしまった。

そしてついに五月、計画を烏帽子から薬師へ向かうように変更のうえ、実行に移した。

これはすでに五月であり、一日で烏帽子小屋へはいれるのと、薬師東面での雪崩の危険がなくなつたためである。黒部の渡河地点は金作谷出合いのスノー・ブリッジを利用することとした。

パーティーは田井英男、玉井康雄(以上O.B.)と田村俊秀、笠松卓爾(以上医五年)、梶本孝治、三沢日出夫(以上五三年)

☆ 行動記録 ☆

四月二十八日 大阪発

二十九日(曇後みぞれ)大町から七倉までバス。

三角点あたりからみぞれが降りはじめ湿つた雪の中をすつかり濡れて、十八時すぎに烏帽子小屋にはいつた。

三十日(晴) 五時半すがすがしい天気。気をよくして小屋をとびだす。三ツ岳の三角点ピークを越え西に三つのコブがつづいているところで縦走路から分かれる。二つ目と三つ目のコブの間から三ノ沢へつづく雪田を下る。

三ノ沢の上部はもぐつたが、沢がせまくなるあたりからテラリがいつばいで全然もぐらない。東沢との出合いの近くで沢の雪がわれていたので、左岸の林を通つて二十時半に東沢に出た。東沢は水が多く徒渉かと思われたが、倒木を利用して渡ることができた。すこし左岸をつめて、まもなく中小谷の広い押し出しに出た。ここで一回目の昼食を取る。

中小谷は傾斜はゆるいが、日がいっぱいに照りつけていて雪の状態はよくなかつた。ひとまずノン・ストツプ

で中小谷の三分ノ一くらいのところまでいき、左岸から突きだした大岩を目ざして登りだす。ひざ近くまでもぐるので何度もトツヲを交代した。岩に近づいたとき左手上方で雪崩が出る。そこでこれ以上沢すじを行くのをやめ、その大岩の右手のザツテル目ざして急斜面に取りついた。雪面が切れやすく登りづらい。

やがて中小谷東越北側の二八一〇メートル峯から、東にのびた尾根に出た。ここから見ると中小谷上部は広いカールとなつてゐる。尾根は沢よりも雪の状態が悪く、トツヲが足をけりこむとパーティイの乗つてゐる斜面全体が振動する。下の岩との間がすつかり空洞になつてゐるからだ。踏み抜いたら一度に腰まではまりこみ、体力を消耗する。稜線がかなり近づいたころ露岩の丸いくばみに水を見つけ、さつそく二回目の昼食をとる。

元気をとりもどして二八一〇メートル峯の北をトラバース、十三時半に赤牛の稜線に出た。雪の少ない西側を通つて、ほどなく赤牛の頂上へ。雪庇の上で記念撮影。ここからの薬師は全く素晴しく、いつまで見ていてもあきない。きょうの予定はこの辺までであつたがまだ早いので北西稜を下つてしまうことにした。岩の出たP2を越え、広いP3の上から金作谷の方を觀察する。結局P3から黒部に向かうと薬師中央稜末端の廊下に出ると判

断されたのでそのまま北西稜を下つて、カスミ平から金作谷出合いに向かうことにした。

P3から雪はまたくさりはじめ、ひざくらいまでもぐる。パーティイがやや離れてしまつたので、疲れた者にP4手前の草地で十六時の天気予報をきいてもらい、他はP4のブツシユをこいで、他はP5、P6間の、木立ちの中にテントを張る。薬師は木立ちにじやまされてよく見えないのがちよつとなさげない。雨が予想されたのでテントにフライをつけた。全員くたくたになつて夕食の用意をする。

五月一日(雨) 朝からガスが流れ、雨が降つてゐる。一応早起きをしたが、またシユラーフにもぐつてしまう。九時に小降りになつたので、黒部に偵察に行くことにした。

全員ででかけるまでもあるまいとくじを引く。田村、田井、三沢があたつて、雨の中を出ていく。彼らはP6の手前でカスミ平に下り、真つすぐ金作谷出合いをめざした。アツツザイレン五回で出合いに達し、帰途にやや下流にカスミ平まで切れずに上がつてゐる沢を見つけて帰つてきた。偵察隊はあこがれのカスミ平を歩いてきたのですつかり気嫌がいい。「金作谷出合いにしつかりしたスノー・ブリッジがあつたかい」と聞くと「スターリ

ン戦車でも通れる」ということなのでやれやれと安心した。しかし、これは国防上の最高機密に属することなので、以後黙つておくことにした。

二日(曇後雨) 天気図では午後には寒冷前線の通過が予想されたがこんな黒部の奥で雨に降られていても仕方がないので出発することにした。八時半、テントをたたみ昨日のトレールにしたがつてカスミ平へ降りる。

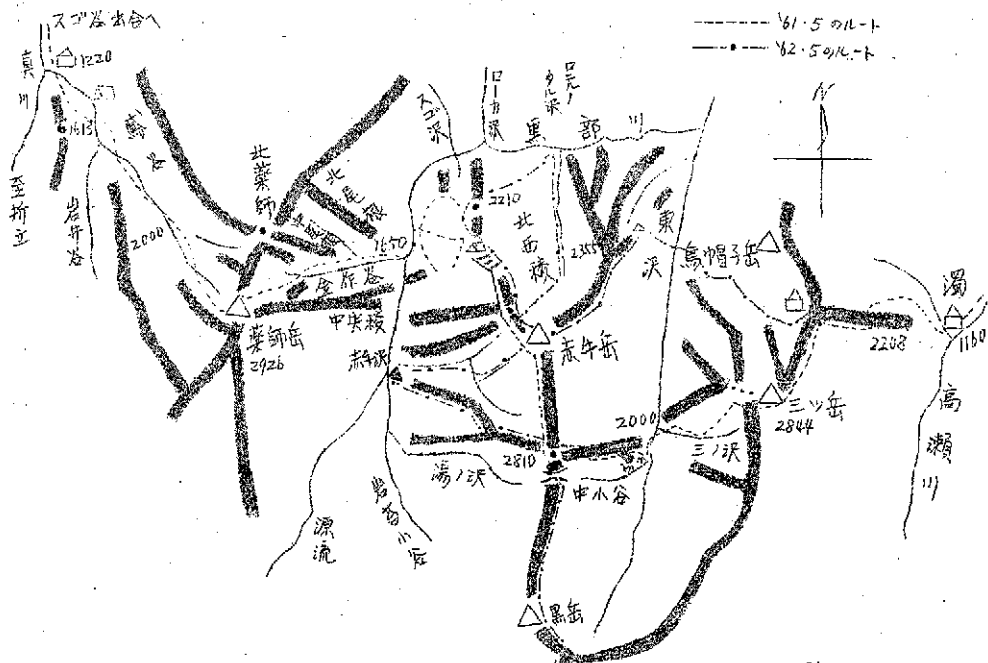
天気は持ちなおした。われわれはカスミ平を歩いていくというだけで充分幸せだった。オオシラビソがところどころに顔を出しているだけの素晴らしい雪原だ。平は途中に一段あつてまたその下に雪原がある。この付近は夏にはひどいブツシユで近づけない。沢はここからやや北向きにおりている。なかなか黒部が近づかない。かなり下つて左手の尾根にトラパスすると突然金作谷出合いの巨大なスノー・ブリッジが目にとびこんできた。

出合いから下流はずつと流れが出ている。出合い下手の広い雪面にグリセイード気味に下る。そこから右岸の雪をつたつて出合いのスノー・ブリッジに出る。赤牛側斜面は、あまり雪がついていなかった。もしきのう天気がよくて荷をもつてここへまつてきていたらさぞ苦勞したであらう。ガレの中からの湧水を利用して、一回目の昼食をとる。まだ九時半である。

スノー・ブリッジを厚さが五メートルくらいあるが、底は水中に没していてわからない。巾は三〇メートル以上の青いクレパスが薬師側に一本はいつている。ここから金作谷をつめて、薬師へ出るのは問題もなさそうだが、二股から上が厄介であろう。金作中尾根か、金作カールまで沢をつめるかであるが、尾根でくさつた雪の中をもぐるのはいやなので、雪崩に気をつけつつ、一三〇〇メートル薬師まで金作谷をつめることにした。

九時五十分に出合い出発。沢は二股までは明るかつた。左股にはいるとまもなく中央稜上部から、ブロッツクが落ちてきたが、沢の中央まではやつてこない。沢はデブリでいっぱいだが、かなりもぐるので歩きづらい。トツツを交代しながらピツチをあげる。中央稜からのブロッツクにも馴れてきた。高度はどんどんあがるが、カールの落ち口はなかなか近づかない。

やがて沢が一本ダイレクトに北薬師へつきあげているところ近づいた。そのとき突然大きなブロッツクがわれわれの頭上にゆつくり空中に浮かびあがるのを見てびっくりし、大いそぎで左へ逃げたが、しかし湿雪特有のゆつくりした巾二メートルくらいの雪崩に乗つたブロッツクだったので、びつくりしただけで助かつた。カールの落ち口に近づくとつれて沢はこまかくわかれていき、われ



われはますます大きくあえぐ。ややパテ気味になったところ、やつとカールにはいつたが、ガスが濃くなつて何も見えなくなつた。

中央稜にあがらないように気をつりながらガスの中をすすんで最後に急傾斜をピツケルたよりに慎重に五〇メートルほど登ると縦走路のガレ場に飛び出した。十五分くらい南に登つて、十四時に半分雪にうまつた葉師のほこらに着く。全員集まつて、握手をかわし、濃いガスの中で干しぶどうをわけあつてから、薦谷目さして雪面を西へ下りはじめた。

表面だけクラストした歩きづらい雪なので尻をつけてすべつてみるとなかなか調子がよい。ガスの中を先頭を見失わぬようどんだん飛ばす。こうして薦谷二股までほとんど九〇メートルをすべり降りた。

おかげで下半身がびしょ濡れになつてしまつたが、まあ今夜は出合いの小屋に泊まるんだからいいや。ところが、沢の雪が割れて歩きにくくなるころ、雷雨になつて下半身どころかたちまち全身ずぶ濡れとなつた。十七時、河原の雪の上に設営する。

三日(曇時々雨) 十時、ゆつくりテントを撤収。

岩井谷左岸に渡るため、昨夕見当をつけておいたスノ・ブリッジまで後もどりする。ブリッジを渡つてから谷沿

いに進むのは行きづまるおそれがあるので、ナツシユと雪田を一六一三メートル峯近まで登った。そこからは真川出合いの小屋や橋がすぐ下に見えた。しめたというので一氣にかけおり、橋で濡れた物をひろげた。

スゴ谷出合いまでの道は、デブリですつかり荒れていて。雨の中を歩いて時間をくつたが、やがてスゴ谷の取り入れ口小屋についた。

四日(雨) あいかわらず雨。昼すぎまでねぼつたがやまないので出発する。砂防軌道はデブリのため下の方しか動いていないので、結局雨の中を千寿ヶ原まで歩かなければならなかつた。

(この原稿は岳人一六九号に掲載)

東沢谷二の沢・口元のたる沢

そして赤牛沢

(一九六二年五月)

牧野 大 輔

メンパー 田村(エ) 笠松 田井 玉井 牧野

一九六二年

四月九日(小雪) 8・45七倉発 10・10濁

11・40ブナ立尾根取付き 15・45三角点 17・30烏帽子

小屋

四月三十日(晴) 停滞

五月一日(晴後小雪) 5・30烏帽子小屋発小屋のすぐ前から二ノ沢に入る。雪は可成りしまつてゐる。

5・45最初の滝 左岸の雪壁を \times して通過。続いて廊下状になり2 \times で左岸を通過。廊下は最後滝になり、これは右岸の雪壁を1 \times で通過。7・50二段の大滝 偵察後左岸を高巻き、最後は \times して滝下に降りる。

この間約2時間を要す。これが最後の滝で、最大の滝(50m)であつた。後は雪で埋まつた沢を快調にとばして川のせせらぎを聞きながら東沢出合へ。10・15東沢出合 昼食11・10出発 対面の急な尾根を登る。13・15△雪が降りだす。14・45赤牛岳東北尾根 Junction。雪が本格的に降りだす。口元のタル沢が見える所にテントを張る。時々小雪となり、ガスが切れて口元のタル沢が姿をみせる。途方もなく大きい。

五月二日(快晴) 7・55出発 途中の岩峯も基部を巻いて難なく通過。10・30赤牛頂上 三角点のすぐ横にテントを張る。12・00赤牛沢下降 上部は巾広く、グリセードとばす。12・30左右より小沢が入りつるつるの滝が露出している。所々雪が薄くいやな感じ。13・00黒部出合い 13・15立石に向かう。右岸をへつろうとするも

果たさず高巻く。13・55立石岩小屋 14・30出発 赤牛
岳黒岳の稜線より立石に下りている急な尾根に取付く。

所々雪のついた草付きにぶつかりツツシユを擲んで強引
に登る。15・15平な所に出る。薬師と赤牛がすばらしい。

16・45人型の Junction (2600m)。17・20稜線

夕焼けで空が真赤に染まつている。疲れた足をひきつ
て17・55テント着

五月三日(晴後小雪) 7・05出発 北西尾根 P 2 /

P 3 コルより口元タル沢へ下降。沢の上部の広いカール
をグリセードと尻制動でとばす。赤牛の Peak がみるみ
る高くなる。7・30沢狭くなり、あちこちにデブリがで
ている。7・45左右より岩尾根を押し出し、沢は30と50m

の滝となり合流している。廊下状、8・05大滝 左岸を
高巻き、左岸に入る沢を利用して滝下へ。8・30滝

(二段) 両側はスツパリと切れている。ひつかかつた
ブロックの上を慎重にアツプザイレンしてくだる。

8・55偵察 暗い廊下を下るとすぐ黒部。引返し全員で

9・15出合いへ。出合は大きな Snow Bridge がかり、
対岸にわたつて昼食。9・50口元タル沢左岸の尾根に取

付き、赤牛のすその白地に上る。ところどころ旧東電歩
道の踏み跡らしきものがみられる。11・45 下 11・15

カスミ平 昼食 12・25発 13・15 P 4 14・15 P 3

14・40 P 2 14・50テント

五月四日(風雨) 停滞

五月五日(午前雨後晴) 停滞、午後2時頃急にガス
が切れ、今まで30m程しかなかった視界が急に何百kmと
いう視界になる。

五月六日(晴) 6・00出発 8・00水晶 しばらく

は宝捜しに余念がない。10・00水晶小屋近くへ。鷲羽を
トラバースし、源流を尻制動で下り、トラバースして

11・15三俣小屋へ。13・30双六 昼食 あてにしていた

春山の食糧何もしなし。14・40発 落とし穴に悪態をつき
ながら16・00大乗間乗越、雪崩に注意しながら尻制動で

大下り。16・30左俣出合 16・50雪橋で右岸へ。17・20

わさび平 18・30新穂高温泉。風呂、ビール、お湯。

(付記) 田村俊秀

昨年5月このあたりを横断して味をしめたので二番煎
じの山行をやつた。5月の落着いた雪は多少の危険を考

慮すれば他の季節には想像もつかない程谷や尾根の通過
を容易にする。横雪期の上廊下周辺は魅力ある課題だが、

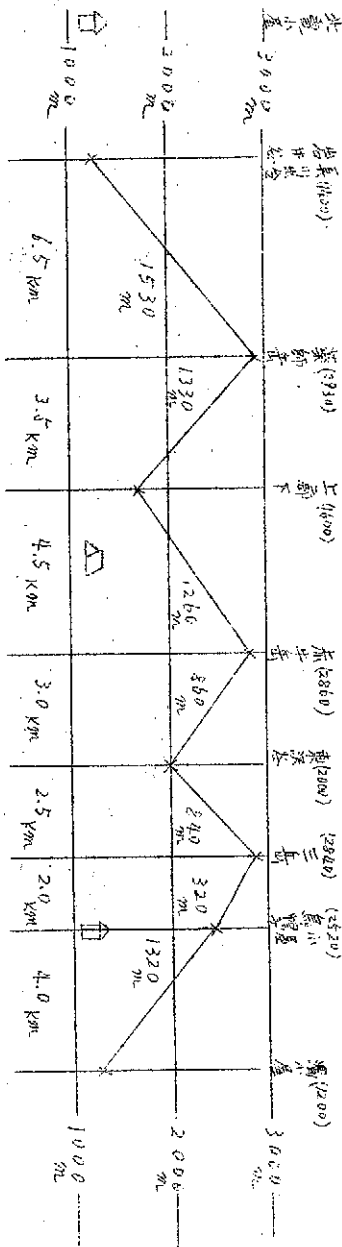
まず5月の雪から徐々にためして見る積りであつた。

かつての三高の人々が東沢に繰り広げた生活を上廊下に
再現するのは途方もない夢だろうか。

ある山行

笠松卓爾

一昨年、昨年と二度ばかり、我々は「烏帽子岳」赤牛岳「薬師岳」を結んで、たのしい五月山行をした。白分達の現役時代に、上廊下をめぐつて二つの大きな横雪期の合宿を展開した者が、この一帯にまだ執着心を持つていても不思議ではない。上廊下横断行に於ては全長18 Kmをこえるポラーリ戦術の500mに近い主稜線だけでも13 Km余の長さ(を)を展開して始めて、上廊下に近づく事が可能であつた。薬師岳東面合宿では、1300 m余の高度差を上下し、黒部川の流れる水を汲む事はできたが、これ



を渡り赤牛岳まで走る事は許されなかつた。もつとあつきりと上廊下に接近できないものであろうか。これらの三本の主稜線と、二つの大きな谷を結びつける事はできないものであろうか。それは唯一つ、できるだけ直線的に横断してゆく事である。かくて、第一回目の計画が生まれたのである。

或る者は、薬師東面合宿ではたさなかつた「薬師岳」上廊下「赤牛岳」のラツシユ戦法を胸に描いていたかもしれぬ。又他の者は、以前に「一ノ越」から遠望した口元のたる沢の事を思い出していたかもしれぬ。東沢谷の開けた明るい谷にあこがれた者もいたであらう。ともかく、信州と越中とを結ぶこの横断行を、どつちがわから始めるのか、がまづ議論された。

この計画の最大の焦点を、上廊下渡りに置き、金作谷出合のスノーブリッジを期待する事にした。とすれば、この地点について自分達はよく知つているとはいえ、計画の前半に於て、一番問題になると考えられる所を通過しておきたかつた。又雪のある時期の東沢谷を直接に知つてゐる者がいない。という事もあつた。谷底にテントは張りたくなかつたから、上廊下渡りについては、薬師東面を一気にかけ降りて一日で赤牛の台地に達する。というのがよい様に思えた。新雪に出くわしたりする危険を考えれば、なおの事である。その上、越中側から入る場合の方が、上りの高度差の総計では200m程少くてすむ。それにもかかわらず、我々は信州から越中へと抜けた。何人といつたつて、「ちよつびりがんばれば第一日目で主稜線に頭を出せる」という事が、あのいやなブナ立を登る決心をつけてくれた。(薬師にはとても一日目ではとどかない。)

東沢の渡りは、落差を少くする事と平面距離を短くする事の妥協から、三ノ沢と中小谷乗越とを結ぶ地点をえらんだ。それらは、我々が夫々対岸から遠望した事のあつた沢筋でもあつた。薬師からの下りは、重力の法則にまかせて、全く知らない鷲谷をかけ降りる事にした。

ついでながら、五月の連休をチャンスにえらび、現役

部員をまき込んだ点についてかきそえておく。単に我々若いOB達の共通のヒマは、この連休にしかとれない事や、四人だけでは冬用テント一つが重すぎる事もあるが、もつと本質的には、残雪期にあつては、ナダレをそれ程怖れる事なく沢筋に入る事が可能であり且、一日の行動範囲、時間が相当大きくとれる。という好都合な所がある。そして、この様な山行の中から、次の合宿計画への着想も生れてくるのではないかと考えている。事実、この山行を楽しく思つた我々は、次の五月連休にもこの山塊に入つた。

二度目の計画は、形を少し変え、赤牛から発する沢のトレースを主目的とした。この山行で我々は、東沢谷二沢の下部が三沢に比べてやつかいである事を知つた。又、口元のたる沢や赤牛沢が雪にうもれてゐる状態をある程度知りえた。ことに前者では、数多くのデブリの上をこえた。両側面からのものである。下谷にはかなり大きい滝が連続してゐる事を推測しえた。これらの沢は、無雪期あるいは厳冬期であれば、これ程容易には近づけなかつたであろう。一週間の日程は、我々が赤牛前沢や赤牛北東尾根²³⁵⁵m峰につき上げている沢等に足を伸ばす余裕を与えてくれなかつた。赤牛頂上のキャンプから、口元のたる沢―廊下沢―越中沢岳へと抜ける計画も、次の機

会に残されてしまった。

今、この二つの五日山行をふりかえりながら、私は、自分達のたのしかつた山行も、やがて来たるべき「横雪期上廊下の完全廻行」の爲の一つの踏石となる事を願っている。

減水期上廊下の完全廻行は、既に実現した。横雪期にも部分的トレースは行いはじめられている、と聞く。

残されている問題は、数ヶ所ある壁のへつりと、全長約20 Kmにわたる上廊下全域（東沢谷合出合から源流の詰まで）の積雪状態や雪崩についての知識を増し適切な判断を行う事ではないだろうか。后者は廻行隊の走らせ方とサポートの入れ方とを左右する。いづれにせよ、もし后者に關してある程度以上の確信を得る事ができれば、へつるべき壁に無雪期の合宿でルートを開いておき、続いて春山にこの計画を実行する事もできるのではないだろうか。私には、この計画が、阪大山岳部によつて実現されるのは、ここ三・四年の間の事と思えてならない。（もつとも、これだけの規模の計画であれば、例えば関西学連あたりでとりあげるべきものかもしれない）

最後に。

目下、P 29 峰に二度目の遠征隊を出す準備が進められている中で、少しばかり考えた事をつけ足しておこう。

雪積期に於ける谷や稜線の横断—という登山形式は、常に遠望と没入との組合せによつて進められる。その過程の中で、地形・気象・積雪等の変転やからみ合いを経験する事は、私達が技術と判断力との両面に於て自己を伸ばして行く上に役立つのではないだろうか。そしてこの事は、質に於ても規模の点でも大きな違いはあるにせよ、国内での私達の山行を、常に偵察と共にある山登り、海外の未知の山塊における登山に結びつけてくれる一本の太い網ではないだろうか。

横雪期登山について云うなら、主稜線上の縦走はきびしくこそはあれ、単調さがある。尾根を使つての極地法登山、そこには個人が集団の中にもうもれてしまう危険がある。私達の山岳部がスキーを駆使する合宿をやるのは先の事だし、悪壁を専門にねらうにもそれだけの積重ねがない。まだ残されているいくつかの未登岩壁に岩登術の粋をひつさげて立向うならいざしらず、今となつては重箱の隅をルーペで拡大する外には、日本では新しい山はない。あまり人に知られていない山、近頃あまり人が入らない山という程度では、それを量的に大きく引伸ばしてみた所で、ルーペ片手の毛虫あきりと大差はない。（この稿のはじめ所でおわりの様に、自分達の山行を、「北アの中央部に新しいルートを開いた」とかなり誇ら

しく思つていたのであるが、ある機会に次の様な記録を約30年前の山岳に読んでかなり考えなおしている。それは一月に「烏帽子小屋―南沢岳双子峰のコル、そこから沢を下り東沢谷―東沢谷遊歩して中小谷沢出合―中小谷乗越―赤牛岳」というルートをたどつたものであつた。似た様なアイディア、似た様なルートが既に先人によつて記録されている事には卒直でありたいと思つている。)

以下の事は極論である。

頂上やそれへのルート、つまり山そのものに意味があり新しさが求められた時代はもうすぎ去ろうとしている。日本の山登りが、海外の山岳に大きく開かれてゐる今日、一体何が残されているのだろうか。新しさは山そのものを離れて、登る者の頭の中に求められるべきではなからうか。同じ材料をできるだけ新しい考え方で料理しよう。―というのと同じ事である。こんな考えを持つ事は、一種の悪あがきとも受けとれるが、しかし山行計画のマンネリを打破るのは、新しい着想だけである。新たな意味づけだけである。

例えば槍ヶ岳の地図をみていただく。そこには3000mをこすピークと肩から伸びる四つの主稜線とがある。

かつてはこのピークに立つ事が、次には四つの鎌を縦走して頂上に至るといふルートのおもしろさが、競われた。

時代が下ると共に、槍の頂上を目ざす縦走の規模は大きくなつた。けつたいな尾根と槍岳とを結びつけた山行もあつた。しかし槍ヶ岳という高名で且高い山の四つの鎌を順に横断してまわろう―という山行が行われた話は聞かない。(この案は、もう数年前に出されたものであるが、どうしてか立消えになつたままである)この場合、北鎌尾根なり滝谷なりの岩登りも組合せると、一層おもしろく且前にのべた様な総合的トレイニングとしての意味も大きくなると思ふ。

もうそろそろパンをおきたい。

私は、現役部員の山行が充分の基礎のないままにヒマラヤ熱に浮されるのを好ましい事とは考えない。が、しかし個人個人の心の奥では現在の自分達の山登りが、将来のもつと規模の大きい、それに発展してゆく事を願つている事だらう―と思うし又、そうあつてほしい。

上の廊下

高田 邦 雄

(期 間) 一九六二年八月二十一日と二十六日
(メンバー) E 保母、横尾、高田

今まで我が部においても、上の廊下遊歩の企ては再三あ

つたが、いずれも運悪く失敗に終つていた。以下は、例年にならぬ好条件に恵まれて、ほぼ完全に近い廻行を成し得、念願を果たす事のできた三十七年夏の記録である。

(行動概要)

八月二十日(晴)夜、いつもながら満員の「ちくま」で出発。荷はぎりぎりに切りつめた為、サブザツクに少しはみ出る程度。キスリングとちがつて気楽な事の上なし。

八月二十一日(晴)大町より下扇沢行きバスに乗る。乗客は我々を含めてたつた五人と、なかなか快適。下扇沢よりカンカン照りの自動車道にあえぎながらも、大沢小屋をすぎ、針の木雪溪のゴルジユ手前で昼食。雪溪はゴルジユに少し残つてゐるだけ。

ジグザグの急登を終え、やつと着いた針の木峠も濃いガスに包まれて視界はきかず、早々に平へと下る。

最終の渡船に間に合わせようと思つたが、途中で無理とわかり南沢出合までとする。

今夜は晴れているので、河原で星を仰ぎゴロ寝としやれるのも又格別。

下扇沢(九・〇〇)針の木峠(一四・〇〇)南沢出合(一七・〇〇)

八月二十二日(快晴)初発の渡船で、一面の湖と化し

た黒部本流を対岸へと渡る。このあたりは全く変貌してしまつていて、あの広々とした河原も水の底である。

平の小屋で上流の様子をたづねると、水がついて河原を歩けない所は左岸に測量隊のトレースがあるとかで一安心する。

スクイ谷に出るまでに少し手間取つたが、後は、かすかな踏跡をたどつてラツシユを分け一時間ほどの苦闘の末やつと河原にでる。広い河原をのんびりと行き、大した徒渉もなく東沢出合の泊り場に着く。

どうやら今年は何年になく水量が少なそうだ。時刻は早いが、今日はここまでとし、岩魚釣りに出かける。十四余り釣れたので、夕食の蛋白質は十分。盛大なたき火でぬれ物を乾したき火で暖たまつた砂地を床にする。

南沢出合(五・〇〇)渡し場(五・四五)
平の小屋(七・三〇)東沢出合(一四・三〇)

八月二十三日(曇時々小雨)朝から雨が降つたり止んだり、半ばあきらめていたが、天気図をつけてみると良くなりそうなので、十一時出発。泊り場より右岸を少し行つて、すぐに徒渉。広い河原を徒渉をくり返しどんどんとばし、下の黒ビンガ手前の左岸の河原で昼食。やつと廊下に入ったという感じで、兩岸とも切りたつてゐる。第一の難関だが、今年水量も少なく、流れの位

置も以前と変つてゐるようだ。アンザイレインして腰までの徒渉で右岸に渡る。対岸は圧倒的な大岩壁、下の黒ピンガだ。流れが急角度に左に曲る所でつまつてしまつたので、意を決して、中州の浅そうな所めがけてとび込む。流される事もなく、腰近くの深さでうまくいった。再び広くなつた沢の中州をジヤラジヤラといき、第二の難関、口元のタル沢出合に達する。前方は陰惨な廊下で、従来の記録では、ほとんどのパーティーが大きく高まいているので、通過不可能かとも思つたが、とにかく偵察にいつてみると、トロになつてゐる部分は流れの中央に中州があり、深いがなんとか行けそうだとわかつた。

口元のタル沢は、落口は滝になつていないが少し入つてみると、廊下状の所に滝が続いており険悪そうである。出合より右岸の浅瀬を行き、問題のトロは胸まで没する深さだが、流れは非常にゆるく、あつかりと左岸に移る。そのまま左岸を行きつまつた所で悪いトラパス（ザイル使用）。あとは河原伝いに廊下沢出合（天気図をつけろ）をすぎ、一度右岸に移つたが、スゴ沢手前で再び渡り返した所を泊り場とする。

今日も岩魚は豊富。しかし天候は思わしくなく、夜にはにわか雨になつた。

出発（十一・〇〇）下の黒ピンガ入口（一二・一五）

五〇）口元のタル沢出合（一四・〇〇）三〇）廊下沢出合（一六・二〇）スゴ沢出合手前（一七・〇〇）

八月二十四日（曇後雨）いよいよ核心部とはりきる。

泊り場より五分程で右岸に移り広い河原を伝つてスゴ沢出合に達する。出合より二十分程で再び左岸へ。このあたりから前方高く上の黒ピンガが頭上を圧し、兩岸とも完全な廊下状を呈してきた。しばらくは壁をへつたり、浅瀬をいつたりしたが、ついに行き詰つてしまつた。

行手は六・七m程の間がトロになつていて、右岸にも移れないとあつて、仕方なくこのトロを泳ぎ渡る事にする。最初の二・三米は足が届いたが、後は背が立たず、エアーマットにすがつて泳ぐ。

水から上つて寒さにガタガタ震えながらしばらく行くと、今度はツルツルの壁にハーケンの連打してあるのが見える。打ち残された五本のハーケんに完全に頼りきつて、十米足らずの最悪のトラパスを終え、右手より小沢の入つてくる所でたき火をして暖をとる。

少し行くと再び二本のハーケンを見つけてトラパス。それより右岸に移り、三十分程で金作谷出合に達する。難関突破に一安心しゆつくり昼食をとる。

金作より上流は依然として廊下が続いているが、今までとちがつて兩岸の壁は、細かいがホールドも得られるよ

うになり、約三時間、右岸の水際より二・三米前後の高さの所をへつて行き（ハーケン二本使用）、冠氏による赤牛沢（これは誤つていて、もう一つ上流のが赤牛沢と思われる）の上方のトロは高ま。この頃より雨が激しくなつたが、別段悪い所もなく右岸を行き、立石の岩小屋に入る。なお、金作より上流の沢通しは人の通つた形跡は見当たらなかつた。

出発（七・四五）スゴ沢出合（八・〇〇）

金作谷出合（一二・一五）一三・三〇）

赤牛沢出合（一六・四五）立石（一八・〇五）

八月二十五日（晴）今日のはのんびりと出かける。ケルンに導かれて最初の廊下は高捲き。一時間足らずで河原におりる。あとは大体、左岸を通つて、岩魚を追つたりしてブラブラと藁師沢出合に着く。出合にはすでにテントが三張りほどあつたので、藁師沢右岸の新道により、中俣まで頑張る。台風接近とあつて風は強く、寒い泊り場である。

立石（一一・二〇）藁師沢出合（一五・一〇）

（太郎取付き一七・五〇）

八月二十六日（暴風雨）風は非常に強く出発時には雨も加わつた。いよいよ台風が来たなと思ひながら、強風にとばされそうになりながら太郎を越え、折立までくる

と、運よく車が登つてきており、便乗させてもらつて下山。最後までツイた山行であつた。

中俣（七・〇〇）太郎小屋（七・四〇）

折立（一〇・〇〇）

八月二十七日 帰阪

（あとがき）上廊下遊行といつたような沢歩きでは、その成功、不成功は運に左右される事が極めて大きい。

特に今回の沢歩きなども、全くツイていたといえる。

水量も例年になく少ないようだし、問題の箇所も割合楽に通過できた。そして天候も、まして悪いというほどでもなかつた。しかし、成功の最大の原因は軽装備ということだ。思い切つてテントも寝袋もけずるといふ風にして、なんとかサラザツクに詰めこんだ。おかげで東沢出合―立石間を二日という短期間で行けたのだし、もし大きい荷物だとしたら、おそらく金作出合から立石までは、高捲きするか、よほど長時間をかけねば通れなかつただろう。軽装備という点では色々批判もあるだろうが、今回の場合、結果的にはこれがよかつた。

シユラフカバーとエアーマットだけで、別に寒さも感じなかつたし、夏の沢歩きなら、これで十分だと思う。ただ、ツエルト一張では雨に降られた時、三人入るには小さすぎて困つた。それから、荷物が水びたしになるのを

防ぐ為に、細かく分けてポリエチレンの袋につめたが、これはうまくいった。最後に今回の装備を記しておく。

〔個人装備〕

シユラフカバー
 エアーマット
 地下足袋
 ワラジ 2足
 毛の肌着上下
 はんごう
 その他

〔共同装備〕

ツエルト 1
 ザイル(ナイロン40mm) 1
 補助ザイル(麻8mm) 20m
 ハンマー 1
 ハーゲン 10
 カラビナ 6
 ノコギリ 1
 メタ 6
 ラジオ
 天気図用紙

山小屋「梅ノ木寮」に関して

梅ノ木寮建設候補地決定の課程

浜田彰三

梅の木寮の建設に取りかゝつたのは、一九六一・四・一だからもう二年余になる。あの日は建設候補地の調査が目的で長野県庁を訪れたのだった。その後、一年半の間、強引と云われる迄の悪戦苦闘の末、一九六二・十一完成した。寮にとつては、今年は初めての夏山だ。仲間のヨーデルが広く梅池一帯にこだますることだろう。そのヨーデルを今瀬戸内海の一隅から想像したら、建設に従事した一人としてうれしい限りである。

これから、過去の建設経過をすこし述べて見たい。建設委員会の発足、寮の設計(間取り)

昨夏の私たちが行つた資材運搬(勤労奉仕)内部備品の問題、梅の木寮という命名、それから将来の管理方法等々も私なりに述べてみたい。しかし、今回はこれらを置くスペースもないから、山小屋特に学校寮はどういう地域に建設されるべきか、梅の木寮建設をふり返りながら

のべておこう。

(1) 梅の木寮建設候補地を上げる条件としてどう考えたか。

寮は、山岳部だけが使用するのでなく、広く阪大関係者一般に愛されねばならない点を念頭におかねばならなかった。又一般に山小屋はテント等よりも、より永久的な見地に立ち候補地を上げねばならない。先づ最大の条件はリスクのある地域は絶対に避けねばならないことである。その他派生する条件として次のようなことが上げられる。

(イ) 四季利用可能な地域でなければならぬ。そのため最終交通機関からのアプローチは無積雪期最大四と五時間である。又高度については海拔二〇〇〇米以下である。主稜線上は避けるべきである。

(ロ) 将来も愛される地域でなければならぬ。すなわち山に對する考え方は個人的好みがあつて様々であるが、広い視野に立つて建設地を考えなければならぬ。

(ハ) 寮を中心にした活動が多角的、多面的でなければならぬ。登山、スキーばかりでなくいわゆる「ワンダーホーゲル」の拠点でもなければならぬのである。

(ニ) 山小屋の水利条件は絶対的である。

雲の平は営利小屋建設にとつては、一見適しているが、

水利の面だけでも考えても避けるべきであつた。

(ホ) 最近の登山ブームに乗つた大衆登山者の多いしかも俗化した地域は学校寮建設には適當でない。

(ヘ) 建設計画を実行する場合、地元との協力的かいは大きく建設計画を実行する場合、地元の協力的かいは大きく建設を左右するから、地元の意見は十分尊重しなければならぬ。また、計画実行にあつては、地元のしつかりした世話人を見つけると何かにつけ好都合である。

私たちは猪股直衛氏にお願ひした。氏は山にかけてもベテランで、特に神の田圃にかけては神様である。

尚ついでながら建設準備期間中、建設本部は殆んど都合地にあるのが普通だが、現地との連絡方法は大きな問題となる。地元と建設者の間に誤解など生じては計画を水泡に帰する場合もある。

(ト) 国立公園法及び営林省内係の制約があるが、その建設の許可される地域でなければならぬ。ついではながら、最近やたらと山小屋が建設されるが、無計画な建設が行われているようだ。大自然を愛するものがその中に溶け込むような気持をもつて建設にたずさわらないと、かえつて自然の美をおちこわすことにもなり兼ねない。

(チ) 梅池―神の田圃―を建設地にしたのは前述の条件をほゞ充すからであるが、すこし洋しくその経過を述べて

おきたい。

寮建設は山岳部、スキー部、リンダーホール部が協力し建設のイニシヤチヲを握り計画を促進実行することであつた。それで、建設候補地は各部から提出されることになつていた。各部が上げた候補地はどんな地域であつたのだろうか、先づワンダーホール部は特に候補地を先づ上げなかつた。スキー部は青木湖附近、佐野坂一を上げた。地元の松沢佐野衛氏が非常に好意的で特にその地域を阪大に推せんして呉れたのだつた。

山岳部は最終的には、梅池を上げたのであるが、その前に太郎平、弥陀ヶ原、乗鞍、上高地、志賀高原、八方尾根、細部を調査、検討していた。

太郎平、弥陀ヶ原は冬期入山困難である。乗鞍は阪大医学部関係の小屋がすてにある。上高地、志賀高原は開発し尽くされた感がある。細野は、民家が集中しているため、学校寮建設地には適当でない。学校寮は、民家とある程度の距離を隔たなければ、その目的を失するおそれがある。八方尾根は水利条件が悪い。ということから結局一九六一・五・佐野坂と梅池のどちらを選ぶべきか問題となつた。そして、次の理由から佐野坂を適當でないとした。佐野坂附近はスキー場としての将来性は余り望めない。大糸線によつて、スキー場が横断されてい

るため、スケールが小さいからである。以上のことから、梅池が建設地に決定したのである。しかし梅池と云えども、問題はあつた。水利である。今も解決されていないが、近い将来、雷鳥沢から引水することによつて、完全に解決される。今さしあつては、早大神の田圃小屋を五分登つた源水を利用して、どうにか水はある、しかし完全な水利でない。早急に解決が望まれる。

(一九六三年五月十五日記す)

山の家について (設計面より)

紙野 桂 人 (構築科助手)
木原 秀 幸

この「山の家」建設にあつて、この場合、建設について海拔1700mの多雪地である明確な条件があつた。まず荷重として、雪と風、これは尾根の勾配、仕上、建物の配置と形態、そして骨組を決定づける。冬期の極寒、これは当然、凍上を予想されるから、基礎まわりの設計を決定する。又、資材運搬がすべて人力によるので、建物の重量の制限をうけた。

現場施工の難易度。気象条件が複雑であることから施工工程の複雑なものほど施工難になることから、当然程

式の材料より乾式の材料を選ぶ方が有利である。

これらが先ず設計当初に予想され一貫して守られる事から、結果の様な山小屋が姿を現わすことになつた。

以上の諸条件の内最も重大な要素がひとつある事に諸兄はお気づきであらうか。つまりこの工事の最大の難関であつた基礎まわりについての諸条件である。凍上と風圧による建物の浮上りが予想され、加えて敷地が傾斜している事から、基礎は深く出来る丈け重いのが良いけれども資材の運搬を考えれば出来るだけ軽くしたいと云う事である。本工事では幸にして、現場で石材を切出せたから良かつたけれども、そうでなければ大変な事になるところで、石が確かに出るという報せがあるまで、私は心配でならなかつた。敷地が急角度の傾斜を持つていたという事が、この工事に相当強く影響したとも云えよう。私はこの複雑な地形を一見して、正直にいつてこれは大変だと思つた。然し、大麥であらうがなからうが、果すべき事は果さねばならない。工事にこの程度の困難はつきものなのだから。

この敷地の優秀性は、アプローチの湿地帯に反して、土地が乾燥していることと、地盤が予想以上に強固であつた事と、その感動的な眺望と美しい梅の林にある。

これはすばらしいと私は思つた。実際、霧にぬれた梅の

立姿と、晴れ渡る時、鋭く展開する後立山連峰一連の見事な形態は圧倒的である。又私は完成直前の秋の笹の葉に夜来の雪がかすれている夏道から神の田圃の湿原に出てその秋の葉の色彩の乱舞に立つくした。これほどさえ渡つた無数の色どりを通つて、黙々と、小屋に近づく事自体が良き造形であると私は思う。

山小屋（梅の木寮）のこと

栗原 完治

目の前に雪におおわれた白馬三山不揃、八方尾根が朝に輝き、それらに続いて鹿島槍の吊尾根が絵を描いたようにくつきりと浮き出ている。又はるか向う雲海のかなたに北浜、甲斐駒などの南アルプス連峰がうつすらと見える。思えばこの夏はるばると信州の山奥へやつて来て何の因果か暑い夏の日に砂や砂利を背負い山小屋が出来るとは聞いていたもののどんな小屋が出来てもわからず、初めて見た山小屋（早稲田の小屋）をたつた一つのイメージにしてポツカに精を出したものであつた。

秋山合宿が終り畑中と二人で又小屋の備品を運びに再び神の田圃へとひきかえしそこでいよいよ山小屋の完成を

見た。開所式の日には初めて小屋にとまることになり、まず山小屋への一番乗りとなつた。ランブに火をつけ、ストーブに薪をほうり込み、ストーブを囲んでいろいろと山の話をし歌を歌いそれまでの不機嫌をすっかり忘れて実にいゝ氣持だつた。

夜もふけそろそろ寝る時間だ。二階は二段のベッドになつており上のベッドの西側は窓から後立山連峰が一番よくみることができる。空には無数の星がきらきらと輝いて月が小蓮華の上に静かに浮んでいる。この時こそ本当に山へきてよかつたなあとと思う、今度来るのは冬の合宿だそれまでこゝともしばらくおさらばだ。

冬山合宿に入る、尾根には雪がおゝいかぶさり、まわりの木々や山々は雪におゝわれて大変美しい、今年の冬山は異常とかで晴天が長く続き一年は小屋にとまつてスキーの練習となつた。僕はスキーで足を怪我したのでスキーは出来ないが毎日留守番をして山を見る。上の方ではアタックが成功したというしらせが入り今度は天狗原に登りテント生活の経験をする。

風がびゅうびゅうなり雪がまいあがり湿つばいテントと比較して小屋は暖かくのびのびとして落着いた氣持を起させる。山小屋での生活の良さそれは、その人個人がそこに住んで味うものである。

ピーク 29 峰遠征日誌

2月17日

尾藤、山本光、西川、兼清及び荷物
B.I.P. No. 「サーダナ号」で神戸出航

3月7日

サーダナ号ラングリン入港。

山本光、西川下船、飛行機にてカルカッタ着。

9日

隊長、住吉、山本信、小秋元、羽田発。

10日

隊長、住吉、山本信、小秋元、カルカッタ着。

11日

健竜丸カルカッタ入港。

14日

隊長、住吉、小秋元、カルカッタ発カトマンズ着。

サーダナ号カルカッタ入港。(尾藤、兼清)

21日

危険物を除いてサーダナ号積荷通関完了。

24日

危険物通関完了

尾藤、山本光、西川、山本信、兼清、カルカッタ出発。

27日

住吉カトマンズ発ボカラへ着く。

尾藤、山本光、西川、兼清、山本信、ノート着。

29日

隊長、小秋元カトマンズ発ボカラへ着く。

尾藤、パイロワからボカラへ着く。

30日 山本光、西川、兼清、ノータンワからパイロワへ移る。

4月1日 全荷物パイロワに到着。

2日 兼清パイロワよりボカラへ着く。(定期便)

山本信パイロワよりボカラへ着く。

(チャーター便)

荷物の半数ボカラ着。(チャーター便)

3日 山本光、西川パイロワよりボカラ着。

(チャーター便)

荷物残りの半数パイロワよりボカラ着(〃)

4日 住吉、西川、偵察隊としてボカラ出発シスワ

バザール泊り。

兼清、カトマンスからボカラへ戻る。

5日 住吉隊、チソコーラ泊り。

本隊、ボカラ停滞。

6日 本隊(隊長、山本光、山本信、小秋元)ボカラ

ラ出発アルブンビスワル泊り。

住吉隊、ナルマ部落下の河原泊り。

7日 兼清、ボカラ発シスワバザール泊り。

尾藤、ボカラ発ボカラから二つ目の部落泊り。

本隊、アルブンビスワル発、カルブタール泊

り。

8日 住吉隊、バランコーラ泊り。

兼清隊、カルブタール泊り。

本隊、カルブタール発ナルマ泊り。

尾藤隊

住吉隊、ムシコーラに入りツルベシ泊り。

9日 本隊、ナルマ発、クデイ泊り。

尾藤隊、兼清隊合流しナルマの下の河原に達

す。

住吉隊、タハレ泊り。

10日 本隊、クデイに留まる。

尾藤兼清隊、クデイに達し、本隊に合流。

住吉隊、チトラカルカ泊り。

11日 尾藤、兼清、クデイよりマルシヤンテイ左岸

の尾根へ偵察に出発。

山本光、山本信、ムシコーラへ出発ツルベシ

泊り。

尾藤山本両隊、途中で住吉隊からのポストラ

ンナーに出会い、通信文の内容により、偵察

地域をチブラに変更の為、クデイに引返す。

(尾藤隊のみ)

住吉隊、チトラカルの停滞。

4月12日

本隊、クデイ停留。

尾藤隊、クデイ発マルシヤンデイ左岸を通り
ボンダラ泊り。

山本隊、ツルバシ発ダハレ泊り。

住吉隊、チトラカルカからのキヤンプAにキ
ヤンプを進める。

本隊、クデイ停留。

尾藤隊、ダハレ発チトラカルカ泊り。

13日
(元日)
住吉隊、キヤンプAより、キヤンプB地点往
復。

本隊、クデイ停留。

14日
尾藤隊、タロチブラより西尾根を登り3300mに
達す。

山本隊、チトラカルカ発、キヤンプA泊り。

住吉隊、キヤンプA発、キヤンプB泊り。

本隊、クデイ停留。

15日
尾藤隊、3300mのキヤンプより4200m往復。

山本隊、キヤンプAより西尾根下部登路調査。

住吉隊、キヤンプBより雲上カルカに達す。

本隊、クデイ停留。

16日
尾藤隊、クデイの本隊に帰着。

4月17日

山本光、キヤンプAより慶応カルカ

往復。

山本信、キヤンプAより雲上カルカ

往復。

住吉隊、キヤンプを雲上カルカに進める。

本隊、クデイ停留。

住吉、西尾根住吉コルに達す。キヤ

ンプAに下る。

西川、キヤンプAより慶応カルカに

入る。

山本光、キヤンプAより慶応カルカに入る。

本隊、クデイよりマルシヤンデイとムシコー

ラの合流点附近へ移動。

18日
住吉、山本光、マルシヤンデイとムシコーラ

合流点の本隊へ帰還。

山本信、キヤンプAより雲上カルカのキヤン

プに入る。

19日
本隊、ムシコーラ入りを決定。

西川、住吉コルにて雪崩観測。

山本信、雲上カルカの地形測量。

20日
本隊、ムシコーラ出会いのキヤンプ地より移
動を再開、ツルバシ泊り。

21日 本隊、タハリ泊り。

22日 本隊、チトラカルカ泊り。

23日 本隊、雲上カルカに達す。

27日 住吉、西川、住吉コルを越えてツラ半氷河側に300m下つた地点へテントを進める。

28日 住吉、西川、ツラ半氷河のBCサイト往復。

29日 兼清、山本信、住吉コルを越えて300m下つた地点のキャンプに入る。

住吉、西川、BCサイトにキャンプを進める。

30日 篠田、小秋元、雲上カルカよりBCに入る。

尾藤、山本光、雲上カルカより住吉コルを越えて300m下つた地点のキャンプに入る。

尾藤、山本光、BCに入る。

5月1日 隊長全員に訓辞。

ポカラを出発して丁度一ヶ月、諸君の協力によつてこのBCを建設出来た事を感謝する。

BCを建設してからは、登頂という事であるがP29のルートは、このアイスフォールを通過する以外にはない。しかし、このアイスフォールは非常に困難で危険なことは、諸君の知る通りである。従つて、今の季節に於いては、このアイスフォールの通過は断念せざるを得

5月8日

初めてツラ半氷河を下り、氷河湖下の台地に達す。

9日

尾藤、山本光、及び西川、山本信、両隊、BCを出て氷河湖下へキャンプを進める。

11日

尾藤隊、マルシヤンデイ治いの部落ナジエに達す。(RC1)

12日

住吉、兼清、BCを出て、氷河湖下のキャンプに入る。

13日

尾藤隊、ナジエを発ち、ドナコーラのゴルジユ迄戻る。(RC2)

住吉RC1よりRC2往復。

兼清RC1よりRC2に入る。

西川、山本信、RC2よりRC3への登路工作。

14日

住吉RC1よりBCに戻る。
23時過ぎ篠田隊長胃潰瘍による吐血。

尾藤隊、ゴルジュより氷河湖下のキャンプに
戻る。

5月15日

尾藤、山本光、BCに戻る。

西川、兼清、RC₃より に入る。

16日

西川、兼清、RC₃より への登路工作。

17日

西川、兼清、RC₃を撤収し、 に入る。

山本信、RC₂より RC₃に上り、西川、兼清と共に
下る。

18日

西川、RC₃よりBCに戻る。

山本光、BCより西尾根キャンプに上る。

カトマンズ放送、市大隊のランタンリルンで
の遭難を伝える。

19日

住吉、山本光、西尾根ピークに登り、BCに戻
る。

兼清、山本信、6700
峰偵察。

アンタマン諸島にモンスーン発生を報ず。

20日

住吉、西川、市大隊応援の為、カトマンズへ
向けてBCを出発RC₁泊り。

尾藤、小秋元、西尾根のキャンプへ入る。

兼清、山本信、6700
峰偵察。

21日

尾藤、小秋元、BCへ戻る。

山本光、BCより住吉コル往復（フィックス撤

収）。

兼清、山本信、6700
峰偵察。

住吉、西川、RC₁発ナジエ泊り。

22日

兼清、山本信、BCへ戻る。

住吉、西川、キャンプをナジエよりタラバに
移す。

23日

篠田、尾藤、BCより樺高地へ下る。

住吉、西川、タラバニ発ジャガート泊り。

24日

尾藤、樺高地よりBC往復。

山本光、小秋元、BCより樺高地へ下る。

住吉、西川、ジャガート発ブルブレ泊り。

5月25日

尾藤、樺高地よりBC往復。

山本光、道路工作のため、樺高地を下る。

住吉、西川、ブルブレ発ナルマ下の河原。

アジバ、バサンテンバ、クトリーの手配の
ためナジエへ下る。

26日

尾藤、樺高地左岸の尾根を、4200
迄登り引返す。

兼清、山本信、BCより樺高地へ下る。

27日

尾藤、山本信、兼清、樺高地よりBC往復。

住吉、西川、ボカラ着。

28日

住吉、西川、カトマンズ着。

29日

山本光、道路工作終えて樺高地に戻る。

30日 本隊、樺高地を撤収してキヤラパンに移る。

ドナコーラを左岸へ渡る橋泊り。

31日 本隊、ナジエ泊り。

6月2日 住吉隊のシエルバ4人、ナジエへ戻り、本隊

に合流。

3日 本隊、ナジエ発、タルト泊り。

4日 本隊、タルト発サタレ泊り。

(マルシヤンデイにかかる橋が流失していたため、これ以上進めず。)

5日 本隊、サタレ発ジヤガート泊り。

(午后出発)

6日 本隊、ジヤガート発ゴブテ泊り。

7日 本隊、ゴブテ発クデイ泊り。

8日 本隊、クデイ発ミデイコーラ畔泊り。

9日 本隊、ミデイコーラ畔発、ルデイコーラ畔泊り。

10日 本隊ハルデイコーラ畔発、マデイコーラ畔泊り。

住吉、西川、カトマンズよりボカラ着。

6月11日 本隊、マデイコーラ畔発、ボカラ泊り。

17日 篠田、尾藤、小秋元、ボカラよりカトマンズ

へ飛ぶ。

18日 山本信、荷物の一部と共にボカラ発カトマンズ

着。

19日 西川、兼清、ボカラ発カトマンズ着。

21日 住吉、山本信、ボカラよりカトマンズ着。

22日 篠田、尾藤、小秋元、カトマンズよりカルカ

ッタへ飛ぶ。

24日 篠田、尾藤、小秋元、カルカツタよりホンコ

ンへ飛ぶ。

兼清、山本信、カトマンズ発カルカツタ着。

25日 篠田、尾藤、小秋元、ホンコンより羽田へ飛

ぶ。

26日 篠田、尾藤、小秋元、羽田着。

27日 住吉、山本光、西川、カトマンズ発カルカッ

タ着。

7月2日 住吉、山本光、西川、山本信、カルカツタ発

(サンゴラ号)

28日 住吉、山本光、西川、山本信、横浜着。

(西川誕生日)

大阪大学山岳会 収支決算表
ヒマラヤ登山隊

(I) 収入の部

大阪大学山岳会

1. 阪大山岳会々員 拠出金		1,845,000円
	A ヒマラヤ登山準備基金 (1口1,000円・計24件)	24,000円
	B 一般会員拠出金 (1口10,000円・計55件)	501,000円
	C 隊員拠出金 (計7件)	1,320,000円
2. ヒマラヤ登山後援 会関係拠出金	(東京放送・毎日新聞他計45件)	5,370,000円
3. 一般募金	(日本山岳会関西支部・阪大体育会他計19件)	452,500円
4. 雑収入	(銀行利息その他)	9,374円
合計		7,676,874円

(II) 支出の部

1. 外貨裏付円払旅費		1,235,572円
2. 外貨購入費	(インドルピー)	2,845,941円
	a. 荷物輸送費	5,112.44 RS
	b. 交通費	7,190.78 "
	c. 滞在費	5,849.76 "
	d. 人件費	13,537.71 "
	e. 通信費	1,473.67 "
	f. キヤラバン費	1,342.75 "
	g. 雑費	3,024.94 "
	計RS	37,532.05
3. 円払経費		3,195,361円
	a. 装備費	1,661,249円
	b. 食糧費	229,049 "
	c. 貨物輸送費	133,371 "
	d. 医療・酸素費	65,950 "
	e. 梱包費	178,370 "
	f. 観測通信費	56,098 "
	g. 写真材料費	80,660 "
	h. 保険料	141,900 "
	i. 事務費(募金掛払を含む)	648,717 "
4. 次期計画積立金		400,000円
合計		7,676,874円

二、四〇〇米以上では、一律の登行で登攀中の脈搏の増加が見られたが、三、六五〇米に達する迄、過度呼吸に気付かなかつた者もあつた。三、〇〇〇米より低い所で、睡眠中の人達にチエーンストークス呼吸が認められた。ペースキヤムフ建設後最初の二十四時間以内に頭痛を訴える者は珍しくなく、高度の影響による徴候も見られたが、これらは間もなく消失した。

高度六、一〇〇米迄

高度五、五〇〇米に至る迄に、ヒマラヤ初参加の人達の大半は、激しい呼吸困難、全身倦怠、疲労に悩まされ、登攀に非常な努力を要した。或る者は頭痛、食欲不振、嘔気、嘔吐と言つた急性症状に悩んだ。この高度で殆んど影響をうけなかつたエバンス(ヒマラヤ経験者)の忠告で、バンド(ヒマラヤ初参加)は呼吸数を増すことによつて歩行が楽になることを見付けた。ヒマラヤ経験者は初めての人よりも冒され難い。例えば、ロウは一九五三年の時には五、八〇〇米迄は殆んど高山病症状に見舞われなかつたが、前年(彼の二回目(ヒマラヤ行)には、同じ高度に達した日に著明な頭痛、食欲不振、疲労感に悩まされている。ヒマラヤのベテランであるシフトン(一九五一、五二年の遠征隊長)は六、一〇〇米以下の高度では全く苦痛を感じていない。

しかしチヨ・オウ遠征の際、本隊が五、二〇〇米の高度に到着後数日たつて一行に後から加わつたピエウは、平素隊員達が食事時やキヤムフで示す陽気で無邪気な振舞いや活発さが見られなくなつてゐるのに驚いてゐる。シエルパは全く高度の影響をうけず、しかも毎日二十四時間の荷上げをしても疲れた様子が見られなかつた。チヨ・オウ遠征のこの時期には、呼吸器疾患と下痢が隊の行動を弱め、ある時には隊員の半数が病人であつた。

チヨ・オウでの次の四週間に得た印象では、ヨートルツパ人の体力は、機械的な動作の点でシエルパより劣つてゐるという感じをうけた。しかし隊員達はそれを否定している。食欲はなくなり、二十六日間に平均四・九匁体重が減つた。隊員の或る者は罐詰の鮭、パイナップルの様な食物を望み、彼らの嫌いな食物は食べなかつた。他方、甘い物に対する食欲は増進し、砂糖の消費量は一一人当り、アラローチでは一七〇瓦であつたのが三四〇瓦となり倍に増加してゐる。彼らは又多量の飲物を摂り、飲料は平均一日三―四立であつた。遠征の後半に低地で休養をとつて后、隊員の体力は改善され、食欲は戻り、現地の食料の摂取量も増えた。

翌年のエベレストでは隊員の一般健康状態は一層良かつた。高所順化期間に呼吸器疾患と下痢が起つたが、高

度による症状は見られなかった。五、五〇〇米のペースキヤムフでは倦怠と食欲不振が見られたが、これらは二週間で消失し、その後は健康であつた。クーンフ氷河のアイス・フォールで撮つた映画では、隊員達は正確にステツプを切り、正常のリズムとバランスで登攀している。しかし低い所よりも努力が必要で耐久力も低下していた。五、五〇〇米以上の高度では、ある者は休息時も作業時も、四六時中過度呼吸をしており、六回位呼吸した後約一〇秒間無呼吸となる程度のシェーンストークス呼吸が休息中や睡眠中の人々に見られた。

ペースキヤムフ（五、五〇〇米）での食後の睡眠時に観察された記録によると、ヒラリーは一〇秒間の無呼吸をおいて三秒続く呼吸を二回、ロウは一〇秒間をおいて三回呼吸するという型であつた。

作業中は非常に高い換気率が維持された。一九五二年の測定値では、六、一〇〇米に於いて普通のペースで登行する時の換気量は毎分七四―一二三立であつた。呼吸は、持続的な登攀では、毎分四〇―五〇回、激動時では六〇回迄で、過度呼吸をつゞける為に、肋骨下縁に軽い鈍痛を訴える者もいた。六、一〇〇米に部分的に順応した五人の安静時脈搏数は、八〇から八八迄であつた。

（これらの人々の平地での脈搏数は五〇―七〇である）

血圧は、一部の人々に見られた拡張期圧上昇を除いては、一般に影響されていない。高度六、二〇〇米での持続的登攀では脈搏は一三〇―一四〇であつた。

五、五〇〇米に約二週間滞在後、頭を使う事柄に気乗りがしなれないと言つた事はなくなり、平地でやるよりは時間も努力も一層かゝるけれども、複雑な頭脳労働を正確にやれる様になつた。この高度では睡眠は長くとる必要があり、初めの時期には不安と発作性呼吸困難で睡眠が妨げられたが、大抵一〇―一二時間眠つた。

六、二五〇米―六、七〇〇米（ウエスタン・クーム）ウエスタン・クームでは高度に対する抵抗力に個人差のある事が明瞭に現われた。隊員達は日によつて、或は一日の内の時間によつて、作業能力と気分に着しいむらがあるのに気付いた。

食事を摂らないで長い登攀をすると非常に疲労したが、これは砂糖を食べるとすぐに回復した。同様の事がアルプスでも起るが、砂糖の効果はヒマラヤの方が著明であつた。精神活動には著明な減退は見られなかつた。ウエストマコツトは、ある午后にタイム紙のクロスワード・パズルの三分の二を解いたと言つている。ピユウは一日六時間ガス分析を行つたが、後で照合してみると殆んど計算に誤りはなかつた。しかしながら健忘症の為に、観

察や図を直ちに記録しておく様に注意を払う必要があつた。酸素吸入は五、五〇〇米から六、一〇〇米まででは順化された人には大した効果はなく、休息時に呼吸が僅かに減少し、登攀時におしじつちが上る程度であつたが、登攀中の換気は二〇と五〇パーセント低下した。又耐久力は非常に増し、活動力も増加した。

過去の遠征隊の食物摂取量は平均一日三、〇〇〇カロリー或はそれ以下であつたが、今回は約三、九〇〇カロリーを摂り、新鮮な肉、卵、薯で作つたヨーロツパ風の混合糧食を使用した。又高度に伴う沸騰点の低下（例えば六、一〇〇米では摂氏八〇度）により料理に燃料や時間を多く食う様な高度でも、高压釜や特殊なストーブでうまくものを作る事が出来た。ウエスタン・クリーム、又はそれ以上の高度に過ごした四週間の平均体重減少は一・八磅であつたが、ヒングストーン（一九二五年）や、ラットレッヅジ（一九三四年）の隊では、この高度でひどくやせ衰えていた。

六、八五〇米―七、九五〇米

（ローツエ・フエイス）

この高度では疲労、倦怠、息切れがひどく、酸素吸入の効果が著明であつた。高度に対する抵抗力の個人差は、氷瀑やウエスタン・クリームに於けるよりも一層明瞭で、

シエルパのアン・ニマと共に、六、七〇〇米から七、六五〇米の間で九日間行動したロウは、彼に高所衰退が起り始めたのは、この期間の終りになつてからであつたと述べている。これとは反対に二人のヒマラヤ未経験者は消耗し、休養にベース・キヤムプ（五、五〇〇米）に降らねばならなかつた。

この高度では、精神活動はかなり鈍くなつており、酸素を吸うと足許に注意が出来、又景色を楽しんだりする余裕が出来た。その時には気付かなかつたけれども、記録映画では隊員達のステツプ・カツティングがおそく、しかも弱いという印象が現われている。手慣れた仕事はうまくこなす事が出来るが、熟考を要したり、自主的にしたりする仕事は困難であつた。例えばウオードは第七キヤムプ（七、三五〇米）で肺胞内空気の一部分を試料に採取するという仕事を支障なくやつた。これは複雑な操作であつたけれども、彼のよく手なれた仕事であつた。しかしプリムスのストーブを修理する時には、それが簡単な故障であるのに、大変手間取つた。

七、九五〇米（サウス・コル）

こゝで述べる資料は登頂直後に第四キヤムプやベースキヤムプで記録されたものである。スイス山岳財団は登頂当時に書かれた報告と、本国帰還後に隊員達より語ら

れたその後の物語りとの間に食い違いが起るかも知れない事を注意してくれたが、サウス・コルでは思考や行動が緩慢となり、感情の起伏が少くなるといつた精神、身体両面に亘る活動力の減退が認められた。この例として、ボーディロンは、そこより五〇〇米低い処であれば二〇分で出来た閉鎖式酸素吸入器の修理を、ここでは一時間半もかかったと述べている。思考や行動を始めようとすると非常な努力がいつたが、しかし一度やり出すと最後まで続ける事が出来た。攻画隊をサポートするといった一連の予定された行動は注意深く行われたが、周囲の状況に適合した行動を行なおうとする能力は著明に低下していた様に思われた。こうした傾向は第七キヤムブ（七、三五〇米）に於いても明らかに見られた。

☆

洞察力と判断力の低下は、五月二十七日朝のハントの状態に関するヒラリーの次に述べる物語りによつて裏書きされる。

ハントはその朝迄サウス・コルに三日間滞在し、そこに居合せた者の意見では、明らかに最早それ以上そこに留つて居れる能力はなかつた。しかしハントは攻画隊を指揮する為に止らうと決心していた為に、丁度第七キヤムブから登つて来た元氣な口ウに降りる事を

すゝめられても仲々恋じなかつた。この脈のハントの状態は酪酊様であつたと、ヒラリーと口ウは書いており、第七キヤムブに下る為に、エバンス、ボーディロン、アンニマとアンザイレンシ、よろよろ歩いていても拘らず、彼自身はパーテイを安全に下降させるのに自分が最責任者だと思つていた。この時の状態について、ハントの本には、疲労とだるさを挙げて自分の状態が危機に立つていたとは自覚していない様に思われた。

サウス・コル或はもう少し低い所では、思考力の鈍つている事が酸素を使つて見るとよく判る。隊員達は彼らが酸素を吸つた時に如何に周囲に対して興味がわき、登攀の面白さを感じる様になるかを口を揃えて述べている。テンチンを除く四人のシエルパの内、一人だけがサウス・コル以上の荷上げに適し、他の者は弱つて出発出来ないが、或は嘔吐でへばつてしまつた。この理由の一つは、睡眠用酸素を使用しなかつた事にある。ヨーロッパ人の内では、ボーディロンが最悪の状態であつた。エバンスと二人でエベレスト南峰（八、七四八米）から帰つて来た晩彼は死んでしまうのではないかと思つたと述べている。翌朝サウスコルの台地を登つて降りる時に、彼は疲労と足の感覚消失を訴えたが、しかし酸素の使用に

より、無事第七キヤムヲへ掃投する事が出来た。

酸素吸入なしに良く眠れたノイスを除いて、他のヨーロッパ人達は毎晩睡眠のために五―六時間酸素を用いた。酸素の使用により暖かく感じ、よく眠れ、充分疲労から回復出来た。登攀中は、酸素は体力を増し呼吸を楽にする他に著しく登行速度を速めた。エバンスとポ―ディロンは閉鎖式吸入器を用い、七、九五〇米から八、四〇〇米へ、毎時二八〇米の速さで、十九疋の荷物を背負い、ルートを見付けながら登った。これはその条件を考慮すると、アルプスでの標準の行動であると思われ、酸素が順化された人には大して有効でないという説に予備している。ヒラリーとテンジンは、第二次の攻囲で、同じルートを開放式吸入器を用い、毎分四立の酸素を吸い、サポート隊によりラツセルされた道を一時間に一九〇米の割合で登っている。登行速度に及ぼす影響では、開放式は閉鎖式よりも悪かった。

酸素吸入を中止することによる悪い影響は（数分間）呼吸を整えてから呼吸器を外している限りでは見られなかった。登攀中、酸素の供給が突然止まると、呼吸困難、脱力、眩暈が現われ、二人に尿失禁が認められた。急に装置が故障すると意識消失が起る事は以前より考えられていた。徐々に起る故障は気付かずに過しがちであり、

クライマーは吸入器が故障している事を知らずに、疲労の増加や息切れによつて休むのであつた。

八、五〇〇米以上

エベレストでの最終キヤムヲは約八、五〇〇米におかれた。ヒラリーとテンジンは台地を平らにしてテントを張るのに午後二時から五時迄かゝつた。彼らは数分毎に休みながら酸素なしで着実に働いた。その夜は四時間酸素を用い、翌日（五月二十九日）は一分間三立の酸素を用いながら頂上に登つた。頂上ではヒラリーは酸素吸入器をはずし、十分間写真を撮つた。彼は凍結の場合にはカメラのシャッター速度を速くするという事も覚えていたし、その辺りを歩きまわつたが苦しくはなかつた。八分後疲労と酩酊感を感じ再び酸素吸入器をつけた。降りでは酸素はサウス・コルに着いた途端になくなつた。彼らは登りがより困難であつたと云う事を除いては殆んどその差を認めなかつた。しかしロウは、ヒラリー達の状態は他の隊の帰つて来た時よりも可成り良かったけれども、コルに到着した時の彼らは全く、くたくたになつて歩いていたと報告している。

医学的検査

ロイツエ・フエイイス、サウス・コル、或はそれ以上からウエスタン・クームへ帰つた時、ヨーロッパ人もシエ

ルバ達も医学的検査をうけた。

五月一六日、第三キヤムラ（六、二五〇米）

ウエストマコットの第五キヤムラ（六、八五〇米）に四泊し、且つ前夜第四キヤムラ（六、四五〇米）に泊り、第三キヤムラ（六、二五〇米）へ帰つた時検査をうけた。これは彼がヒマラヤで最初に経験した高度であつた。

彼はローツエ・フエイスで行動し、深い軟雪の中での登りに非常に疲れていた。第三キヤムラに着いた時、彼の足どりはよるめき、明らかに疲労困憊の状態であつた。次の表は彼の脈搏数と血圧である。

時刻	血圧 (mmHg)	心搏数
12・00	85	66
13・25	86/66	88
13・48	86/66	88

20分間 4分の酸素吸入

手背静脈充満し、上腕での脈は簡単に触れ末梢血管の拡張が見られる。

手、冷い

之は極度の疲労に一致した低血圧状態を示している。ウエストマコットの血圧は正常値20/80であつた。

五月二十五日、第四キヤムラ（六、四五〇米）

その日のうちに第七キヤムラからサウス・コルへ酸素

なしに八時間かゝつて十八疔の荷上げをし、更にコルから第四キヤムラへ帰つた三人のシエルバが到着5分後に検査された。彼らはそれ以前の五月二十二日にサウス・コルに登つて居り、非常に元氣そうに見えた。疲れてはいたが消耗はしていなかつたのである。次の表はその記録である。

シエルバ名	年令	心尖搏動	機動脈に おける脈搏	心搏数	血圧
トブキー	18	乳線 上	不規則 緊張良	100 / 104	100 / 70
ダワ・トシヨウ	49	変位していない	規則正 良	112	120 / 84
アン・ノルブ	38	変位していない	規則正 良	100	120 / 86

五月二十七日 第四キヤムラ（六、四五〇米）

四人のシエルバがサウス・コル（七、八六〇米）から帰つた時検査をうけた。ダ・ナムギヤルだけが明らかに疲労していた。彼はサウス・コルで二晩過し、前の晩は第七キヤムラに泊つていた。アヌルウとダ・テンシンは第七キヤムラからサウス・コルへ荷上げし、その日の内に帰つて来ている。

次の表はその記録である。

シエルバ名	年齢	心尖搏動	橈骨動脈に おける脈搏	心搏数	血圧 (mmHg)
バル		触れず	規則正	96	100/74
ダ・ナムギヤル	35	触れず	触れず	108	86/70
ダ・テンジン	40	変位なし	規則正	100	140/100
アヌルウ	27		規則正	100	110/80

唯一人消耗していたダ・ナムギヤルは五月十六日にウエ
ストマコツトに見られたと同様の低血圧状態を示した。

五月二十八日、第四キヤムウ(六、四五〇米)

エバンスとボーディロンより成る第一次攻画隊が検査
された。二人共マスクと眼鏡との間に、三角形の凍傷斑
があり、エバンスには軽い結膜炎と刺戟性の咳嗽があつ
た。彼は少しチアノーゼがあり安静時脈搏数は八〇〜九
〇、他に異常な所見は見られなかつた。

ボーディロンも又少しチアノーゼがあり、安静時脈搏
数は一一〇であつた。ボーディロンやエバンスと行を共
にしたハントは非常に疲れている様に見える、又チアノー

ゼと刺戟性の咳が見られた。彼の安静時脈搏数は一〇〇
であつた。

五月三〇日 第四キヤムウ(六、四五〇米)

第二次攻画隊のヒラリーとテンジンは、登頂成功の翌
日サウス・コルから第四キヤムウに到着后一時間で検査
をうけた。二人共非常に疲れてはいたが消耗してはいな
かつた。ヒラリーはテンジンよりも疲れている様であつ
た。検査をうけた人では、誰れにも心臓の拡大、頸静脈
圧の上昇や肺うつ血の徴候は見られなかつた。之らの人
々の記録は次の如くである。

攻面前と攻面後の体重の変化

五月十四日 五月三十日

血色数量 (2/100 ml)

人名	日時	高度	機骨動脈に おける脈搏	心搏数	血圧 (mmHg)
ヒラリ	4月6日	760	触れず	64	100/58
ヒラリ	5月30日	6450	触れず	88	80/60
ヒラリ	6月2日	5500	触れず	80	106/84
ロウ	4月6日	760	触れず	66	126/74
ロウ	5月30日	6450	弱不規則	104	115/90
ロウ	6月2日	5500	弱不規則	82	112/82
テンシン	5月30日	6400	良規則正	81	140/86
ヒラリ	五月十四日	六七五			
ヒラリ	五月三十日	六六六			
テンシン	五月十四日	六五七			
テンシン	五月三十日	六二五			
ロウ	五月十四日	六四八			
ロウ	五月三十日	六六六			
グレゴリイ	五月十四日	五八五			
グレゴリイ	五月三十日	五七六			
	攻面前				
	攻面後				

登頂後 五月三十日 第四キヤムフへ帰つた時の尿中のクロールの量

(*mg. per liter*) (*g. per liter*)

ヒラリ 一八〇四 六四〇

テンシン 一四八三 五二六

ヒラリからの尿の試料は到着後2時間、午后5時に得られた。

冷却により磷酸塩の青白い澱粉物が見られたが、アルブミンはなくpHは5.5と5.8であつた。

テンシンは8時迄試料を出す事が出来なかつた。

人人々は非常な高処から降りて来たにしては驚く程良好であつた。ヒングストン(一九二九年)に報告した様な心臓の拡大は認められず、体重と尿中の塩化物の量から推測して脱水の徴候はなかつた。ヒラリとテンシンの血色素量は隊員の平均である二〇%よりも少く、両者共に一週間後のティアンボチエ(三九五〇米)では増加を示していた。

ダ・ナムギヤル、ウエストマコツト、及びヒラリに見られた低血圧状態は興味深い。前二者は明らかに消耗して居り、ヒラリは非常に疲れてはいたが消耗はしてゐなかつた。疲は第四キヤムフに到着して間もなく、オムレツ二個(卵四個)と鮭罐(二二四瓦)の三分の一を

食べ、二時間後には更にポテト、コンビーフ、ビスケツトを食べた。消耗していたならこの様に食べる事は出来なかつただろう。しかしながら血圧を測定した際、彼の上流の脈は触れるのがむづかしく、手首では脈は触れず、手は冷たかつた。一方同じ条件の下にあつたロウとテンジンは温い手をして居り、静脈は充分に満たされ、脈は簡単に触れる事が出来た。(テント内の温度は摂氏二〇度)だからヒラリの症状は末梢循環不全の徴候であつたのである。この状態は脱水によつては説明され得ない、何故なら約二疋の体重減少は普通一日の行動分の登攀者に見られる程度であり、又尿の塩化物の量は正常であるからである。ウエストマコツトの場合には酸素吸入が試みられた。一分間四立の酸素吸入を二十分つゞけると、彼の手は温くなり、静脈は充分満たされたが、血圧や脈搏数には変化はなかつた。彼はいくらか楽になつたと思つたが、少し良くなつただけであつた。酸素吸入で消耗より回復させる為には短時間では余り効果はなく、一晩中八時間以上も吸入すると著しい効果を示した。

(本論又は *Tanager, Dec. 1, 1956* に掲載されたものであるが、昨年ピュー博士より論文の寄贈と翻訳出版の承諾を得たので順次掲載してゆく予定です)

会 員 名 簿

昭和廿八年七月一日現在

会 長		〔医学部〕	
篠田 軍治	明 32	豐中市麻田九七(豊中3-1-265)	阪大工学部精密工学科教授
和田 豊種	昭 3	大阪市北区南森町五二(351-1412)	阪大医学部名誉教授
小浜 基次	# 4	八尾市佐堂一四七ノ四四	阪大医学部第二解剖教授
堀見 次郎	# 5	箕面市箕面町桜ヶ丘九九(桜井四一)	服部診療所長
水野 姓太郎	# 5	神戸市灘区御影町群家御影住宅三〇三号	阪大医学部教授
國里 勇吉	# 9	茨木市仲之町	開業
小林 義郎	# 10	大阪市西淀川区野里町一二九五(淀川一三〇六)	神戸市赤十字病院長
野口 晋一	# 14	京都市左京区下鴨宮川町五四(77-17903)	船員保険病院長
坂谷 信次	# 14	姫路市の形町	開業
河原 信二	# 14	神戸市東灘区住吉町垣内二二六(御影二二〇六)	開業
新谷 五郎	# 14	豊中市桜塚元田一丁目一四八(豊中三〇七〇)	大阪府国立病院外科医長
小沢 淳二	# 14	堺市浜寺公園町	泉佐野病院長
酒井 英之	# 15	池田市城南町一丁目五四	日本生命本社査定課
滝井 一郎	# 16	大阪市南区千年町一四(751-18571)	阪大病院婦人科
恩地 裕	# 18	西宮市今津二葉町三九(2-18740)	奈良医大整形外科教授

笠田片穴林坪岩小東尾住家松德吉渡伊大友	松村山戸林井永沢東藤吉田久永川辺藤久保田	卓俊微元伸圭之助剛夫雍二也尋博司範治夫己洋	# # # # # # # # # # # # # # # # #	38 38 32 32 31 31 30 30 30 30 29 28 26 25 25 25 23 23	北海道雨竜郡沼田町朝浅磯曙町 泉佐野市笠松町三九六八 尼崎市森笠字の池二七八ノ三(481一九五六) 箕面市箕面町平尾七三〇(箕面五七) 布施市長田一三五五 大阪市東淀川区西淡路町一(371一八九八) 大阪市東淀川区東之町三ノ一〇(301一三六三) 伊丹市伊丹三五八(伊丹二〇二二) 西宮市羽衣町九七(31〇三一六) 松坂市西町二七〇中央病院社宅 大阪市阿倍野区阪南町中六丁目一六 神戸市東灘区御影字平野一五八四 小沢凱夫棟方(父) 宝塚市南口武庫山六四 豊中市態野田旭ヶ丘公団住宅二二号の五〇八 神戸市灘区森後町一ノ二 西宮市松蔭荘二五(51〇八七三) 大阪市北区曾根崎上二ノ二六(341一三七四一) 西宮市甲子園口二ノ三四七(41〇三四六)	古川鉦業診療所 帝産厚生病院泉佐野診療所 開業 阪大病院第二外科 阪大病院第二外科 徳永病院 朝日新聞社診療所 近畿中央病院 川崎病院(神戸51二一三五) 松坂中央病院(松坂三三1三二四) 阪大微研天野研 阪大病院第二外科 又根山病院外科 阪大武田外科 国立呉病院内科
---------------------	----------------------	-----------------------	-----------------------------------	---	--	--

森村弘子	昭38	東京都三鷹市上速雀六八三	東京医科歯科大学
三田紀行	# 38	芦屋市南宮町二〇ノ二 多田忠子方	
〔理学部〕			
水野健次郎	化13	芦屋市三条町六三	美津濃副社長
山口省太郎	物13	東京都北多摩郡田無町	東大原子核研究所
関集三	化13	芦屋市彰町七三	阪大理学部化学科教授
国府雄二郎	物15	芦屋市三条南町九三	大阪市大理工学部
新保正樹	化15	池田市畑町一六五五一二	
塩野良之助	# 20	神戸市東灘区住吉町新堂四五(在米)	
高倉達雄	物21	東京都三鷹市大沢一〇五九 東京天文台官舎	
塩野喜久夫	化23	神戸市東灘区住吉町新堂一四三(御影一二六九)	
榎山俊樹	# 23	西宮市甲陽園本庄町八四ノ二	大阪ガス本社
大島輝夫	教24	西宮市大井手町三〇	住友化学大阪製作所樹脂課
加藤幹太	生27	枚方市香里ヶ丘一丁目二二香里住宅E一〇号四〇四	(46115401)
細見一仁	生28	長野県須坂市北横町小串鉦山	京大理学部生物学教室木庄研究室
塚谷弘	化28	大阪市西成区玉出本通一ノ一〇	小串鉦山診療所
大村一生	物29	豊中市刀根山三丁目七〇	椿本チエーン製作所設計課
山本進一郎	物31	川崎市百合ヶ丘公園住宅三五ノ三〇七	日本電気玉川工場
関本靖祐	物31	北九州市若松区中大出町中畑 日立中畑ハウス43号	日立金屬

高木俊夫	化31	堺市上之芝町四丁目五二八	
玉井康雄	化35	神奈川県南足柄町飯沢四三五	富士フィルム
錦田晃一	＃35	芦屋市岩園町三一九〇一二	
五百蔵弘典	化37	東京都練馬区羽沢町一ノ五	日本合成ゴム
西垣圭二	数38	西宮市段上大同生命独身寮	大同生命
〔工学部〕			
川戸俊治	機5	豊中市本町二丁目八三(豊中五八九一)	大阪ボイラー製作所事務取締役 (471-12451)
山口次郎	電7	寝屋川市大字大利一三七	阪大工学部電子工学科教授
仙波正郎	船7	岐阜市加納朝日町三丁目五	仙波能率事務所
村上竜郎	機9	堺市三国丘町七丁目一九八ノ八(堺2-18156)	明光精機製作所代表
高畠幸男	化9	姫路市網干区新在家九四〇(網干五五七)	大セル網干工場長
齊藤俊貞	治9	尼崎市東園田町三ノ二八ノ三	大阪鍛造株式会社 栗田工業株式会社高槻市大字 庄所一五二(51-18068)
手塚正夫	機9	山口県下松市宮前社宅一ノ一	日立製作所笠戸工場
池田滋	治10	京都府乙訓郡長岡町開田下町(神足一一六)	大有産業株式会社
梶原信男	電11	東京都杉並区萩窪三ノ一八二(398-18633)	日本郵船工務部副部長
吉見俊一	船11	横滨市南区庚台六五	いすゞ自動車藤沢製作所 (藤沢217-141)
河原一彦	機12	西宮市高木石沢町三三	新明和工業
池宮清二郎	船12	西竜荘会館内	田村香料株式会社
田村積造	化12	高槻市桜丘六五	

黒川誠一	坂上秀夫	遠藤常忠	大沢信一	福田正治	吉田達三	長岡振吉	川村宏	五歩一純郎	西堀清美	盛岡英次郎	池田稔雄	野崎善蔵	砂越竹夫	奥村正己	大島直義	乾島昌弘	京極与寿郎	松本裕太郎			
機13	機13	電13	船13	化13	化14	機14	機15	機15	電15	機16	治16	治16	化16	化16	航16	化17	化17	化17			
福井市宝永上町四一	芦屋市大榭町二六(芦屋21一六三〇)	大阪市阿倍野区長池町二	東京都杉並区東田町二ノ一五〇	京都市左京区粟田鳥居前町四七(吉田三二一六)	東京都豊島区千早町二ノ二六	名古屋市熱田区玉ノ井町一〇	豊中市栗ヶ丘町一三〇(豊中21六〇七二)	西宮市甲陽園東山町三二ノ一二	横浜市港北区日吉町一九(0461二五一七)	東京都目黒区上目黒八ノ二六六(4611二一六六)	名古屋市瑞穂区膳棚町二ノ三(881一三七五)	横浜市港北区高田町二七二六	加古川市加古川町構之口三七五(加古川四一二三)	東京都三鷹牟礼八八	大阪府松原市高見町八三	大阪府羽曳野市菅田三二〇ノ一三	北九州市小倉区白萩町三丁目三ノ三三	北九州市小倉区白萩町三丁目三ノ三三			
福井精錬株式会社	新明和産業	関電和歌山支店工務部	航空庁調査課	日本純良薬品株式会社	荒川林産化学工業株式会社	大隈鉄工所技術部長(取締役)	汎建製作所	京阪神急行車輛部第一技術課	東芝玉川工場	東京都千代田区大手町	東京都千代田区丸の内一ノ一	大同製鋼平井工場	東京都千代田区丸の内永楽ビル内	興亜石油株式会社製油課長	神戸工業大久保工場	東京都中央区京橋三丁目	片倉工業株式会社片倉ビル内	乾貴金屬商	阪大工学部応化助教	北九州市戸畑区中原生ノ浜四六	八幡化学戸畑研究所

通	化	精	電	冶	精	機	船	通	精	通	機	船	機	精	電	精	化
33	33	32	32	31	31	31	31	29	29	29	29	28	27	21	20	19	18

川崎市小杉二ノ二八八ノ一富士通信機青葉寮 (中原三九八)	松山市吉田 帝人忽那莊	岐阜県各務原市蘇原三 柿野町六軒西宮前 廻り西方六ノ一一一柴田方	吹田市南泉町二六三五	大阪市東淀川区下新在町二ノ五四(661七六五二)	石川島小松市符津町小松製作所第四寮	明石市大藏谷字大野二六八九ノ二	横浜市保土谷区南希望ヶ丘二	箕面市新福九七三ノ二二	岐阜市鷺山向井川航アバト五一五	横滨市保土谷区仏向町公園住宅九ノ三〇二	和泉市富秋町二六八助松園地一六ノ三〇三	北海道空知郡赤平市住友平和台左一五丁目	大阪市阿倍野区相生通三ノ一六(661二九五六)	大阪市内南区北桃谷町一九(南〇七九〇)	豊中市服部本町五一四六豊中アバト一〇ノ二七八	東京都千代田区丸ノ内一ノ一	神戸市東灘区魚崎町横屋三二八川鉄大和町アバト	千葉県市川市八幡町四ノ一三〇四
---------------------------------	-------------	-------------------------------------	------------	--------------------------	-------------------	-----------------	---------------	-------------	-----------------	---------------------	---------------------	---------------------	-------------------------	---------------------	------------------------	---------------	------------------------	-----------------

富士通信機	帝人松山工場	川崎航空機工場飛行機工場技術部	近鉄玉川工場(781〇九九五)	小松製作所	富士電機川崎工場検査課	新三菱神戸造船機械設計部 機械設計課	日立造船設計所開発設計部技術係	川崎航空岐阜製作所	東芝玉川工場計測事業部	早川電機本社工場研究庶務課長	住友炭株株式会社	辰己商会	住友金屬車輛鑄鍛事業部工務課	関西大学工学部機械	運輸省鉄道監督局民営鉄道部 電気課長	川崎製鉄計量器工場	防衛庁空幕第三課
-------	--------	-----------------	-----------------	-------	-------------	-----------------------	-----------------	-----------	-------------	----------------	----------	------	----------------	-----------	-----------------------	-----------	----------

兼清喜雄	山本信樹	米林外茂男	平野惠一	田端剛爾	木村征二	大島浩	田井英男	村井忠男	広瀬貞雄	谷垣兵一	丸尾能保留	酒井次郎	前沢祐一	黒木隆憲	金子忠男	打出英樹	佐藤毅	高橋雄二	
精35	機35	化35	精35	機35	通35	化35	治35	電36	熔36	治36	機36	電子37	熔37	熔37	精37	構37	通37	精37	
横浜市港北区篠原町一六九〇	逗子市逗子一一五六藤村方(逗子三三六一)	川崎市上小田中一八一旭ウ新城寮	堺市泉北郡高石町南五二三ノ七	愛媛県新居浜市前田町 敬天寮	神戸市東灘区御影町石屋三六〇	尼崎市西大島稲葉荘二ノ五〇(481一〇九五三店)	高槻市西五百住三〇〇松槻荘(高槻6一〇二四六)	東京都杉並区和田本町九八一 日立杉並独身寮	大阪市北区中崎町四八(371一八二二三)	神戸市東灘区魚崎町横尾浜横屋七〇五 川崎重工浜横屋寮 一〇一二二	横浜市港北区大豆戸町安山東芝菊名寮	北九州市八幡区大字熊手小窩田安川電機同和新寮	東京都大田区田園調布二ノ四〇 三菱日本重工第一桜ヶ丘寮	北九州市八幡区南陣山町(八幡6一一二二〇)	大阪市東住吉区西今川町五ノ二七	吹田市大字垂水 大林組花壇寮(三八一ノ五三七七)	伊丹市若菱町三ノ三九(伊丹七ノ七九)	大阪市東成区片江町三ノ三五(971一九五〇二)	
日立製作所川崎工場送風機設計課 (川崎3一三七五一)	日産	旭化成	阪大工学部超高温助手	住友機械	三菱電機	大阪大学大学院	松下電子工業	大阪大学工学部大学院	川崎重工	東芝	安川電機	三菱日本重工	黒木熔接	大阪大学工学部大学院	大林組本社 941一八三六	三菱電機	住友電工		

白井 達郎	機 37	延岡市山月町旭化成盛陽荘	旭化成
米沢 成二	精 37	池田市尊鉢八九	大阪大学工学部大学院
清水 郁生	學子 37	東京都港区芝白金猿町三九ノ八	ソニー
三沢 日出夫	熔 38	神奈川県逗子市古川電工逗子寮	
梶本 孝治	船 38	尼崎市西宮松武庫之荘一ノ一五(481-1891-5)	大阪大学工学部造船教室
〔薬学部〕			
抱 忠男	昭 29	大阪市旭区大宮西之町一丁目四一	田辺製薬学術部(231-1233-1)
三 枝 子	30	東京都杉並区堀之内一丁目一五八	エーザイ株式会社(929-1-1101)
浜 一 枝	30	豊中市穂積服部公園住宅九ノ一〇五	
坪 (旧姓) 井上 子	33	豊中市能野田旭ヶ丘公園住宅二二号五〇八	
森 (旧姓) 森川 子	37	京都市下京区七条通大宮西入	日本ブラッドバンク
森 泰子	37	神戸市東灘区御影町上東八三七	
大角 美佐子	37		
〔歯学部〕			
石沢 命久	32	大阪市福島区上福島南三丁目公園住宅三〇五	阪大歯学部矯正科
大工原 恭	38	芦屋市打出楠町八六ノ二一〇	
保母 武彦	38	西宮市南越木岩町五一古田方(西宮2-15669)	
〔経済学部〕			
田島 汎	28	東京都太田区雪ヶ谷町七二九産業住宅	住友特殊金属東京支店(241-1231-1)
土屋 直	29	芦屋市打出楠町五七	住友金属本社(東区瓦町四九三)

堀井昭彦	(工業教員養成所)	佐藤茂	一山幸代	横山保枝 (旧姓松木)	由比浜哲也	山本久夫	浜田彰三	岡田博司	広橋茂	山本光二	平田彰	森田幸夫	野田憲一郎	辻川直	木村祐一
		36	33	31	28	38	38	33	30	29	35	35	32	31	31
大阪市城東区野江中ノ町三丁目二〇		富山市巢穴前毎日新聞社富山支店	豊中市寺内一九一八	枚方市香里ヶ丘七丁目三六ノ六	西宮市甲子園三保町五五	高槻市南園町三三六	広島県因島市土生町 日立造船若葉寮	吹田市千里山一八九(381一七九一〇)	西宮市末広町五	名古屋市中区伊勢山町一二七 大和銀行名古屋寮	豊中市山ノ上宝通二ノ一七ノ三	堺市出島海岸通二丁目一六八	東京都太田区久ヶ原町六五四トヨヲ自販久ヶ原寮 (351一八一八一一六一一七)	沼津市三枚橋平町一〇ノ三 佐野信雄方	大阪市北区天満橋筋五丁目九五(351一八〇三八)
故人(六一年十一月 富士山にて遭難)		毎日新聞富山支店		大阪府立産業能率研究所 (941一八一五六)	寝屋川高校	銀行大阪支店 (251一五三九一)	日立造船 北海道託	住友信託本社店業務部	西宮市文書課	大和銀行名古屋支店	松下電器産業	東洋棉花	トヨタ自動車販売株式会社 直納部業務課	日本アルミ営業部 (39埠 10021)	

〔現 役〕

畑	原	石	粟	大	中	秋	吉	牧	岡	豊	木	大	桑	辻	高	横	宇
中		浜	原	笹	村	濃	川	野	久	坂	原	川	原		田	尾	野
	治	高	完	秀		俊	信	大	光	昭	秀	和	昭	光	邦	秀	雅
薫	左	明	治	一	稔	郎	也	輔	明	弘	行	秋	夫	弘	雄	次	明
	工																
	門																

岸和田市岡山町四ノ三	豊中市岡町北四ノ七五	大阪生野区舍利寺町三ノ一一五(716一〇六二)	大阪南区高津七ノ一五(641一八八七五)	尼崎市上ノ島北ノ市三八七ノ一小林方(641一五二〇八)	京都市北区平野鳥居前町三七(44一三三九一)	河内市西鴻池阪大寮(781一六六八〇)	八尾市竹洲三七八	豊中市桜塚元町一ノ八四(豊中2一九九七二)	河内市西鴻池阪大寮(781一六六八〇)	伊丹市千僧公団住宅八ノ一〇	箕面市半町六四三茶谷方(箕面五一四三)	枚方市渚阪大寮(枚方二五三五)	大阪市東住吉区駒川町五ノ一五	河内市西鴻池阪大寮(781一六六八〇)	大阪府西淀川区花川町南之町八〇	岸和田市樞田町二二一八(岸和田5一〇五七三)	大阪生野区南生野町四ノ一九
------------	------------	-------------------------	----------------------	-----------------------------	------------------------	---------------------	----------	-----------------------	---------------------	---------------	---------------------	-----------------	----------------	---------------------	-----------------	------------------------	---------------

医 専 四	工 応 化 四	経 四	経 四	工 船 三	工 通 信 四	工 構 四	医 専 二	経 三	理 高 分 子 三	理 生 物 三	基 工 電 二	理 化 三	工 熔 二	法 二	工 船 二	理 化 二	医 二
-------	---------	-----	-----	-------	---------	-------	-------	-----	-----------	---------	---------	-------	-------	-----	-------	-------	-----

佐々木 義弘	泉田 浩二	加藤 裕二	大野 義照	渡部 洋	糸井 文彦	細川 明彦	黒田 治朗	平川 義雄	辻 信男	平岡 諦	出雲路 敬孝	待嶋 浩
西宮市甲子樞五八第一甲子園住岩三二一	大阪市阿部野区王子町三ノ三七	神戸市東灘区大石東町二ノ八	河内市西鴻池阪大寮(781-16680)	豊中市岡上ノ町三ノ七一	尼崎市東園田町九丁目三九ノ七	豊中市螢ヶ池中町三ノ一〇二 西松方	堺市浜寺諏訪ノ森町西四丁目三四〇ノ三	箕面市半町七一五(塚正方)	大阪市東成区東今里三丁目一九(971-12554)	大阪市住吉区墨江東六ノ七二	神戸市灘区一五山町五ノ四六(85-15470)	大阪市東成区深江西五ノ一七
理生 二	工 一	工 一	工 一	理生 一	経 一	工 一	医 一	工(原子力) 一	工(原子力) 一	工(原子力) 一	基工 二	

編 集 後 記

。遅延を重ね、第12号は遂に三年間の合併号とせざるを
えなかつたことをこゝにお詫びしたい。

。富士山における堀井昭彦君の遭難は、かえすがえすも
残念でならない。こゝに新めて、彼の冥福を祈ると共に
御家族にお詫びする。痛ましい遭難を繰り返さぬ様、こ
の部報が反省の一助ともなれば幸いである。

。合宿報告、一般山行報告とも、頁数の関係から簡略に
せざるを得なかつた。詳細は部に記録ファイルが残され
ているので、これを参照されたい。

。ピーク29峰遠征記録は篠田部長及びOBの手により山岳
第LVII号及び山岳会報第二十八号等に出されていることを附
記すると共に、この度の第二遠征の成果を期待する。

。この部報を出すのに協力頂いた部長、OB諸氏並びに部
員諸君、特に広瀬OB、高橋OB、梶本OB、三沢OB及び現役
桑原、横尾、高田、秋濃の諸両君に對し感謝して記す。

。最後に各年度の編集責任者を記しておく。

- 一九六〇年度 高橋 雄 二
- 一九六一年度 三 沢 日出夫

一九六二年度 大川 和 秋

一九六三年六月 (大川和秋)

大阪大学山岳会「時報」第12号

一九六〇年四月—一九六三年三月

一九六三年九月発行

発行所 大阪市北区常安町三六

大阪大学学生課内

大阪 大学 山 岳 会

編集人 高 橋 雄 二

印刷所 大阪市西区江戸堀北通二 電停西

美 研 社

電話 四 五 〇 〇 八 番

冬山への誘い!



紅葉が木枯しに舞って落はするころ、冬はかけ足で歩
ってくる。一夜あければ銀嶺が若人をまねく冬山麓を

特 幸反

吉田製登山背統及入荷。
門田ピッケル アイゼン在庫
木エーブス・プリムス・スベア
インデル 各種船来ストーブ在庫。

シュラフザック

極寒用(2.3kg) ----- ¥4,500
(定価¥6,000)

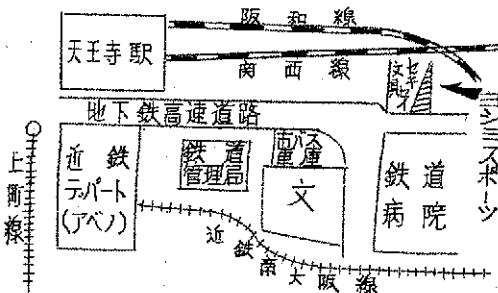
エアーマット

半身用枕付 ----- ¥1,050
(定価¥1,500)

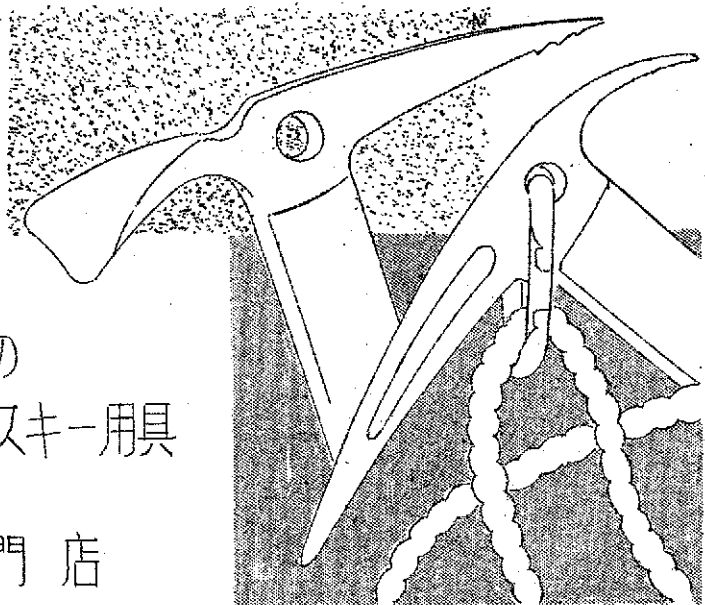
ヨシミスポーツ 用品株式会社

TEL(771) 9333

阿倍野区天王寺町南一丁目三番地



道順=天王寺駅東出口より地下鉄高速道路を東へ500米鉄道病院向い・距離=天王寺駅より徒歩4分



日本最古の
登山とスキー用具

専門店

大正13年創業

大阪・東京・福岡

好日山荘

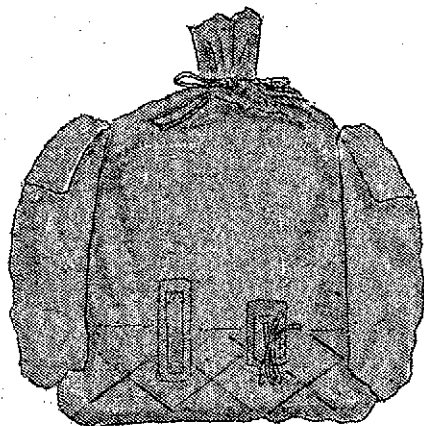
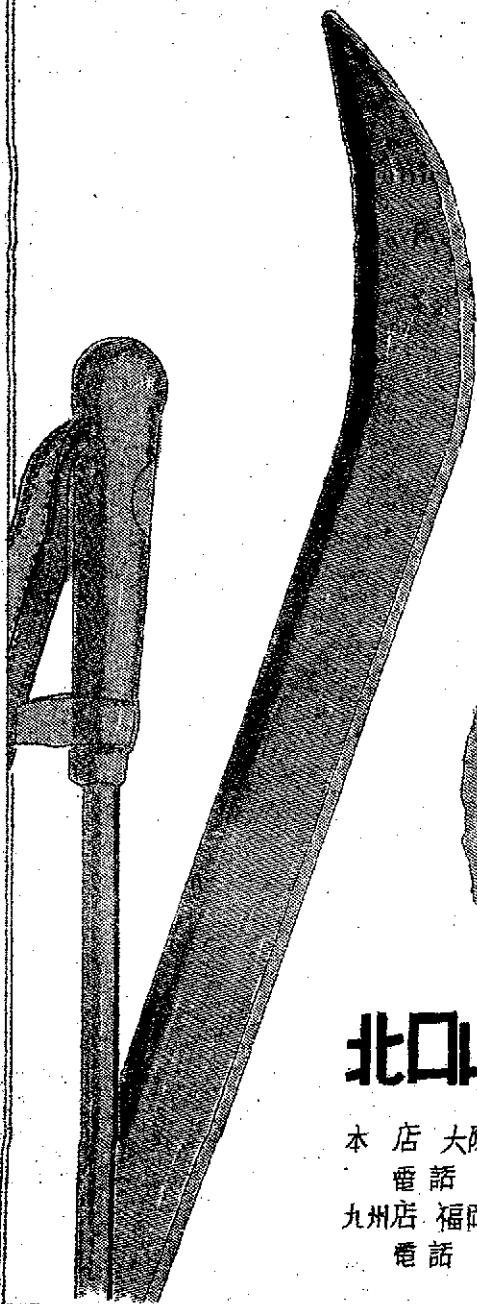
シモン・シヤルレ・ピッケル日本代理店
札幌門田作ピッケル・アイゼン 関西総代理店

大阪市北区老松町3-12

TEL (341) 7345

登山
キャンプ
スキー用品

『専門の店』



北口山スキー研究所

本店 大阪市北区・堂ビル裏・回生病院北側
電話 ⑥ 9593 ③4 3240番
九州店 福岡市蓮池町・善導ビル一階
電話 ② 6097番

スキーシーズン来る!!

スキー用品は

良い品が安い
安心して買える
楽しく満足に買える
自由に選択できる

セルフサービスの店

スタースポーツ
スポーツフェア

スキー用品なら なんでも揃う

スタースポーツ

大阪市東区住吉町38(松屋町筋・内久宝寺バス停前) TEL(761)6857

スポーツフェア

大阪市南区心斎橋北二丁目 TEL(25)2824代表

ニーパーター会に御入会になれば 特別に便宜が得られます

◎各大学山岳部の

御用を承っております

パン

食で

いつも

健康



パンの王様



神戸屋パン

本社工場 大 阪・福 島・面 通(441) 7791
西淀工場 大 阪・西淀川・御幣島(441) 0712

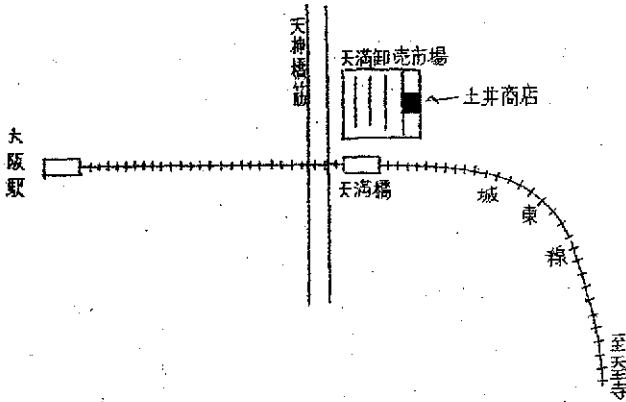
最少量にて

最大のエネルギー源の

保存食料品の

御用命を！

登山携行食料品 (卸価格)



乾物 食料品卸
佐詰



土井商店

大阪市北区池田町21 天満卸売市場内 電(351) 5975

山靴と

オールスキー用品取扱

学生さんには特に勉強致します。



創業27年

よい！ 安い！ 親切！

ナルセスポーツ株式会社

大阪市福島区鷺洲南1丁目15

電話 大阪(451) { 3019

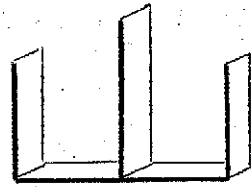
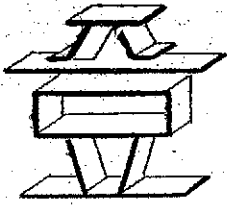
袋詰合せ・携帯食糧品

菓子問屋

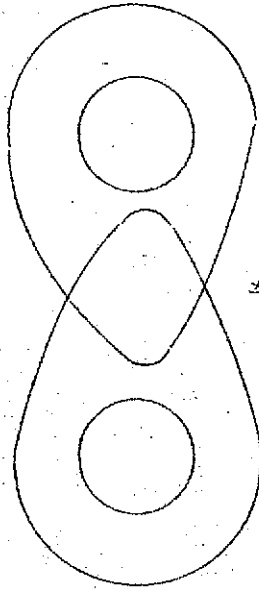
大梅

大阪市北区池田町21

電話 (351) 6394



用 具 店
専 門

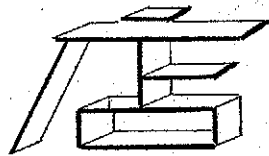
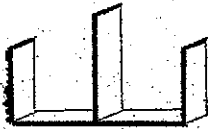


登山靴の
修理の
専門店

カーテン・
カミド
ナ
ザイル
他
各種
用品

夏山用品なら

何んでも揃う



大阪市北区普根崎上1-24
TEL (34) 4 1 9 2



世界の美津濃が生んだ——'64型競技用スキー。あなたの技術をフルに生かすスキーの決定版です。

美津濃

競技用スキー

- ゴールドメダル(スラローム) ¥16,000 ¥17,000 ¥19,000
- シルバーメダル(コンビ) ¥16,000 ¥18,000

両面ヒッコリースキー(PAT No.482499)

ヒッコリーパックスキー

¥ 6,500 ¥ 6,800 ¥ 8,000 ¥ 9,000 ¥ 10,000

本店 大阪淀屋橋・東京麹 神田小川町

全国有名スポーツ用品店・デパートで販売しています。

大阪大学山岳部 山田清則